

黒田健次

其 一

腐つても花咲くと唄ふ麴町の上二番町に、一際すぐれて霜夜の按摩さへ知るべき殿めしの邸宅は、青丹よし奈良の古都の片邊に生れて大和一圓の出世頭、戊辰の頃は錦の御旗を荷いで鐵砲疵の二つ三つ受けし手柄とて、夙より地方の縣令を勤めしが、其後また召されて元老院の議官となり、元老院つぶれて四五年は閑散無役の身なりしを、草の葉蔭も漏れぬ大御代の恵みに照らされて、今は錦鶏の間に籍を連ねるのみか、冠木門の柱に打ち附けたる表札の文字さへ、佐原義伸の四字の頭に從三位男爵といへる五字をいたゞいて、時めく光りは、神前の常夜燈よりも輝きぬ、

あはれ昔は草を敷寝のさんびん奴、中年は一六勝負の死に損ひなれば、老の白髪に春來し今は佐原男爵と呼ばれて、錦鶏の間といふ功臣優待の末座を賜はりつゝ、餘命を書畫と骨董の間に送る

身の冥加も、馴れては乃公こゝに生れながらの豪傑を氣取りて、河和泉三箇國より生身の官吏は宛がら子分の如く、奈良郡山さては五瀬八木高田高取の近在より上京する書生は、ともかくも當家に面さし出して挨拶せずば殆ど郷黨に幽されざるの勢ひ凄じく、門前は常にお髭の塵を掃ふ人の出入に絶え間なし、

されど今日は客來を謝絶する日とて、主人の男爵の一室に打寛ぎつゝ、色香なき半婆なれど精謙の妻は堂より下せぬ今の夫人と差對うて、四方山の浮世談話も果てゝ後、おもはず故郷の昔を語り出でて人知れぬ笑を漏らしながら、

「ねエ、和女は何と思ふか知らんが、どうも國から出て居る奴に、官吏でも書生でも斯人といふ、末に見込のある者は一人もないよ、なぜ畿内の人間は無効だらう、せめて乃公の半分まで漕ぎ付けて來る奴がありやア少しは頼もしいが、見渡すかぎり、いづれも弱卒どもで、實に後を振り返ると心細いやうだ、大將たゞ一騎で、つゞく勢がないから」

次 健 田 黒

いひつゝ目を閉ちて片手の指を折るは、まづ彼と彼と斯人ならんかと思ふ三四人、それさへ名乗を揚げて天晴れ呼び兼ねる主人の顔を、流石に連れ添ふ上は我身も同じ夫人の口惜しさ、やうやう膝を進めて靜に語り出しぬ、

「左様で御坐いますね、書生の方は存じませんが、官吏には貴方、山田やら塚原やら、中井やら、其外にも五六人」

「なアに和女、山田は今の警視ぐらゐが過分で、もう前途に馬も舟もないよ、塚原は些少やりさうだが、これも馬車には乗れまい、奏任の一等か勅任の端くれが關の山だ、中井や其他の徒輩に至っては、まア年俵の千圓か千五百圓も取れば出世の窮極さ、だから最早役人を無効として、まづ、これからア書生の方だね、なるほど今日では大學出身の若いのが三十人近くもあるから、出れば此中から出る筈だが、儲どれが人物になるといふ確固な色も見えないね、それに就いて乃公が常に惜しく思ふのは、和女も知ツてるだらう、あの黒田健次といッた奴よ、あれは高等學校に居る時分よく来た書生どもの中では、第一の無遠慮者で、すゐぶん横着らしい顔をして居たが、年の割には何處となく一風變ツた面白い處があつたよ、あゝいふ奴が失敗せずに遣り遂げると、きツと役に立つもんだがね、どう爲居ツたか、大學の初學生となツた秋ごろ、ふと居なくなツて、同胞のやうにした友達にも音信不通、まして、其他の癡黨には影も見せないさうだ」

「なるほど、さう仰しやれば、いつも裾の破れた袴を引き摺ツて目の眞圓な色の黒い、をかアしな顔をして」

「むゝさうだ、それだ、五六人で來ても乃公の前では皆うじ／＼と小さくなツて居る中で、彼奴一人が肩を怒らかして無闇に饒舌りながら、菓子でも何でも、一番に手を伸ばして掴んで食ツた、あの横着者、あれが前途に見込のあつた奴で、黒田健次といふ郡山在の生産だ」

をりしも取次の書生おそる／＼襖を開いて一葉の名刺、しかも半紙八截の表に鉛筆もて走り書の名刺一枚を差出して、

「このもの何と言ツても玄關を動きません、もし御不在なれば、奥様にでも御目にかゝりたい、お國の産だと申して居りますが」

いひつゝ差出すを夫人が受取ツて男爵に渡せば、おもひきや今も今として横着者の手本に上りし「黒田健次」と認めぬ、

諺にいふ噂の影とやら、その黒田健次が背に數枚の獸皮を負うて玄關に突ツ立ちしまゝ、叩き出すとも出まじき顔色と聞くより男爵おもはず高く笑うて、

「あはゝゝゝゝ來居ツたかい、妙だな、奇だ、むゝ構はないから此席へ通せ」

夫人は其まゝ席を避けて、主人の男爵たゞ獨り悠然と半白の鬚髯を捻りながら、待つ間程なく入り來りしは例の黒田健次、相も變らぬ横着の面がまへに態と一種の愛敬を浮べんとすれば、あは

れや汐入村を出奔してより一日一夜の間うろく彷徨いて、風に吹かれ犬に吠えられ腹は減る脚は勞れる目は眩む、ましてや裸一貫そのまゝ浮世の眞只中に飛び出したる上は、さすがの無頓着者も心にあせり氣を揉んで、さんくの憂き苦勞に聊か勇氣おとろへけん、悄然として坐につきながら元來したゝかの根性骨はツと取直して俄に容を改めつゝ、

「え、其後は打絶えて、何とも、はや、實に申譯の次第も御坐いませんが、まづ御健勝で」
いひつゝ幾度か慇懃に頭を下ぐれば、男爵つくづく見遣りて首肯しながら、

「む、さうだな、二三年も來なかつたが、全體どうしたんだ、しかし元氣で宜い」

「はい、有難う御座います、何分あの通り學校の方を放棄して以來、故郷の者へは一切、第一御當家にさへ久しく御無沙汰いたしました仔細は、別に、ゆる／＼申し上げますから」

「ゆる／＼別に言ふも宜いが、さしあつて今は何處に居るな、何をして居る、その風ぢやア相變らず元の黒田健次だな」

問はれて右の平掌に思はず自己が額をピタリと叩きながら、かくても更に屈せぬ大口あいて高く笑ひぬ、

「あは、／＼、／＼いやどうも、お尋ねにあづかつて黒田健次め、汗顔に堪へません、實は一昨日か

ら無宿の風來坊、閑下あはれみ給へ、四十餘時間のあひだ、いまだ一飯も下さりませんから、殆ど目が眩んで氣が遠くなつて物を言ふ毎に腹の底へ徹へます、願はくは暫く御臺所の片隅へ座を賜はつた後、あらためて恩顔を拜したう御坐います、嗚呼もう一寸も動けません、わざと勇を鼓して笑つた今の笑顔も、實際は五臟六腑をしぼる悲鳴と一般、偏に御憫察を仰ぎます」

いひつゝ身を捻つて疊を掴むが如く兩手を抛ぐる風情、あくまで飢ゑて堪へ難きに似たれども、こやつ元來これほどの艱難に弱る奴ならねば、心のうちの一物たしかに膽魂をおちつけて、そつと顔越に男爵の顔色を見ながら、時勢おくれの馬鹿豪傑め、封建制度の形見に残る髭むしやめ、

なんど吐すだらう、いかに思ふだらうとは、黒田健次、さても／＼油断のならぬ男にぞある、男爵は今更に驚ける體、つらく／＼黒田の横顔を差窺うて、

「ひどい奴だな、それまで辛抱して居つたのか、ともかくも臺所へ行つて何か食へ、しかし貴様、三年ぶりで今日來たのは何の用だ」

「はい、實は數年の轆轤落魄も、はや前途に一抹の希望も御坐いませんから、無念ながら浮世の敵に背後を見せて、敗軍の將とは恐れ、めちや／＼に手疵を負うた敗軍の卒が陣笠ぬいで故郷へ遁げ歸る、その旅費として、相當の代價で御買上を願ひたい品を持參いたしました」

「意氣地のない事をいふ奴だな、貴様三年前に來た頃は、それほどの弱蟲でもなかつたに、しかし買へといふ品は何だ、ともかくも見せい」

いはれて蟹の如く次の室に這ひ行きつゝ、やう／＼持ち來りしは川上三吉が熊野より背負ひ出でし獸皮のうちの六枚、しかも汐入村を梵天國のをりから行掛の駄賃に盗み出せし品ながら、しほしほと殊勝氣に男爵の面前へ擴げつゝ、

「これで御座います、これは拙者の伯父で吉野の山奥に居りますものが、死んでも差支のない不肖の甥を人間と心得、都門寒夜の讀書、あゝ定めて冷えるだらう、身を大切にしろつて、近來わざ／＼夜着の代用に贈りくれました品で、山家生育の芳志を思へば一入この身に徹へますが、楮どうも斯る場合、眼前の危急に迫られて萬やむを得ざる次第、御推察を願ひます」

言ひ終つて身を縮めつゝ差俯けば、主人の男爵も何とやらん哀れを催して、

「むゝ鹿だな、牡鹿の生皮は随分敷物になるから、なアに貴様のいふ値よりは善く買つてもやうが、さて其金を旅費として今更ら國へ歸る、國へ歸つた上で何か別に目的でもあるのか、どうしても踏み止ることは出來んのか」

「はい、たとひ火水の中でも踏み止つて效さへありやア、餘勇なほ決して他人に劣らない覺悟で、

強情我慢の點に於ては郷黨第一の黒田健次を以て自から任じて居りますが、愚性みだりに凡俗を嘲つて飛び跳ねたる報い、竟に事は心と違ひ身は世の逆流に立つて四面楚歌の聲、もうかうなツた曉は」

「どうなツた曉だ、まづその仔細を言へ、その仔細に依つては、随分また力を添へてやるから」

「はい、有難う御座います、そいぢやア、殆ど死人の衣裳を縫ふに等しう御座いますが、御言葉に甘えて過去の失敗歴史の一卷を、そろ／＼讀み上げますから御聞取の上で、もし萬に一つも、健次め、まだ蟲の息があると思召さば、憚りながら御同郷の御慈悲を以て、一滴の御名薬を冀ひます、しかし先刻も申し上げました通り、四十餘時間の空腹で、どうも堪りませんから」

「むゝさうだツたな、早く臺所へ往つて飯でも食へ、しかし一度に食ひ過ぎると却つて不可んぞ」

明治の今日に戰國策士の腸を持つて、或は水の流るゝ如き洒落滑稽を演ずれども、或は驕の如く、餡の如く、べた／＼と喰つては始末に終へぬ當世無類の難物、よく敵を知り相手を謀つて黒白の裏面は猫の目に等しく、變るが早い品玉の頓智頓才、また有馬筆の出たり還入つたり出沒ふしぎの横着物、ここにこの黒田健次が三年無沙汰の佐原男爵が面前へ、きよろり茫然たる

面を差出して忽ち泣くが如く訴ふるが如く空腹かゝへて口説き立てながら、言行ともに輕薄の小人とは見えす、むしろ逆流に失脚の奇男兒と見られたる腕前、もとより當世尋常の書生には稀有の男なりけり、

ともかくも臺所に行くと、髯面の願もて指圖せる男爵の言葉に、あくまで弱り果てたる體の黒田健次、さも嬉しげの顔色あはれを催して力なげに身を起し、やう／＼其座を迂り出づるや否、この横着物すでに淺黄頭巾を脱いで、冷飯か炊立か俵も今日の茶は何だらうと、四十餘時間の飢に屈せぬ目色を働かして、わざと玄關の取次書生を呼んで、苦笑ひしながら、

「君、どうか臺所へ行つてね、下女に客膳を命じ給へ、主人公は、久しぶりだから牛肉でも何でも甘いものをウンと食へと言はるゝがね、その客は僕だから別に大した御馳走は入らんよ、しかし冷飯と茶葉ちやア困るから、其邊は貴公よろしく雅俗折衷體で號令をたのむ、いくら遅くつても出来るまで堪忍するから、随分、早くないやうに、多謝々々」

喰はぬ前から禮を述べて此方の一室に悠然と差控へぬ、やがて出来ましたの案内を聞けども、健次さらに騒がず、腹中の蟲を叱りながら靜に起つて臺所へ行き、會釋もなく板の間に据ゑたる膳部を提げて次の室の疊の上へ運びながら、見れば朝の殘

んの味噌汁に青菜の立遊ぎ、弾けば憂と音のすべき乾鮭の鹽びき、あぶら味ばかりの牛肉少々を皿に盛つて、その片影に死骸の狼藉たるは蓮根と芋の煮ころがし、ぶんと鼻を衝く出し置きの澤庵漬のみ山の如く、大土瓶の腹を撫れば悲しや茶も半温の無禮至極、さてはおのれ、乃公の破れ布子一枚を見て、客膳のうちの下の下に安く扱ひ居つた返報、しかも悉く残物を掻き集めて犬の如く扱ひ居つたる腹癒せに、せめては飯を思ふまゝ詰め込で驚かしくれんと、兩眼くわツと見開き五體を整へて箸を持つたる勢ひは、汐入村に一騎當千の名を得たる大食家、ましてやこゝに四十餘時間の受空胴を押し据ゑて、下女どもが物蔭より差覗くを尻目に加えながら、果は七人前の飯櫃に六分ありける底をカチ／＼と叩きあげぬ、

「いや、どうも馳走だつた、これで少々腹中は出来ましたが、衛生上の注意、食後の藥物、蜜柑か何か御座いませんかな」

とても叶はぬ事と知りながら態と控へぬ減らす口、あくまで不平の顔色を現して臺所を立出でし後には下女ども鹽花を撒いて鶴龜々々といひぬ、

食事が済めば直に再び御用ありと、取次の書生が言葉に黒田健次またもや罷り出でて伺へば、居室を替へて奥まりたる茶室のうちに、主人の男爵のみと思ひの外、夫人もろとも待ち受けて亮爾

む體、いはば娯樂半分おもしろき男と見らるゝ風情に、畜生め、ふさけた夫婦だ、古道具屋の店
晒しに煤ぼりかへつたお雛様が何ぞのやうに、二人とも老年をしやアがツて、しかし御大層な面
構で其ふさげた處が此方の利益、男爵だよ華族だよと火急出世の鼻頭に高慢のぶらついた處が與
みし易き此方の金的、今に見ろ、逆さまに弄んで驚かしくれるぞと、どこまでも横道の圖太さ
根性骨を隠して、さらに慇懃の挨拶、まづ夫人の方に頭を下げぬ、

「え、奥様で御座いますか、どうも斯様な見苦しい風俗をいたして、はい、はい、いや恐れ入
ります、かツて學校に居る頃は、をりく伺ツて御深切な御言葉をいたさきながら、爾來三年うち
絶えての御無沙汰、それにまた今日ひよツくらと、實に謝罪の申し上げやうも御座いませんが、
はい、はい」

いひつゝ左の手に脇腹を押へて俄に顔を皺め、眞丸の目を細くし八の字眉毛を寄せて妙な身振を
しながら、

「一日二夜の空腹へ突然に御馳走を詰め込んだ故か、あ痛、たゝゝゝゝ何だか、どうも變に痛み
ます」

男爵おもはず笑うて葉巻の烟に咽べば、夫人も笑聲を忍んで膝を動かしながら、

「甚く痛めば御藥でも、あげようかね」

「いえ、有難う御座いますが、なアに大丈夫、申さば久しく乾き切つた鉢皿へ熱湯を注いだも同
じ事、たゞビチ／＼の龜裂の入るやうな音がするばかりです、あゝゝゝゝゝゝいや痛い、あ痛、
なか／＼痛いぞ」

今は両手に兩の脇腹かへて前に伏しながら、ウン／＼呻るが如き風情に男爵夫婦も思はず吹き
出せしが、また氣遣うて俄に人を呼ばんとすれば、健次たちまち片手を頭上にあけて頻りに打振
りぬ、

「恐れ入ります、何それでは却ツて恐れ入ります、どうか此まゝ、大した事で御座いませんから、
とはいふものゝ頗る痛い、あ痛、たゝゝゝゝゝゝ」

「しかし貴様、無理に堪忍しても不可ンよ、まア今夜は泊めてやるから早く寝ろ、むゝ、ひどく
痛めば近所の醫者でも呼ぶが宜い、萬事また明日聞くから」

「はい、有難う御座います、併し先刻お願い申し上げた獸皮は、いよ／＼御買上げ下さいませう
か」

「をかした奴だな、腹痛の最中で、そんな事は明日でも宜からう」

「いえ宜う御座いません、たとひ腹が痛んでも皮が破れても黒田健次、まづ今日この面を押し拭うて伺つたからは、お願ひ申し上げた事の御聞き濟みになるか、ならないかの御言葉だけでも」

「は、は、は、どうしても貴様は變つた奴だよ、それでは、あの獸皮を買つてやるから、國に歸る事は兎も角も見はせろ、む、乃公が仔細を聞いた上で、また踏み止る工夫をつけて、どうかして遣はすから」

「へい、ちやア幾何に御買上下さいませ」

「え、うるさい、貴様いくらに賣る心算だ」

「大鹿の皮が三枚、お高う御座いませうが、呉れると思召して、どうか一枚を十圓づつに、あ痛、た、は、は、は、あとの、あとの三枚は逆も御用にならない下等の獸皮で御座いますから、これは其加のため召使の方に進呈致します、あ痛、あ痛」

「む、どうでも宜いから、早く書生部屋に行つて寝ろ、馬鹿な奴だ、四十餘時間も腹を空かして、また俄に腹の痛むほど食ふといふ事があるか、身體を大事にせんと不可ンぞ」

三十圓の聲を聞くより始めて身を起し、やう／＼玄關の此方なる書生部屋に來りし黒田健次、眞實さらに蟲腹一つも痛まねども、まづ今夜一泊の狂言かた／＼思ふまゝに寝飽きて、草臥の骨休

めやら久しぶりに安樂の夢やら、また猶も此上に男爵を説き付けて自己が身を立てん考慮やら、

うちつゞきし數年の懺悔落魄に身も心も盡き果て、もはや前途に希望なければ無念ながらも國に歸らんと、三年無沙汰の面おし拭うて哀れに泣き込みしかど、眞實さらに歸國の念なければ、踏み止れよ一臂の力を貸さんといふ佐原男爵の言葉を、もとより斯くと待ち受けて此一言を聞がんがために來りし横着者、さながら轍馬の急を救はれしが如く、やう／＼愁眉を開いて幾度か恩を謝し、果は掌を合はして拜まんばかりに喜びながら、なほも此上に野心の根を固くせんとや、わざと虚病を起して其夜一泊の終夜、久しぶりの手足を伸ばしつゝ肝膽を碎いて組み立てし前後の仔細を、その翌日に眞言空言うちまぜて巧みに説き立てしかば、さすがの男爵夫婦も我を忘れて、いつしか風來の一書生黒田健次が掌中の物となりける、

黒田健次 御恩に縋りて歸國の念を断ちし曉は、もはや旅費の必要もなければ、多年の落魄を重ねて御覽の如き破帽敝衣は、當世に處して聊か事の難きを憐れみ、願はくは閣下の御垢付さては御褻衣にても賜はりたく、また不肖ながら都門にあること十年の健次、海山はる／＼ぼつと出の書生にもあらざれば、こゝに再び踏み止らん萬事の用意として、まづ鹿皮三枚の賣價そのまゝに賜はりた

しと、三寸不爛の舌を舞はして憚りもなく説き立てし度胸の圖太さに、佐原男爵も結句おもしろき奴とや思ひけん、乞ふがまゝに着古したれど黒魚子三紋の羽織に米澤の小袖もろとも、鹿皮一枚を十圓として三十圓の金子あはせて抛け出しつゝ、さらば當分それにて汝が思ふまゝの策を立てよ、その策もし我意に叶はゞ更に力を添へんとぞいはれぬ、

猿も衣裳の世の中に先づ身の風俗は出来たり、されどこの金子いかにして何處に働かさん、正に我身の運だめし腕だめし、いはゞ男爵の試験に逢うて行末の吉凶禍福これより生ぜん、さすがの黒田健次も平生の投抛根性には似ず、玄關の此方なる書生部屋に退りて三十圓の紙幣を膝前に置きながら、目を閉ぢ雙腕を組んで沈思黙考の折しも、例の取次書生が入り來り頻りに怪しむ風情を、健次じろりと見遣りて片頬に笑を浮べつゝ、

「やア取次先生、どうだい、こゝに主人公から貰つた三十圓といふ金、うまく何とか費途があるまいか、大した愁もないが、せめて之を一週間で千圓にしたいのさ」

「あはゝゝゝ、戯言を、三十圓が七日の間で千圓に」

「これさ、笑ひ給ふな、千圓を握む資本に三十圓たア過ぎる位だよ、しかし、まだ十錢が十個で一圓といふやうな、太平無事の君なざア笑ふのも道理だ、時に君は何處だね」

「大和の高田です」

「はゝアそいぢやア同じ穴だな、僕も此家の大將と同郷だから、まんざら他人でもないさ、爾來お心易う、東京へ來てから何年に」

「さうですな、もう五年になります、御當家へ來て三年ほどに」

「ふむ、ちやア此邊の萬事に明るからうが、どうだ君、近邊に上等の下宿屋はないかね、尤も當家に近い場所だ」

「いひつゝ、膝前なる三十圓のうちより、一圓幣紙一枚を撮み出して、何とやらん會釋しながら、甚だ失敬ですがね君、煙草料の補足にでもして下さい、君の目ぢやア僅少一圓でも、千圓にしようといふ僕の目ぢやア、ちよいと七十圓の進物だ、あはゝゝゝ」

共 二

づう／＼しき野面のツそりと牛の如き根性を備へながら、またその機敏さは風に翻つて燕の飛ぶに似たる黒田健次が心のうち、もはや佐原男爵夫婦を我掌の物として半歳一年このまゝ此家に喰ひ潰すは何の苦もなければ、長居して裾から襤褸の下り藤を見られんよりは、世諺にいふ前途

を通る遠目の傘の善い女房、わざと放れて絶え間なく付き纏はんと、取次の書生に一圓の烟草料を呉れて俄に馴染みつき、最も當家に近き上等の下宿屋を問へば、幸ひ麹町五丁目谷より平河天神の社後へ通ずる新道に一軒ありといふ、さらばとて黒田健次まづ立出でて其家を窺へば、やう／＼此ごろに新築せしが如く、かつは土地がらとて焼芋書生の巢にもあらねば、表札の番地と姓名とを覚えて立歸るや否、さら／＼と往復葉書に認めたる文句にも、此奴すでに野心の一端を
含みける、

當家より一人下宿人を差向けたく候間、上等の空屋有之候へば至急通知あるべく候、

上二番町佐原男爵家より

殊更に自己が名を書かず、たゞ佐原男爵家よりとして差出せし葉書一枚は、すでに三四箇月の下宿料を願の先に追ッ拂ふ價値ありけり、
さればこそ、見苦しけれど私方にては第一の上等室、まづ御見分下さるべしとの返書忽ち來りて、しかも其文句の極めて慇懃なるを見るより、黒田健次おもはず笑を浮べぬ、

いざや照ツても降ツても半歳たしかに安居棲息の家は出來たり、懐中には先づ當分の小遣にすべき二十九圓、衣服は着古しなれど假初にも華族の小袖、これを仕立屋に頼んで我身の着丈に合はしたれば、昨日まで路頭の乞食に等しき黒田健次も、今は忽ち紳士めいて鼻下の八字髭のみ火急細工にならぬを恨みぬ、

さらばとて又もや男爵夫婦に説いて、言葉たくみに夜具一組を借り出しつゝ、これを積み行く人車料は僅五六町の道程白銅一個で済むべきを、わざと當家の抱へ車夫を招いて二十九圓の中より一圓紙幣、さながら木葉の如く投げ遣りて笑を寄せつゝ、

「甚だ御苦勞だがね、どうか此夜具を平河天神の社後で菊田といふ下宿屋までちよいと人車に乗せて行ツて貰ひたい、なアに主人公は今日一日、決して出られないと聞いたから大丈夫さ、よし知れたツて別に乗馬もあること、何の差支があるものか、何といふものか、わづか五分か十分かかりやア済む事だもの、また此後は僕も絶えず出入して、いろんな事を頼むから、これで今夜一杯飲んでくれ、お交際かたがただ、そしてね、下宿屋へは、たゞ二番町の佐原家からといやア、先方で承知してゐるから、そのまゝ夜具を置いてくれば宜いのだ、よろしく頼んだぜ」
下司は固より鼻頭の利慾一片、時ならぬ役徳、降ツて湧いたる金一圓と喜び勇んで曳き出す後

姿を、健次つくく見送りて舌べりり、これも成就、よし、萬事支關をあづかる取次書生に一圓と定紋つきの人車もろとも車夫の彼奴に一圓、あはして僅二圓の金が此乃公を兎も角も男爵家に由縁ある人としてくれた、定めし下宿屋ぢやア近來無類の御客様と待つてらだらう、あゝ安いものだ、たつた二圓で序幕すつかり無事に勤めたぞ、さアこれからは河童の何とやら、ふゝ面白くなつて來居つたわい、それにつけて思ひ起すは汐入村の三人、川上は儲おいて、眞面目くさつた倉橋の馬鹿骨折と、あの上田の仙人殿が何をして居るだらう、流石にかうなると懐中の此金を半分やりたい心地がする、あゝ人間は弱いものだ、

麴町五丁目より平河天神の社後へ通ずる新道に、菊田とて此ごろ新に構へたる下宿屋の亭主は、聞き及ぶ上二番町の佐原家より往復葉書もて上等の空間ありやと問はれし時、まづ男爵といふ二字の有難味に皿のやうなる目が昏れて、かはいや或會社へ通勤の洋服男が占領せる奥の一室を、言葉たくみに他室へ追ひ拂うて俄に掃き清めつゝ、床には應擧の贓物、さては勸工場で求めたる伊萬里の茶器まで取揃へて、見苦しけれど私方に第一の上等室御坐候との返書を差出すや否、男爵家の定紋ついたる自用車に抱へ車夫が積んで持ち込みし夜具一組、さながら福の神の如く受

取つて待つ程もなく、

「おい菊田といふのは、お前の家かね」

聲は正しく本尊と亭主飛び出でて迎ふれば、黒田健次悠々然として右にステツキを突き立て、左にマニラの葉巻を持ち添へ、例の着古しなれど元來が華族の料を仕立て直せしかど、黒魚子の三紋に米澤の小袖も身に合うて宛がら無頓着に着馴れたるが如く、しかも其三紋は先刻ちよいと見し自用車と同じ紋所、また生れついたる横柄顔は猶更ら時に取つての程もよし、

「下宿人は自己だがね、當分まア面倒を見てくれ」

いひつゝ案内に引かれて傍目もふらず、そのまゝすいと打通りぬ、

茶、菓子、煙草盆、まづ此三品を下女にも持たせず、亭主みづから運んで一入さらに慇懃の體な

り、

「えゝ御召さへ御坐いますれば、すぐ御邸へ伺ひますに、わざ／＼御書面を下さいまして恐れ入ります、御覽の通り、新築いたしましたばかりで、何分まだ此商業にも馴れませんから、どうせ不行届も御坐いませうが、以來よろしくお願ひ申上げます、へい、へい」

いひつゝ頻りに頭を下ぐれば、黒田健次ちよいと會釋しながら室内を見廻して、

「むいそいちやア、初めて下宿屋をしたのだね、しかし下宿といふものは自己も初めてだから、互に初心同志だ、あはゝゝゝゝ萬事たのむよ、自己は佐原の親類の者だがね、するぶん馬鹿を盡して、さんさん厄介をかけた報いが、とうとう下宿屋へ流罪の身となつたのさ、あはゝゝゝゝむゝ此室は八疊だね、なアに八疊ありやア寝起きに十分だ、どうせ今まで通りの贅澤は出来んから」

いひつゝ懐中より一回紙幣六枚、天にも地にも唯これ二十八圓の内なれば、さながら身を切り骨を削るの苦痛あれども、さらに顔色にも出さず、そのまゝの片手掴みに紙屑の如く抛け出しながら、

「今も言ツた通り、外に些少の不自由もないが、何分しばし流罪の身で、どうも自己の小遣が淋しいから、それで堪忍しろ、茶代だ、そして其うちの一圓を下女に遣ツてくれ」

いひつゝ茶を一口ぐいと飲んで俄に顔を皺めながら、いかに左遷の身なりとも、こんな番茶は初めてだ、噫なさけないといふ面相の横着さ、あくまで一時落魄の貴公子を學びける、

其 三

黒田健次が淺黄頭巾を被ツて下宿せる菊田の門口に、辻人車ながら高臺の黒磨きを乗り捨て、約束の貨錢に幾何の酒料を添へけん、しきりに喜ぶ車夫の聲を聞き流して足早に入りしは、年のころ十九か二十歳ばかりの女、このまゝ斯女を美人といふ名稱の下に置き兼ねれど、四つの面道具晴れ渡りて當世風の丸ぼちやに、遅れ毛なしの鼻筋すつと立ち伸びたる風情、わけて鬚づらの横顔に一段の愛敬を浮べて、手足の肉置ゆたかに指の爪うすく、しかも飽くまで浮世馴れて男殺しの急所どこやりに備はりたるだけ、また物腰に品位を缺いて衣裳風俗も優美しからぬは、いづれ人出入の多き家に身を置くものならんが、言葉さへ普通よりは癩走ツて高く通りぬ、

「伯父さん、今日は」

伯父と呼ばれたるは下宿屋の亭主、それと見るより片頬に笑を浮べながら、箱火鉢の前に坐したるまゝ起たんともせず、

「お島か、よく来た、さア此方へ寄んな」

黒田健次　わづかに手を伸ばして坐を示せば、會釋もろとも傍の坐蒲團を引き寄せて、裾捌きの調子輕げに身を据ゑたる風情、どうしても娘氣質一片の女にはあらざりける、さりとて花柳の巷そんじよ其處らに育ちし女とも見えす、まだ失せぬ初心の印は自然に生え止りし額際に残れり、

「御儀かたん、もつと早く来る筈でしたがね、何分この頃は忙しくつて、少しも出られないンですもの、時に伯母さんはい」
「む、妻は今朝から不在だ、しかし、よく来てくれた、まア此通り、どうか、かうか出来上ったもの、始めての營業で萬事に馴れないから、まだ善く加減が分らないよ」
「さうでせうとも、どうせ始めのうちには、しかし伯父さん、土地が宜いから種も宜いでせうよ、讀賣壯士に毛の生えた人間や、すれつからしの喰ひ潰しや、ぐわらぐわら書生の猪鼻助なンかど来なくつてねエ」

「さうよ、ほんとに和女のいふ通り、土地がら種宜い證據にやア、お島、喜んでくれ、開業すると直ぐ三人の客があつてね、どれも木綿の兵児帯ちやアないのさ、會社とか何とか皆それ／＼勤め向の人で、中にも昨日の朝から来た客は、第一等の上客、華族様だぜ、む、華族だよ、上二番町に佐原様といふ男爵があつて、わざ／＼其邸から差して来られたが、抱への車夫が夜具を積んで来た人力の紋と、その客の着て居る羽織の紋と同じで、現在御自分でも親類の者だといはれたが、何でも従前さんざん放蕩した結果らしい、しばらく懲戒の下宿だね、どうだい、いよいよ下宿と極つた時に、おれは小遣が不自由だから此金で勘忍しろつて、和女、ちよいと抛げ出し

た御茶代が五圓さ、そしてまだ顔も見えない下女に一回の御心付けさ、腐つても調、ちがつたものだね、その代り萬事ぬらつとして、横柄だよ、ところで、あゝいふ人の落目を大事にかけて何か一條の俠骨でも立てゝおくと、また他日に悪くはあるまいと思ふのさ、ねエお島、どうやら此營業が當つたらしいぜ」
をりしも二階より手を鳴らす音しきりに聞ゆれば、亭主ふいと額越に天井を見て、今しも臺所より馳せ行かんとする下女を差止めながら、俄に聲を潜めて満面の笑、
「お島、氣の毒だがね、ちよいと行つてくれないか、例の華族様だからよ、なアに何か、もし聞いたら眞實に言ふが宜いさ、妾は亭主の姪で御坐いますつて、それまた手が鳴る、早くよ、早く行かないか、爲の悪いこつてないやな」

黒 しばし假寝の夢枕、一時こゝに落魄れたる貴公子然として、下宿屋菊田の二階に第一の上等室を
田 奪ひし黒田健次、宿の亭主の眞向額を五圓の茶代に打ち割つて、その顔みれば驚喜の度合たしか
健 に天下太平の兆を示しつゝ、このまゝ懐手に鼻唄うたうて三四箇月を押し行くとも、いち／＼
次 月末の勘定書を我に呈する無禮はなかるべしと、づら／＼しき臍魂を落ち付け煙草の輪を天井

に吹ッ掛けながら、例の横柄面いよ／＼横柄を極めて、心は絶え間なく稲妻の如き男なれども、外見は萬事ぼツとして相手次第の抛げ遣り風を粧ひつゝ、さて肝要の机を忘れて来たと言はす語りの一言に、忽ち亭主を走らして一閑張の机を買はせたる上、これで當分の御用に叶ひますればと言はせたる横着さ、どこまでも黒田健次は健次なりけり、

かつて汐入村に年が年中の空腹かゝへて蛇の如く蟠りし頃は、まづ川上の厳正に壓へられ、倉橋の謹慎に照らされ、さては上田が仙人めいたる奇骨にうたれて、焼芋一個さへ其日の茶受に上らざりしが、今こゝに悠々として淺黄頭巾面深に被れば、さして喰ひたくもなき蒸菓子わかしの注文、いざや若を煮て閑に物を考へんに、昨日までの境涯を思へば、自己の横面を鳴らしてこそ相應なるに、今は人間並の手を鳴らして人を呼びぬ、

されど返事のなきは無人かと、耳を欬て聞けば、ぼしや／＼と私語く聲、また頻りに呼べば、やがて梯子を上りくる足音やさしう、サツと襖を開けて半面を現せしは、山だしの下女にもあらず禿頭の亭主にもあらず、思ひもかけぬ花一輪そのまゝ坐に咲いて、年のころ十九か二十歳ばかり、闕際に手をつかへつゝ御用はといひぬ、

さすがの黒田健次も不意を打たれて、ぱツと吹く葉卷の烟に一時の弱味を隠しながら、元來が嫌

でもなき女の面體、やう／＼薄らぐ餘烟の中より眼球を据ゑて見直せば、色白の丸ぼちや、太眉毛の眼千兩、片頬の笑渦は永字八法の點に等しき風情まで、あゝ何處やらで見た奴と、果は無言に眞正面より窺へば、女も思はず小首を傾けて無言の體、どうやら、これも見覚えのありさうなと、暫し考へしが聽て其まゝ入り來りて、

「おや貴方、お久しぶりで御坐いますね」

「む、誰だ、誰だツたかね、どツかで見たりやうでもあるが、さて忘れたよ誰だ、誰だ」

「物覚えのお悪いこと、しかし御心の帳面につくほどの妾では御坐いませんが、そら去年の秋頃でしたか、上野の松源へ」

いはれて黒田健次はツと思ひながら、こゝぞ大事の瀬戸際、いやな奴に出ツ喰はしたぞ、さア大變だ、倉橋から貰つた五間まで松源樓上の牛飲馬食、しかも布子一點寒晒しの破れ着物、その時に出居つた女中、南無三寶と驚きつゝも、生來の素根性おし据ゑて更に動ぜぬ顔色、から／＼と大口あいて高く笑ひぬ、

「やア、なるほど、あの時の美人だな、あまり粧飾し込んで居るから見違へたのよ、堪忍し給へ、しかし爾來ます／＼御綺麗で重疊至極、ゼンたい此家へは、どうして」

「どうしてツて貴方、悪い事は出来ませんよ、宿の亭主は妾の伯父で御座いますから」
 「いやはや、こいつは妙だ、つきせぬ御縁で、あは、あは、あの時は自己が尤も落魄の底で、やぶれ衣に破れ笠といふ清女の境涯、今なほ引續いて斯の通りだ、憐れんでくれ、しかし、ヤツとの事で、まア上二番町の親類から拾ひ上げられて、このごろ少しは人心地がついてきたから」
 「それは御目出たう御座います、なに貴方、あの時から私は妙に考へて居りましたよ、何でも凡流の書生さんたア違ふと思ツてさ、おほ、おほ、なせツて貴方、随分あの時の御風俗は、おほほ、それで以て一度の會席に五圓近くの御期定、なるほど、今に見ろ馬車に乗る自己だ、其時は尋ねて來い、下女にしてやると仰しやいましたね」
 「いやはや、さうかい、そんな事を言ツたかね、萬事は酒の上だ、ちツとも覺えないよ」

おもへば去年の秋のくれ、倉橋幸藏が始めて新聞社より賣文の料を受取りて、そのうちの五圓づつを上田と我に頒ちつゝ、いさゝか平生の憂を慰めん公等よろしく思ふがまゝにせよといはれし時、あの仙人めは東海道を膝栗毛に鞭うツて熊野の奥の川上三吉を訪ひ、我は高臺の人車を驀地に飛ばして上野の松源へ躍り込み、破帽敝衣さらに傲然として久しぶりの牛飲馬食を逞しうせし

席上へ たま／＼酌に出でたるを見れば、年のころ十九で濃皮の剝けた丸ぼちや、まんざら野原で外道の面を拾ひし心地もせねば、酔に浮かれて一言二言の熱を吹ツ掛けたる其女が、思ひきや廻り廻りて今この下宿屋の姪ならんとは、されど布子一點寒晒しの外見にも似ず、三年の憂空胸を一時に慰せんがため、無我夢中の自棄腹を開いて、一飯の膳の上に五圓を叩きつけたる不相應の馬鹿濫費が、結局こゝに今の身の金箔となりつゝ、上二番町の佐原を尻に使うて華族の親類と觸れ込んたる狂言に觸らぬのみか、伯父と姪とが却ツて我を妙に見上げたる風情、しめたぞ、いざや此上は萬事の計略いよく上々吉、機運よくば彼お島とやら、ふ、捨てたものでもないよ、黒田健次あくまで横着の臍を固めける、お島が立歸りし後、下宿の亭主しづかに上り來て、一入さらに機嫌とり／＼の追従輕薄、世辭たら／＼の空笑ひしながら、
 「え、お火鉢に火が御座いますか、お湯は、へい、へい、いや何分にも行届きませんから、どうか御遠慮なしに」
 「なアに遠慮どころか、ずるぶん氣儘者で、をり／＼氣に觸るをいふかも知れんが、堪忍してくれ、自己の天性だから」

「いえ、どう致しまして、時に貴方様は、あの私の姪を御存じ遊ばすさうで」

「む、知ッてるよ、初め手を鳴らして呼んだ時にやア、はてな、どツかで見えたやうだとは思ッたがね、さて急に浮び出さないうち、先方から言はれて驚いたよ」

「いや、いろ／＼姪から承りまして」

「さうか饒舌ツたかい、あんまり器量の善いこツてないから、言ふなと口止めして置いたに」

「なに貴方、どうしても違ッた方だと、さう申して居りましたよ、少しも風俗なやかにやアお構ひ遊ばさないで、そして御大氣に在らッしやるツて」

「いや面目もない、あの時分はね、自己が落魄の頂上で、ずるぶん困ツた最中さ」

「いくら御困り遊ばしても、私共の困却とは格別で、どツか貴方、違ひますから直に御身分が分ります、姪が、お島が今日、はからず御目に掛ッて、何だか頻りに喜んで居りますよ、へ、へ、へ、へ、私まで呉々と頼んでまゐりました、どうか今晚、御夕飯の御つもりで松源へ御越し下さるやう、是非、是非お願ひ申してくれと、へい、へい、甚だ何で御座います、が、今晚のは、去年の失禮を御わび、姪が御馳走申し上げたいと」

「そりやア困ツたなア、しかし今晚は止さう、他日にせう」

「でも御坐いませうが、あれほど申して居りましたから、どうか是非」

「だがね、番町へでも知れると不可ンよ、爾来一切料理屋の品は口にせまい蠟燭の火で酒は飲まないといふ誓言で、やら／＼以前の身分になりかゝツた所だから」

「それは貴方、お場所によります、大丈夫、私の姪で、御覽通りの野暮がたい變物を相手に、たゞ御夕飯を召上るのみに」

「さうか、ぢやア往ッて見よう、が、おい内分だよ、キツと近いうち佐原から品行検査の隠密が来て、いろんな事を聞くかも知れないから」

「よろしう御座いますとも、その邊は如才なく申し上げます、では御車を」

「む、人車を一臺いッてくれ、よく駆ける奴をね」

「ことしは南瓜の當り年かや、かつては汐入村の牝犬にさへ尻尾を振られさりし黒田健次に、どうやら白粉くさき風が吹き寄せ来りぬ、」

其四

山科の隠家ならねど、風雅でもなく洒落でもなく詮術なしの汐入村に、我のみ数年の大飢饉うち

つゞいて膝小僧抱き寝の骨寒く、春たつ毎に軒端の梅が香は送れども、あはれ生きたる花の色は夢にも見ざりし黒田健次が、今こゝに廻り廻りて盡きぬ縁ともいはゞいふべき女に招かれ、その伯父なる下宿屋の亭主に嚮を押し勧められ、しかも我腹いためぬ馳走の外に畜生め、どうやら事のありさうなる風情、あゝ錬鐵の男子も茲に至つては豈それ總身の痒からざるを得んやと、うすづく夕日に高臺の人車を飛ばして上野の松源へ躍り込んだる勢ひは、さながら親の仇を見付け出せしに似たり、

松源といへば忽ちお島といひ、此家に此の尤物ありと人に知られし愛敬女が、ためこめし祝儀の自腹を切つて待つほどの客、そもや如何なる男ぞと朋輩の女中が打寄つて隙見すれば、磨いても洗うても悲しや黒田健次は黒田健次、ことし二十八の骨格しかと引絞りに肉置の弛緩なき邊のみ、なんとやら女の目より好もしけれど、生えたるまゝの太眉毛、氣味わるげに光る眞圓の眼、物いへば夜具の袖に似たる鹽口、五分刈の頭髮や、伸びて櫛の齒の痕もなう、剃刀の縁に遠ざかつて無精髭の隙間もなう、山の如き兩肩を怒らして色消しの大胡坐に、瓦落々々書生のお里を現して盃の鷺掴み、をり／＼葉巻の煙はツと吹き上ぐる時は今戸焼の達磨香爐、楮も異なるもの味なもの、どこが宜うて彼男にと笑へば、年長けたる女中しツと打消して、まだ青い和女方には知れ

ぬこと、生命とりに美男はない、男振は羽織の紐、氣で喰ふものぞと私語きぬ、黒田健次さらに斯くとも知らねば、例の傲然たる身に横柄の上面いよ／＼高く、床の柱に背を凭せながら、お島の酌に半面ぼツと櫻色の筈なれど、元來が色黒男、焦茶色となつて際立つ眞白の齒を現しつ、

「いや酔つたぞ、酔つて来た、すぎて此上に襦袢を出さぬ前、もう歸らう、伯父さんに傳言は、ないかね」

「なんですよ貴方、まだ今、九時を打つたばかりですよ」

「なに、商店者ぢやアあるまいし兵士ぢやアなし、門限時間に怖れることもないが、餘り遅くなるこそ／＼、お島の伯父に済まんからよ、あは／＼／＼」

「おほ／＼／＼なんですよ、伯父に済まない、おや御念の入つたこと、しかし遅くなつたら伯父に済まないことをなさる御心算ですか」

「まゐつた、眞向額を一本、やアまゐられた、なに決して、なか／＼以て、なん／＼の誓文誓紙、左様の儀にては御坐なく候、たゞ一寸、當坐の」

「當坐の御戲言ですか、貴方は御戲言でも妾は本氣ですよ、はい、本氣どころか、事によると

這ひ廻る不具乞食、あゝこれも人間かと、黒田健次、見るより歩を止めて懐中を探り、一錢銅貨八九枚ぐわらりと掴んで投げ遣りぬ、

「おい、ナンか熱いものでも喰ツて寝ろ、よ」

そのまゝ二三間、行き過ぎて何心なく振り返れば、なほも大地に頭を埋めて我影を伏し拜む體、

あはれ世はさまぐと健次またもや立戻つて、再び懐中より探り出せし白銅三四個、

「人に拜まれたなア初めてだ、それ拜み賃よ、あはゝゝゝ」

平河町の下宿に歸りしは其夜の一時過ぎ、戸を叩くにも及ばず亭主みづから出で迎へて、しきりに振り掛くる世辭追従を聞き流しつゝ、おのが二階の室に這ひ上りて其まゝ身を横たふれば、つづいて持ち來る酔さめの水とは忝い、甘露々々と舌鼓うちながら、

「時に御亭主、大變おそくなつて氣の毒だ、さぞ迷惑したらう、早く寝て下さい、委細は明朝あゝ酔つた、ひどく酔つたよ、さんぐ酔はされてね」

「なに貴方、いくら御歸家が遅くつても宜う御座いますがお島め、ほんたうに仕様のない女だ、今時分、お車も差上げないで」

「いや、さうでないよ、是非、ぜひ人車で送るといつたのを、先生わざと好奇に、てく／＼歩きの大草臥さ、あはゝゝゝどうして／＼、その邊に脱落る女ぢやアない、おどろいたよ、全く驚いたね、玉が宜くつて愛嬌があつて世辭に馴れて坐を崩さないで、そして何處やら大きくつて、人品で」

「御戲言を貴方、はゝゝゝしかし、まんざら、氣心の曲つた女でも御座いませんが、からもう萬事うツかりで困りますよ、私も子はなし、また彼も兩親はなし、親の泣き寄り、そこで始終は何うかしてやらうと、へい、へい、しかし御覽の通り、年は十九になります、まだ小兒でいけません」

「なに小兒なもんか、餘程しツかりだよ、むゝ、自己が見たとこぢやア、あれくらゐ揃つた女は數多ないね、御亭主、自慢しても宜いよ」

其五

上二番町の佐原家に奥まりたる一室のうち、主人の男爵が聲をあげて高笑ひせる而前に、ゆらり悠然として喋々と饒舌り立つる客を、誰ならんと思へば例の黒田健次、心ありげのお島が酌に泥

酔の太平樂をつくして、ゆうべ一夜の床の上に自己が五體を捻りつゝ、たゞニヤリ／＼と人知れぬ笑を含みし顔色もなく、今こゝに飽くまで眞面目くさつて仔細らしき容態、あはれ生涯に牝猫一疋も身邊へ寄せ付けぬ男とぞ見える、

「黒田、貴様アこの近所へ下宿したさうだが、もう一週間にもなるから、定めし何とか一身の工夫を附けたらう、全體どういふ事にした、いよく歸國を斷念したか、但しまた今でも矢張り東京に目的がないと思ふか、どうだ」

「はい、有難う御座います、由來さん／＼の轢刺落魄、申さば將に死せんとした轢刺の健次が、幸ひなる哉、おかげさまで心機一變、どうやら、かうやら再び息を吹ツ返しさうに御座います、ところで今更おもひますと、なぜ、あゝいふ弱い音を吐いたかと我ながら實に馬鹿々々しくつて、人間の價値は失敗また失敗の果にあるものと、實もつて汗顔に堪へません」

「ちやア何だね、貴様やはり此まゝ東京に居る心算だね、歸國を思ひ切つたな」

「もとより、無論このまゝ踏み止つて、さらになほ閣下の御裾に取縋り、死物狂ひに奮發の覺悟に御座います」

「はゝゝゝ貴様のやうな横着物が死物狂ひに取ツ附いては困るよ、しかし目的に依つては何分の

の助力もしてやるから、まア踏み止つて、これから遣るといふ其目的を話して見ろ」

「これは恐れ入りました、拙者を、それほどの横着物と思召しますか」

「なに別に横着物といふではないが、貴様ア随分なみ／＼の奴より無遠慮だぜ、だが、その大膽な無遠慮を乃公が見込んで、何か、させてやりたいと思ふのだ」

「いやはや、妙なところが御意に入りましたな、しかし拙者は、お外見ほどの不埒者ぢやア御座いません、實際は案外に脆い奴で、をり／＼情の爲に遣り損ひます、とかく人情に逢つては、へい、甚だ愚痴ッぽい事を申し上げますが、今日かくの境遇になりましたも、強ち拙者一人の失敗のみぢやア御座いません、いはゞ幾分か朋友知己のため、結局つまらない鎗玉に揚つた始末、しかし大體が矢張り健次の愚より起つたことで、へい、甚だ仔細を申し上げますは却つて健次の汚名を落しますから、ひらに御免を蒙ります、おゆるしを願ひます」

「いひつゝ、眼を閉ちて首を傾け、何とやら無念の懷舊に堪へざる體を、男爵つら／＼見遣りて、
「それも男だ、男子うまれて成敗ともに二分の俠氣なくんば不可ん、響しくないよ、だから貴様も悔むに足らん、さらに一刷新あらためて遣れば宜いさ」

「はい、まづその心算で御座います、ついでには今日、拙者が改めての目的を申し上げるため、か

く伺ひました次第で」

「ふむウ、あらためて貴様、どんな目的をつけた、委しく言へ」

「その目的を申し上げる前、甚だ恐縮に御座いますが、ちよいと奥様に御意を得たり御座います、願はくは御夫婦お揃ひの面前で、いえ何、この目的には是非御婦人の御思慮、また御判断を願はなかりやア成り立たない事で御座いますから」

豆の如き赤裸一貫を躍らして紛々たる紅塵百尺の眞只中に飛び出したる黒田健次が、今こゝに雨露を凌ぎし新恩の佐原男爵に對うて、その目的を語らんとする前、願はくは鬨秀の令聞高き夫人の出坐を乞はん、聊か仔細ありて獨り男性の閣下のみ語るも、さらに其甲斐なしとて悠然と差控へぬ、

主人の男爵おもはず小首を傾けながら、ともかくも其よしを夫人に通ずれば、元來をかしう面白き男ぞと、夫人も時に取つての娛樂半分、しづかに入り來りて夫婦打揃ひながら、さて何を語り出すかと語らぬ前より笑を含めば、健次あくまで眞面目くさつて居坐を直しつゝ、

「一時は路頭に迷つた乞食同然の貧生が、かく圖らずも意外の御恩を蒙る上、さらにまた奥様までも座に要して、實に、誠に恐れ入ります、しかし是非とも奥様の御批判を仰がないと、大體の

事實が成立いたしませんから」

いひつゝ夫婦の眼色を顔越に睨んで、まづ今日の御機嫌如何と窺へば、萬事うちとけて乘氣の風情、はや與みし易きを見て取つては更に憚る氣色もなく、

「え、目的と申しますもの、根が癡鈍の頭腦から無理に絞り出した目的、どうせ一場のお笑草とは存じますが、まづ第一この拙者の身について申し上げれば、無一文無經驗無學識の三柏子みごとに揃つた青二才、なか／＼尋常一般の事では逆も人間らしう出来まいと思ひます、ところで聊か愚案を廻らしましたは、なんでも世間に類のない人の心附かない簡易輕便しかも社會の進歩に伴うて必要さらに一日も缺くべからざる事柄で、その性質は俠義仁愛の徳と利益信用の美とを兼ね備へて、永遠無窮に渡るも確固不拔、決して挫折の憂ひなき目的で御座います」

いひつゝ、両手を膝上に置き身を反して鼻を齧かしぬ、
男爵夫婦あまりの廣言に呆れて顔を見合はせつゝ、さらに健次を打守りて笑を含みながら、男爵まづ口を開きぬ、

「おい黒田、功能書は後でも宜いから、早く事柄を話せ」
夫人もまたホ、と笑うて言葉しづかに、

「全體どういふ事だえ、大そう立派な口上だね、早く聞きたいよ」
 「外でも御座いませんが、いはゞ下女の大學校、その實おさんどの養成所で御座います、そも
 も社會の進歩に従うて人事いよ／＼繁雜緻密に渡り、いはゆる東洋流の豪華肌を以て一氣呵成
 の武斷的に事を處する範圍が、段々と日一口と狭くなつて、何事も細心工夫の順序的規則的な
 くば、迎もいけない今日の世運、まづ其一端として近來しきりに必要を感ずるは家事の經濟で御
 座いませう、商工に従事するものは無論のこと、いかなる學者も智者も、退いて其腦を養ひ歸つ
 て其身を安んずべき根城、乃ち家といふ自分の安樂國に、もし火の粉の雨が降つて妻子眷族の飢
 餓に泣くが如き悲慘に陥つては、流石の智者も學者も果して心身の平安を得ませうか、内に家み
 だれては外に人立つ能はず、内に國みだれては外に戦ひ勝つ能はずで、心身の平安を失つた苦し
 まぎれに此ところ一步を誤れば、その智者學者も其能力を那邊に奮ひませう、或は社會に害
 毒を流すの基となり、また自己が家も身も忽ち亂離廢類、よし然なくとも、家事紛亂の貧といふ
 敵に攻めらるゝがため、人知れぬ涙を吞んで可憐な伎倆を伸ばし得ない可憐の才子が、そも／＼
 今日の上世に幾何ほど御座いませうか、實に厨といふ一字は人事裏面の怖るべき潛勢力で、一家
 の經濟を支持すべき妻女の貫目、これがため近來しきりに其度を高めて、妻なるものゝ價值また

前日の比でないのは、強ち男女同權の理のみでなく、幾分か此邊の必要から起つた自然の結果と
 も思ひます、ところで家に大切なる其妻女を扶けて厨を整理するもの、乃ち妻女の命令を奉じて
 日夜間斷なく直接に事を扱ふものは取も直さず下女で、おさんどの善惡邪正によつて、多年の
 結果、竟に一家の盛衰に關することも出来ませう、然るに此下女なるものは從來坊間に散在せる
 慶庵、いはゆる男女口入所などいふ、怪しげなる婆さんが利慾一點の懷中から割り出されて、一
 期半期とか短日月の間に不完全至極の約束ばかりで、その弊害の及ぶところ單に雇主のみでな
 く、中には殆ど下女の生涯を一種の獄に投ずるが如き形跡も御座います、かつまた下女として下女
 が一生の目的でなく、それぞれ相應の縁を求めて嫁するまでの間、ある事情のために迫られて勞
 働する不幸の賤女子を、徒らに利慾一點ばかり皺くちや婆の手に委ねて、殆ど一時の賣買物に似た
 るが如きは實に近世社會の一大恨事と考へます、そこで拙者の目的は、この下女なるものを眞正
 懇篤に養成すると共に、その身の善良なる結果を得せんがため、まづ五年乃至十年間の責任を
 負うて、一の大なる養成所たり、兼ねてはまた會社のやうなものを建てたい思慮で御座います、
 しかし其下女は敢て人の娘を誘導するが如きにあらず、親のなき孤子、或は捨兒、その他一切天
 下最賤の世に生を得難き女子のみを集めて、いはゞ養育院の形で或年限間を下女になるべき資格

富世五人男

の修行させ、以て雇ひ主も雇はるゝものも相互の利益信實を計り、竟には或年限を以て或種の人に嫁するまでの萬事を司どる慈善的の養成所、言を換へて申さば賤女子が立身の一學校で御座います、もしそれ細則方法維持の經濟等に至つては、こゝに一冊として拙者の意見を陳べて御座いますから、

其六

いひつゝ、一部の草稿を取出して男爵夫婦の膝前に差出しぬ、
人間悲惨の極に生れて親もなく家もなく、徒らに姑息の策たる養育院、もし一步を誤れば悪田に苗を植ゑるが如き養育院の片隅に投ぜられ、空しく世の偽善めいたる寄附金の下に的もなき露の生命を繋げる不幸の女子を驅り集めて、由來坊間に散在せる弊害百出の廢庵を一揉みに押し潰し、以て社會の進歩に伴ふ家事經濟の必要より更に一轉の妙案、おさんどんの大學校、下女の養成所、その方法性質を喋々と饒舌り立てゝ、いつのまに筆を執りけん、懐中より一の明細書を差出せしめ、男爵夫婦が奇説にうたれて呆れ返りし顔色を見残しながら、飄然として佐原家を立去りし黒田健次、例のステツキを振り廻して平河町の下宿に歸りぬ、

黒田健次

下宿に立歸れば、忽ち亭主とび出でて迎へつゝ、濁れ果てたる老の片頬の笑を絞りながら、
「えゝ今朝ほどから、お島がまわりまして、是非お目にかゝつた上、前夜の失禮を御わび申したいと、へい、しかし御用でも御座いますりやア、差控へさせます、へい、なに貴方、どうせ今日一日は暇だと申して居りますから」
「むゝさうか、ちやア自己の居間へ、ついでに何か、ちよいとね、お迎ひだ、むかひ酒だ、むかひ酒だ」
忽ち剛柔の早變り、黒田健次も俄に忙しき男となりつゝ、おもはず心の笑を含んで、いや來居つたわ、來居つたわ、さもさうづ、さもありなん、元來かうなうては叶はぬところ、しめたぞ、しめたぞ、雪のやうな素首を、
おのれまづ二階に上つて坐を構へつゝ、満面かくるゝばかりに煙草の煙ふきあげて待てば、やがて入り來るお島も今日は一入さらに念入の粧飾、物いはぬ先よりホ、と笑へば、健次も思はず釣り込まれて、
「あはゝゝゝゝいやどうも大變な粧飾で、あらたに近まさりするたア此の事だ、なかゝ美しいぜ、人殺しめ、また迷はせに來たのだな、否、前夜の死骸どうなつたらう、などといふ慰み半分

「ほんとお可哀さうだから、憐れと思つて今日の一日は介抱してくれ、一寸も家外へは出さぬ、さアサツと近寄つて酌だ、お迎ひ酒の酌だ、酌だ、乃公の酌は天下たゞ卿あるのみさ」
 一方には華族の親類と履き違へたる下宿の亭主、一方には我子も同然の末の幸運をいのる姪の叔父、その浮世馴れたる五十男が男女の中に舟橋かけ渡して、取持つ段か世辭ぶる段か、おのれ眞先がけの大働きに、お島も流石に十九の女氣、ぼつと北山おろしの風を喰つて肌しみく、なるほど面は二の町ながら何處やら男らしいと思へば、健次は固より飽くまで摺れ切つたる横着物、どうせ赤裸一貫の我には、女郎一疋さらさら邪魔にもならぬのみか、時に却つて何ぞの扶けには幸ひの人馴れたる女と、月下氷人を蹴飛ばして、戀を持ち上げ、いつしか其日も暮れて點火頃とぞなりぬ、

夜に入りては互の心ますく打解けて、あれほど取持役の亭主も更に姿を見せず、一室のうちに健次お島の唯二人、差對うて障子襖を建て切り、ランプの火さへ薄闇きところに何をか語りけん、喃々たる私語低聲、をりく偷むが如き忍び笑ひの聲、あゝ此時もし彼の上田力をしてあらしめば、大のステツキ眞向に畜生と叫んで躍り込む猛勢いかなるべき、落花狼藉さらに一段の見物なるべきを、をしや其夜の曉までも唯二人、

お島といふ女そもく黒田健次のために喰はれしか、黒田健次そもくお島のために喰はれしか、一方は戀の本場の勘こぞ踏まね、うまれついたる根性骨あくまで太くして千枚張の面の皮を浮世の雨風に晒しぬいたる横着物、一方は年こそ若けれ、十四の春より今年十九の曉まで客扱ひの鳥居敷を潜つて男殺しの本性を自然に得たる尤物、互に思ひ思はれての果は鐵の板をも突き抜く男女の一念、ましてや穂にも色にも現はし鼻頭を下宿の亭主が渡しかけたる掛橋なんとして躊躇ふべき、忽ち駆け寄つて生命生命と契りし後は、ぼつと逆上せ上りし夢うつゝ流石に心うきたちて、それほどの男も女も平常ならぬ風情ありける、

されど健次は健次お島はお島、互に心の底を叩けば、しみく嬉しき戀の外にも一つの音あつて、その音の高い低いが相互の勝負、末の赤繩は山となるやら野となるやら、さては嘘から産み出す眞實の夫婦、川といふ字に寝る夜の果まで添ふか添はぬか、知れぬが花の世の中とて今は水さへ漏らさぬ愛情と見えける、

ががの空腹かへて天にも地にも唯これ五圓の金を引ツ攫み、去年の秋はじめて松源へ飛び

込みし時は、ちよいと濃皮の剥けた當世面、野原に外道の面を拾ひし心地もせねば、酒の相手に取ツて見苦しからずとのみ思ひしものが、下宿の亭主が姪として圖らず再會の今年つらく見れば、およそ十人並に二三段も優れし女、しかも愛敬あつて世辭あつて、世に馴れ坐に馴れ人にも馴れながら、何處やらピンと利かぬ氣の本性、時と場合に拗ねたる色を示して、まんざら捨てた女でもなしと思ひしが、彼女より招かれて自腹の馳走に逢ひ、心ありげの情の露を浴びての後は、どうやら掘出物の心地して易くは手に入るまじき尤物、あはよくば雪のやうなる素首しめんと思ひし翌日、今日を晴れと着飾つて訪ひ來しを見れば、また一入に近まさりする花の一枝、もはや堪忍ならぬ男の意地として、よしや一人二人の敵があるとも鞘當せんの勢ひを、敵なきのみか大の味方の掛橋に時も移さず其場も去らず、さて斯うなつての上に思ひ返せば、彼女その面よりも姿よりも抜目なき心の働き氣の捌きやう、うろく狼狽へては逆さまに乃公を背負うて抛げもしつらん根性骨の面白さ、今こゝに淺黄頭巾を脱いで本音を吹くとも、きやツと叫んで忽ち逃げ出すまじき女ながら、大事の瀬戸際もし遣り損へば萬事の破滅、さても此後ナンとして此戀を繋がん、一筋の眞情か但しは二道かけての裏表かと、流石の黒田健次も人知れぬ首を捻つて、随分むづかしいわい、

其七

浮世の的を射るべき三ぶせ十三束は篋中の節より本はぎの赤漆まで絞れども、満を保つて容易に放たぬ大鎗の筒鋒するどく、こゝに汐入村の破れ巢を守る川上三吉倉橋幸藏上田力の三人は、もともと凡々たる世の俗流に比して多年の苦學難行すでに其功を竣め、今や結果を賭して草廬を出づるに餘力あれども、蓬髮垢面なほ未だ昔ながらの貧苦に安んじて、脰を枕の娛樂に都門の大廈高樓を羨まず、曉の微吟に市井の歌舞管絃を餘所にして、をりく飢に迫れども世上の殘杯冷肴を嘲笑ひつゝ、いやしくも當年高潔の士は三人腕を揃へて茲にありとぞ叫びぬ、おちつく先は山にあらず川にあらず俗氣紛々たる紅塵百尺の眞只中と、一片の立退狀を壁に張つて出奔せし黒田健次が其日は、月を越えて恰も今日の夕方ぞと、三人おのゝ味噌摺鉢の火桶を圍んで風聞とりどり、中にも川上三吉は例の平然たる顔色おもむろに笑を浮べて、
「なるほど今日は彼奴が出奔した二月日の命日だ、いや命日忌日といふなアちと可哀さうだが、幸ひ彼奴を問題として一議論おツ始めようかな、なアに外でもないが、まづ彼が性質素行その他一切の黒田健次たる資格より推して、以て今は如何なる境遇に何をして居るかといふ問題さ、い

鐵を入れて耕作最中、地主も彼が眼前の勞に眩惑して之を扶くるがため、目下の衣食住は寧ろ安穩だらうよ、たゞ偏に恐るゝは收穫の秋だ、思ツたより案外の豊年なら宜いが、もし不作であらうもンなら、必ず地主と彼奴との間に於て一場の喧嘩だね、乃ち彼が成敗吉凶は他日の利益厚薄如何にありだ

いひつゝ靜に笑を含んで倉橋幸藏を見返れば、幸藏しきりに首を振ツていふ、

「否、彼の才物たるは僕また之を許すが、専横非行さらに頑として事に悔い理に屈せざるの怪物が、空しく孤獨の赤身を躍らして一攫千金の快に耽らんとするもの、何ぞ他人のために齷齪たる勞を取ツて未然に利に安んぜん、故に曰く、彼は天生の豪放暴慢に驅られて一身を容るゝの地なく、それ或は大道讀賣の瘦壯士に落ちざるかだ」

冷かに笑うて上田を見返れば、力先生ぶツと頬を膨らし眼球を刺いていふ、

「兩兄ともに彼奴を買ひ被ツて才子才物といふが、乃公は彼奴を一言に評して馬鹿野郎といふ、何となれば彼奴これ一個の無情漢また無頼漢、およそ人に情なく常なきの極は窮して亂るゝの理もし竟に警察署に曳かるゝの事なくツば幸甚だ」

かくて其日も夜に入り、その夜あけての今朝の當番は上田力、おのれ一人まづ臥房より跳ね起き

て、帯とる手の忙はしく門邊に出でんとすれば、何者の仕業にや破れ門の片廂より細き竹棒の先に一個の風呂敷包を吊して、朝風に揺られながら人を招くが如き怪しさに、さすがの上田先生も中腰に睨みあげたるまゝ、千思萬考さらに其意を得ざれば、川上倉橋の二人を呼んで取卸しつゝ、三人とも——立合うて開けば、ビスケット五六斤に一封の書状を添へぬ、しかも其書は黒田健次なりける、

畜生ふざけた事を爲居るわいと、その書状を披いて讀めば、例の拙筆ながら飽くまで達者の走り書、

不肖健次みだりに狂態を恣にし諸兄の誼に反いてより茲に數十日、いはゆる山にあらす川にあらぬ紅塵百尺の眞只中に身を投じて、いまだ宿志の一端を伸ぶる能はずと雖も茫々たる前途に漸く一條の世路を得て將に上らんとするのところに在り、乞ふ幸ひに意を安んぜよ、されど人事多くは敗れ易く成功また古來より難しとするところ、まして況んや寥々たる孤獨の健次いたづらに魯鈍の性を逞しうして百年の窮達消長を唯この瞬間に賭せんとす、そもそも何の違かあツて席の暖かなるを得んや、日夜の苦心、朝夕の奔走、ために頭髮の白からさ

るを怪しむのみ、もし黒田健次の四字なほいまだ諸兄の念を脱せされば、乞ふ時に思うて一片の憫笑を垂れよ、

今や志に氣を消磨し事に身を忙殺して、さらに他を顧みるの閑を得ずと雖も、健次また曾て久しく諸兄の知を辱うせしもの、豈それ俄に諸兄を忘るゝの理あらんや、唯こゝに狂態の跳梁するところ或は却つて諸兄の徳を汚さんかと、偏に恐れ殊更に自ら枉げて音信を絶つのみ、隅田川の水逆流せず汐入村の草頭なほ露を宿せるかぎりは、乞ふ健次をもて友を忘るゝの奴となす勿れ、由來の不誼は將に他日を待つて兄等の面前に謝し、併せて具に其理を言はん、乞ふ諒せよ、

ビスケット六斤、いさゝか机下に呈して叨りに讀書の閑を偷む、事の罪は心の愚に代へて叱する勿れ、丈夫さらに氣と共に身を養ふ、器それ固からずんば物を容るゝ能はず、乞ふ自愛せよ、

俗臭紛々として煙の如き處に於て僅に筆を執る

黒田健次再拜

川上三吉

倉橋幸藏 三兄貴下
上田力

其 八

な〜の事情仔細ありて三年あとに分れし女房が、今なほ元の住居に後の良人も持たでありしと聞けば、残る未練はなくとも流石に憎からぬ心地して、花の朝、月の夕、雨のそぼふる毎に過ぎし睦言なつかしう、いつしか我を忘れて人知れず門邊に訪ひ寄れば、昔ながらの窓より漏るゝ燈火かすかにあはれ、他人の衣を織つて棧を投ぐる音など聞ゆる時、いかなる男も一滴の涙なくしてやは、

されば一片の立退狀に十年の知己を捨て、宿志なるまではと誓ひし黒田健次も、苦學難行を共にせし三人なほ其まゝにありと思へば、天性の横着面を上げて浮世の眞中を射通さんとする忙しき中にも、きのふ戀しく今日なつかしく、流石に汐入村を忘れかねつゝ夜に入りて後、竊に馴れし破れ門の片廂に立寄れば、風邪に冒されけん川上三吉が頻りに咳き入る聲、倉橋幸藏が興に乗つて思はず出す讀書の聲、例の上田力が何事をか喚いて高く笑ふ聲、いち〜手に取る如く聴えて

僅少の時日なれども懐舊の情禁じがたく、せめては訪ひ來し證據、今なほ三人を忘れぬ心の印に、携へたるビスケット六斤と一封の書状を添へて竹棹に吊せしまゝ、しばしの躊躇徘徊さらに思ひ切つて其場を立ち去り、路を斜めに淺草の裏手より上野の山下に歩みながら、ふいと前途を見渡せば松源の門燈きらと目に入り心につきぬ、

あゝ悪かつた、うか／＼と妙に足が運んで南無三寶、されど今夜は先づ此まゝの素通り、ゆるせやお島ばう、今しも元の巢の苦學を見て來たばかりの黒田健次よ、されど健次は凡夫、なか／＼の凡夫大凡夫、借金取の横面ぐわんと張り曲めて煙草を輪に吹くほどの勇はあれども、こゝを此まゝ砂を蹴立て、眞一文字に走せ去る勇氣なく、我を忘れて思はず立往生しながら、ちよいと逢はるか、いや逢ふまいか、いづれ我手に入つたる妻も同然、逢うて何の疚しき事はなけれど、あはれ元の破れ巢に三人の聲を聞いたる今、逢うて飲むとも平生ほどの醉心地はなかるべしと、ステツキを大地に突き立て身を傾けて思案に迷ふ折しも、横合より稻妻の如く駈け來る人車一臺、はつと驚いて飛び退く隙の遅かりけん、腰骨に輻棒つつかけられて足場を失ひ、よろ／＼とよるめきながらも黒田健次たゞの男ならねば、忽ち憤怒の大喝一聲、叫ぶ聲もろとも輻棒しかと捉へて片手のステツキを握りつめぬ、

「やい待て盲目野郎、その提灯は何のためだ、この廣い往還で人の腰に突つ掛けながら、無言で駈け出したア太い奴だ、輻棒おろして謝罪れ」

「へい、御免なせエ、しかし闇黒の往來で木像のやうに突つ立つてるお前さんも、ヘンあんまりだ、大口きゝなさんな」

「なんだ畜生、うぬが事を棚へ上げて逆捻を、さア來い」

「來いたア交番所ですか」

「馬鹿、うすのろめ、匂ひでも知れる筈だ、嗅いで見ろ、巡査などに手を借る男ちやアない、手前が今いつた木像の働きを見せてやるんだ、客をおろして來い、ひつぱたいてやるから」

「ひつゝ車夫の胸倉ぐいと引ツ掴めば、おろ／＼とせし車上の女客おもはず聲をかけぬ、

「おや貴方ですか、車夫さん卸して下さい、妾の知つてる方だから構はないよ、安心して卸して下さい、よ、車夫さん」

「いふ聲を提灯の光りに見上ぐれば、お島なりけり、

「やア」

次 健 田 黒
「やアちやアありません、手暴い事を、全體、今時分どこへ入ツしやるンです」

「自己より和女どこへ往くのだ、宙を飛んで、おい車夫、もう宜いから此處で降せ」

「へへへへお馴染さまで、へへへへへ」

おもひきや車上の客は例のお鳥、互に二こと二こと味に絡んで、ふりまかせしステツキの勢ひも何處へやら、幸ひの暗闇に手を取合せて立去る後には、ちよつ何のこつたい畜生と、舌鼓うつ車夫の獨言も耳に入らず、歩みながらに身を摺り寄せて、

「ほんとは貴方ア手暴い事をなさるよ、運よく妾が乗つてればこそ、もし他人だつたら直に車夫と喧嘩、馬鹿々々しいぢやありませんか、ちつたア御身分を思つて、おとなしくなさいよ」

「へいへい以後は心得まするだ、しかしあの車夫め、自分が悪い辭に生意氣な事をいふから、ぶなぐつてやらうと思つたのさ」

「車夫を打擲つても御手柄になりませんからね、時に貴方、今夜どこへ、全體どこへ往らしつたの」

「むへ何だ、つい淺草の後方に友達があつて」

「おや淺草のうしろ、いやな處ですね、なぜつて貴方、あの方角は妙ですもの」

「なにが妙なもんか、それよりやア和女どこへ往つたのだ、日は淺くつても自己の嫉きやうは深

いぜ、白狀しろ」

「おほへへへおツかないこと、妾こそ淺草の裏へ、お聞き及びせう、あの伯父の元の家ですよ、やはり妾の伯母に當るものが居りますから」

「むへさうか」

「貴方の方は、むへさうかで治つても妾の方は治りませんよ、さアお言ひなさい、淺草の後方の御友達は何といふ方で、何を御營業になすつて、その町名番地は」

「あはへへへ戯言ぢやアない、それを聞いて何うするのだ」

「どうするつて貴方、知れたこと、あす往つて問ひ合はせますの、執念ぶかいは御承知の上で、妾をこんなに、なすつたんでせう」

「これさ野暮ツたらしい、縁日の蟋蟀ぢやアあるまいし、往來で聲を立てるなよ、それ、うかうかしてるから、いつのまにか松源を通り過ぎてしまつたい、はやく這入つて寝るが宜い、自己も今夜ア此まへ歸るから」

健 「なに貴方、どうせ遅くなつたんですもの、さう急がないでも宜う御座いますワ、幸ひ外にも少しお話し申したいことが」

「それは、またの日にするさ、今夜は此まゝお別れ、お別れ」
 「いゝえ、その用事がね、今夜でなくツちやアいけないの、だから先刻も、ちよいと松源へ寄ッて直ぐ貴方の下宿まで駆け付ける心算でしたの、實は淺草の伯母にも其用でまゐつたんですから」

「だツて、もう十一時だよ」

「十一時でも十五時でも構ふもんですか、さア此方へ入らツしやい、今夜は夜明しで貴方に御相談申したい事がありますから、もし途中で睡ると聞きませんよ」

いひつゝ健次の袖しかと捉へて、松源へは立戻らず其まゝ池の端の、ある待合へ引ツ張り込みぬ、健次も今は引かるゝまゝに引かれて、

「えゝどうでもしろ」

ゆうべ汐入村よりの歸途、上野の山下にて思はずお島に逢ひ、そのまゝ池の端の待合に連れ込まれて夜一夜を寢ずにや明しけん、けさの黎明に人車を驅ツて平河町の下宿へ歸り來りし黒田健次、例の亭主が朝茶を汲れでの世辭追従も聞き流しつゝ、おのが居室に飛び込むや否、夜具引ツ

被ツて臥したるまゝ、高軒かいて前後の正體もなく、午後の三時と覺しき頃やう／＼目を覺しつゝ、首をあげ手を鳴らして人を呼びぬ、
 晦日に安心すべき他の客は一切下女にまかせて扱へども、三四箇月たしかに喰ひ潰さるべき黒田を却ツて行末の福の神と履き違へ、あはれや亭主みづから萬事の働きぶりに、手の鳴る音を待ち兼ねしが如く愛敬うかべて駆け上れば、今しも夜具の中より還ひ出でて机に寄り際に兩掌をかけたが、煙草の煙に半面を埋むる健次、いよ／＼横柄の面がまへを横たへて靜に見下しつゝ、
 「いやどうも、よく寝たよ、前夜はね御亭主、淺草の友達をたづねて歸りがけ、上野の山下で、ふいと逢つたのさ」

「へい何誰様に」

「あはゝ、何誰様ツて、無論あの方様によ」

「御戲言を、お島で御座いますか」

「さうさ、しかし大分に遅いから是非、今夜は歸るといつたのを、何だか用がある、相談があるからツて、とう／＼去る處で、ほんとは睡かツたよ、夜明しをさせられてね」

「それは御迷惑さまで、とかく姪女は、いくら申しても御覽の通り我まゝで困ります、そんな時

は横面も一撃も、おやり遊ばせば宜しいに、今度まゐりましたら、乾度、拙者が、へい、言ひ聞かせますから」

「なアに言はない方が宜いよ、直接また自己に、つつかゝつて来るから、あはゝゝゝゝしかしし怜悧の割にやア罪がなくて面白ね、たゞ一途の氣性だから」

「へい、いやもう貴方のやうに萬事お捌け下さるのは姪女が身に取つて第一の幸福で御座います、何分ふつゝかの足らぬ處は幾重にも御叱り下さいまして、どうか此末とも御見捨なく、へい、へい」

「あはゝゝゝ縁といふもなア實に奇だよ、妙だよ、ねエ」

「うゝゝしき野面あくまで色男ぶつて、獅子ツ鼻を動かし眞丸の眼球を細くせし黒田健次、おのれこそ却つて奇なりける妙なりける、

亭主は今年五十の浮世馴れたる男、利慾のためには石を珠玉と見る目の過誤ありとも、男女の道には天晴れ鑑定の額越に黒田の顔色じろゝ見上げて、前夜お島と夜一夜を語り明せし仔細、大方それと知りながらも態と氣がかりの態、

「えゝお島めが、全體なんの用で、なんの相談があつて、一夜も貴方に御迷惑かけましたので御

座います」

流石の健次も心にか咎めけん、此時どうやら顔を反けて暫し無言、やがて吹き出す煙草の輪さへ横に流れて立消えながら、

「なに別に、これといふ相談でもなかつたがね、あのウ何だよ、いつまでも料理屋の女中なんかをしてるのは嫌だから、はやく身の振方をつけてくれといふのさ」

「へい」

「ところで自己もさ、今かうして不自由の身だから、さア来いといふ譯にやアいかないが、もし堪忍しろ、遅くてこゝ二三箇月も待てといふんだがね、矢も楯も堪らない權幕で、なかゝきかないよ、困つたなア折角信用を取戻しかゝつた番町を今更ら毀すのは惜しいし、また無理算段すりやア下女の一人ぐらゐを使つて半年や一年を遣つ付ける工夫も易いが、さて自己も大事の瀬戸際だ、どうしたもんだらうね」

黒田健次の本色かくても顛倒らず、ぐいと兩脚ふみしめて逆さまに亭主が眞向へ喰ひ付き、どろしたもんだらうと自己が身を抛け掛けぬ、

其 九

おのが身一個さへ今は危き浮世の綱渡りしながら、づう／＼しくも女縁に近づきし報いは艱面、池の端の待合に夜一夜を口説かれて、いやとも言へぬお島が身の振方に、はツと思はず二の足ふんで思案に暮れしが、元來かゝる事には稲妻の黒田健次、忽ち逆に捻って更に動かぬのみか、結局徳伴と免れぬ縁の下宿の亭主を捉へて、末を謀られながら却って眼前を謀る皮肉の一計、さてまた一方は番町の佐原家、藁にせよ竹にせよ華族といふ世上の商牌あるからは、嚙ツて聊かの齒を痛むるとも竟には甘味を吸ふべしと、またもや千枚張の面魂のこ／＼と押し掛け行きぬ、しかも今日は主人の他出を覗うて、どうやら鼻頭の賢女めいたるところ、いとゞ與みし易き夫人の弱味に付け込みぬ、例の黒田健次が御伺ひ申せしと、取次の言葉に男爵夫人おもはず笑を含んで、萬事無遠慮に呵しい男、また笑はせに來たか、幸ひ徒然の折から、此方へ通すべしとの御意に従ひ、健次さらに一入の頑固然たる容を現して仔細らしき慰撫の體に、輕からず重からぬ頭の下げやうまで、ぱツと無頓着風に見ゆれど、實は細心工夫の曲者、いつもながら先づ夫人の氣を嬉しがらせて後、何事

も 腸より絞るが如き中音の言葉しづかに、

「え、今日は、わざと主人公の御意を得ない心算で、たゞ奥様だけに、ちよいと蔭ながら、叱られにまゐりました」

「おほ、／＼、また呵しい事をいふよ、妾は、一度も叱つた覚えは無いに」

「いや、これまで御叱りなくとも、けふ申し上げたら是非お叱り遊ばす事で伺ひました、かうして段々の御恩になります上は、どし／＼お叱り下さるやうでなくては、萬端不肖の健次、とても此末の身の立ち様はないと、はい、偏に御當家を御継り申して居ります、はい、ところで、まづ其事より前に御伺ひ申しておきたいは、過日愚案を呈しました下女の養成所、おさんどん大學校の儀について御前の思召は如何で御座いますせう、もし御承知に御座いますれば、大略かい捻んで御洩らし下さるやう願ひます」

次 健 田 黒

「あの事はね、まだ何とも仰しやらないが、昨夜だツたか、かう言ツて在らツしやツたよ、黒田は随分おもしろい奴だ、なか／＼奇な思慮を持つてる奴だが、今は自分の一身に追はれて忙しいから、言行ともに實際を遠ざかつて、どうもまだ書生論が脱けない、しかし元來が頭腦の善い奴だから、こゝ半年か一年ばかり衣食を助けてやれば、物になるかも知れないと、かう仰しやツた

よ

「有難う御座います、かりそめにも浮世に抛げ出された手負の健次を以て、半年か一年の療治してやれば物になるかも知れんとは、實に、はい、まことに感銘の御一言、有難う御座います、なほ此末とも御見捨なく、どうか厄介な無用の家來一人を飼つておくとお召して、はい、はい」

夫人は首肯しながら鼻高々と身を反して、わざと人なき健次の頭上を見過しつゝ、

「して今日、妾へ何か用でもあるのかね」

健次こゝぞと自己が兩手に頭を抱へて暫しの無言、いくたびか促されて猫の如く背を丸め蟹の如く横に這ひ出で、やがてまた頻りに今更ら思案の體、

「え、思ひ切つて、申し上げませうか」

「お言ひよ、それを言ふために來たのだらう、何だか早く言ひよ、お金でも欲しいのかえ」

「いや、金子の儀では御座いません、實は、打明けますれば、女の儀で御座います」

「おや女のことかえ、妙だね、女が何うしたの」

「え、女が拙者に惚れまして」

「おや、大變だ、どんな女か、委しく言つて御覽、さぞ美しいのだらうね」

「おひやかし遊ばしちやア奥様、困りますよ、申し上げられません」

「それでは眞面目に聞くから」

「え、茲に一人の女が御座いまして、それが拙者の妻になりたいと申しますが、如何いたしたもので御座いませう、妻にしなれで逆も生きて居らない奴で御座います」

わざと恍けて馬鹿げて飽くまで初めいて、眞面目腐つて陳べ立てたる健次の面相、白癡が夜中の寢言に似たれども、これぞ却つて此奴の本色、どんなもんだい、驚いたらうと額越に見上げた

る心のうちには、この半婆アそも、如何なる音をや發せんと待ち掛けぬ、

流石の夫人も唯あつと呆れて健次の顔を打守りしが、俄にホ、と笑うて、

「大變なこつたねエ、お嫁にしないと死ぬといふのかね」

「はい、拙者の女房になれないぢやア、とても女に生れた甲斐がない、などと申して居ります、元來が拙者に惚れて居ますから」

「おや、ひどい事ねエ、しかし能く氣をおつけよ、いくら學問や才智が長けて居ても、女といふものは別なもので、若い人は誰しも欺されるから」

「いえ何、決して欺すやうな女ぢやア御座いません、たゞもう一途の氣性です」

「それが危いよ、誰だつて初めから欺されるのを承知で掛る人はないからね、油断が大敵だよ、うかうかすると不可ンよ」

「なアに令夫人、それが貴公子とか富家の息子様とか、乃至また今は落魄しても後に云々の見込のあるとか、ちよいと觸つても音のするものなら知らぬこと、打つたつて叩いたつて蹴ればとて踏めばとて、空々寂々、まるで風のやうな赤裸一貫の拙者を、どこの女が手に掛けてくれますものか、金を持ってばこそ盗賊も怖い道理で、欺して綾なすだけが先方の損になりますから、天下およそ拙者に惚れたといふなア全く惚れたに相違御座いませんな、もし先方が見込み違ひで惚れたなら先方の失策、中途で気がついて嫌になつたといやア元の奎阿彌、すぐ其場で暇を遣りませうし、事は試験、萬事が先方まかせて此方は此まゝの黒田健次、まさか喰ひ殺されて生命を取らるる心配も御座いますまいから、試みに持つて見ようと思ひます」

馬鹿げたるうちにも自から一條の理を立て、迫れば、呆れて取合はざりし夫人も今は思はず耳を立つる風情、

「さういへば、まアそんなものだがね、かりにも人間の大概を猫か犬のやうに、試みに持つたんなか」

「お言葉で御座いますが、もし先方が犬か猫のやうな冷い根性で、惚れたが虚言なら此方が試みに持つたも、さほどに不義背徳ではなし、また眞實この無一物の健次に惚れて生涯を契る心ならば、拙者も其まゝ仔細なく一生の妻として持ち通します、大體が先方からの申し込みで此方は受手で御座いますから萬事その時は臨機應變、如何なもんで御座いませう、かつまた自己一身の衣食へ出来ざる風來の黒田健次が何の必要あつて俄に妻帯するかといふ理論は、これは別問題として、もかくも女を御一見下さいますまいか、殆ど塵塚の芋の尻尾を見るが如き御心持で、はい、連れてまわりますとも、たゞ御覽下さいまして、お前の年は幾歳で名は何といふぐらゐの御言葉さへ賜はりますれば、其間に大略の様子が分りませうから、なアに令夫人、いけなげやアそれまで、たまには宜い御慰みで御座いますよ、はい、はい」

夫人が元來好奇の性を脱うて、ぐいと咽喉笛に喰ひ付けば案の定、

「おほゝゝゝでは其女を一度つれて来て御覽、何か反物の一品もあげれば済むだらう、あとで破談になつても」

「反物、反物なんぞ餘計なことつて御座います、臺所から汲み出す番茶で結構、たとひ一言でもお言葉を賜はるのが彼女の僥倖、其外に何にも入りません、しかし萬々一、もし拙者の妻と定りま

ツ立てて、首を傾け肩を時てながら、
「おい黒田、別後の挨拶は先づ置いてさ、この大道で立話も變だよ、さアどツかへ連れて往ッて奢れよ、生憎、今日は倉橋上田の二人が居ないから奢り榮も無からうが、なアに二人分は自己が喰ッてやるから安心してね」

「奢るよ、奢るとも、無論このころは地獄の上の一足飛で、懐中は昔ながらの健次だが、なに奢るよ、君に見付かツたが百年目、赤裸になツても御馳走すべし」

「いや妙、いまだ黒田の本色を失はざるところ頼もしい、ぢやア御陪食と出掛けようかな、しかし黒田同じ奢るなら、くだらない料理よりやア鰻にしるよ、むゝ鰻が宜いぜ、骨を舐る世話がなくツて」

「よし〜委細承知、もうかうなツた以上は君に生殺與奪の權ありだ、あは〜、仕方がないよ」
「あは〜、ひどく弱ツたねエ、いやに觀念したもんだねエ」

つくねんと腕を組んで沈黙なる時は山の芋の如く、さツと機を視うて疾きことは風車の如しと、浮世を相手の洒落に自から兵家をもて任ずる黒田健次も、眼光をり〜人の腸をぬく川上三吉に見付けられては百年目、もはや遁れぬところの觀念の洞を据ゑ、奢れ〜といはるゝまくに漉

面つくりながら先に立ち、しかも鰻といふ註文には此邊のいづこに求めん、まづ外になしとて麹町三丁目の丹波屋に入りぬ、

「骨がなくツて舐るに便なりと殊更に鰻を望んだのは、強ち僕が好物のみでないよ、倉橋上田の二人へ土産として持つて歸るに都合の宜いのみでもない、そも〜外の料理と違ツて、待つ時間が長いから従うて君を責むるの時間も長く、かつまた小串中串大串と順を以て小より大に註文したのは、はやく飽きて胸に支へざらんがため、將に大に喰はんとするの用意周到、どうだい黒田」

眞向額を會釋もなき初太刀一本、ぐわんとまゐられて流石の健次いよ〜敗北の體、
「やア君ひどいな、酷だな、しかし相變らずの奇警秀拔には驚くよ、時に改めて謝すべきは、劍頭の兄等に反いて立退狀一片の始末、獸皮六枚の持ち運びに似たる形跡、あはせて爾來無沙汰の申譯」

「そんなこたア死兒の年を數ふるの愚だ、よせ〜、過日貴公が門前に吊したビスケット六斤と一封の書中に於いて十分だが、さて黒田、山にあらず川にあらぬ紅塵百尺の眞只中、さても其後さるほどに嚙や面白かつたらうな、仔細なくば目下の境遇、否、君が手腕の凄いところをね、ち

いふころ始めて首をあげ身を反しながら、
 「さア黒田、貴公の註文通り、今日は君に逢つたと思はず、たゞ久しぶりで鰻にのみ逢つたと思
 うて十分したゝかに快を盡したから、もう歸らう、僕は一步お先へ出るよ、狼藉の後始末は固よ
 り貴公の役だ、宜いか、ちやア御説に従うて、再會を期するまで謹んで君の志の成るを祈
 さ、これで失敬しよう、名残は惜しくとも」
 いひつゝ起つて見返りもせず、便々たる腹を撫でながら飄然として去りぬ、
 あとに取残されし黒田健次、ほつと胸をさすつて四邊を見ながら、まづこれで安心安堵、やれや
 れ危かつたぞ、さらば我も歸らんと價格を拂うて丹波屋を出づるや否、急ぎ足に辻を曲らんとし
 て何心なく振り返れば、川上三吉しづかに笑うて我影を慕ひ來りぬ、
 「やア君、ひどいな、未練らしい、君にも似合はないこつた、今日は僕に逢つたでない、たゞ鰻
 に逢つたといふ以上は、敢て僕の巢を探る必要も無からうに」
 「黒田、自己も川上だ、そんな事で執念ぶかく後をつけて來たのさやアない、つい君に言ひ忘れ
 た一言があつてよ、もしそれ猶かつ君が自己を疑ふなら、こゝから汐入村まで人車を備うて送つ
 てくれ、どうだ」

「あゝまた遣られた、しかし宜いわ、人車で送らう、時に君が言ひ忘れた其一言たア全體な
 だ」
 川上三吉つか／＼と歩み來つて黒田の手を握りながら、其顔じつと見詰めて聲靜に、
 「おい黒田よ、貴様が平生から唱へた目的は手段を辯解するといふ語ね、ありやア不可ンぜ、ど
 う考へても不可ンぜ、願はくは手段を以て目的を辯解してくれ、たのむ、君のために祈るよ、宜
 いか、また願はくは能く戦ふの人となる勿れ、唯よく戦を未然に防ぐ人となつてくれた、左様
 なら、あばよ」

其十一

いろ／＼談話があるから、あすの朝ちよいと來ておくれ、なるべくおつくりをしてね、めか
 しこんでよ、しかしあんまりハデな風はいけない、おしろい臭いのは一切無用、たゞ生地
 綺麗なところを其上なほも入念に磨き立て、髪だけは新にお結ひよ、肌にかかひものは少
 しぐらゐる宜からう、あら／＼かしく、

健 上 り

お島ぼう

封書の表面は下宿の亭主の名として、この郵便を差出すや否、誰しも戀は身勝手、あすの朝といふ文字を読み落しけん、其日のうちにお島を乗せて人車の音から〜と駈け来りぬ、お島いそ〜と伯父への挨拶を捨て言葉にして、そのまゝ健次が居室なる襖の外に立ちながら、わざと俄に落き付きたる體、

「這入ツても宜う御座いますか、お差支はないの」

室内よりは健次が笑を含みし聲、

「誰だ」

「誰だツて貴方、妾ですよ」

「妾ちやア分らない、名を言へ」

「はい、たしかお島とか申しましたツけ、おほ〜〜」

「むゝお島、どうやら聞いたらしい名だ、まア這入ツて顔をお見せな、物覚えの悪い男だからね」

「さやうなら御免あそばしませ」

あゝ茲に至つては健次もお島も共に三歳の小兒、いつしか小本の口繪に落ちて衰れや一匁五分の重量もなかりける、

「来いなら来いといふだけを書いて下されば宜いに、なぜ今日のお手紙は、あんなにむづかしいんです、なるべく粧飾せの、いやおつくりをしろの、そして白粉臭いのは嫌だの、髪を結び直せの、匂ひ物をつけて来いのと、ほんとに呵しい事ね、どうかなすつたんですか、とても御註文通りに行届きませんから、いッそのこと、平生のまんまで来ましたよ」

いひつゝ、傍の火鉢を引き寄せて灰かきならし、亂杭の如く立ツたる巻煙草の吸口いち〜片付けながら、炭をついで鐵瓶の腹に湯加減を試みし體、はや此女どこやら女房めいて仔細らしき横顔を、健次ちらと見ながら態と氣付かぬ風情、

「なアにね、あゝいふ手紙をやつたなア、ダン〜と深い事情があるのよ」

「どんな事情です、はやく聞かして下さい、あんまり變だから氣にかゝりますワ」

「いや決して悪いこつちやアない、互の身に取ツては上々吉、おいお島ぼう、いよ〜卿を以て公然の黒田夫人とする時節到来、出来たよ、うまく遣ツたぜ」

「うそ、うそ、うそ、池の端で妾が口を酸くして一夜あれほど頼んだに、其後なんの返事もな

し、ちやうど今日で八日に成りますよ、晝と夜を合はして十六日になりますよ、だから妾は然う思つたの、え、口惜しい、あんな事を言はなけりやア宜かつた、先方は何とも思はないに此方ばかり乗氣になつてさ、馬鹿々々しい、まるで利益のない佛様へ御通夜したやうなものだとし「おい、愚痴は言ひツこなし、八日の間さらに返事をしなかつたのは、これぞ却つて此方の苦勞した證據だ、ところで和女ね、一度おれの伯母に逢つてくれないか、かねていふ上二番町の佐原の伯母によ、ともかくも和女を見たいといふから、なアに何が恥づかしいもんか、萬事は自己が言ふ通りの挨拶だけして、あのあとは問はれる毎に唯、はい、といやア済むのさ、ね、これが大事の瀬戸際、しつかりしてくれよ互の身のためだ」

「例の黒田が一人の女を連れてまゐりまして、過日ちよいと願つて置きました儀につき、是非とも奥様に御意を得たいと申して居りますへが、いかゞ取計ひませう」
取次の言葉に佐原男爵夫人おもはず笑を漏らして、

「おや、ほんとは連れて来たのだね、どんな女だい」

「はい、よく見ませんが、何だか大變に容姿の宜い女で御座います」

「年齢は幾何ぐらゐだい」

「十八九でも御座いませうか、至極丁寧な挨拶ぶり、萬事おとなしい温順らしい女のやうに思ひます」

「ふむ、妙だね、そんな女を、なるほど黒田は顔に似合はない男だよ、ともかくも此方へ通して御覽、をかしい事ねエ、あの黒田が」

こゝぞ大事の瀬戸際、運よくば玉の輿にも乗るべき準備、よく氣をつけて福の神を遁すなど伯父に勵まされ、其身も生涯出世の晴れと思ひ込んだる上、あくまで黒田健次の術に落ちて萬事を言ひ含められたるお島、もとより十人竝に二三段も立優りし身を、そんじよ妓輩も及ばぬ二日かけの大磨きに磨きたてながら、うまれつきの愛敬を底に含み浮世馴れたる蓮葉氣を押し包みて、萬事わざと初心めいたる優しさ尋常さ、我身の大事と思へばこそ斯くも恥づかしさを忍ぶが如き風情にて、おづ／＼と健次に伴はれつゝ唯さしうつむいて、顔を赧め身を縮むれば、さすがの健次も何とやらん肩を萎めて頭を掻きながら、

「え、過日ちよいと御耳に入れました女は、これで御座います、御覽の如き不束女で汗顔に堪へません、あは、今更ら仕様がなと思召して、萬事どうか偏に御勘辨を願ひます、はい、

過日も申し上げました通り、拙者が下宿の姫で、これまで、ある大名華族に奉公してをツた女
で御座いますが、近ごろ暇を取って伯父の手傳かたく、まゐつて居りました間に、つい、妙な
工合で、變な事に、あはゝゝゝゝゝゝ
いひつゝ振り返りて斜めにお島を見遣りながら、
「おい何とか御挨拶しないか、もうかうなりやア、きまりの悪い事もないから、萬事大目に見て
下さるよ」

お島いよゝゝ恥づかしげに頭を下げて顔を赧めつゝ、あるか無きかの小聲に健次の背後より、

「初めて、御目にかゝります、妾は島と申しまして、まことに不調法もの」

男爵夫人つらゝお島の姿を見て、何とか思ひけん一入さらに言葉やさしう、しかも案外に打解
けたる風情、

「委細は過日、黒田から聞きましたよ、さアサツと此方へお寄り、なるほど美麗なこと、うつく
しい事ね、黒田には過ぎるよ、おほゝゝゝゝ年齢は幾歳におなりだ」

「はい、ことし十九になりますよ」

「おや、さうかい、ちやうど宜い年頃だね、これまで何處の華族に御奉公したの」

「えゝ何で御座います、あの、妾の舊知事様で」

「では元の御領主だね」

「さやうに御座います、妾の家は伊勢の津で」

「××それでは藤堂様だね、なかゝ御大家で、どのくらの上ツて居たね」

「はい、まる三年つとめまして」

「道理で、しとやかだよ、なるほどね、黒田は僥倖者、おもふさま大事にかけてお貰ひよ、もし
粗末な扱ひでもした時は、そツと妾まで告げにおいで、おほゝゝゝゝしかし黒田は和女なら粗末
にすまいからね、ほゝゝゝゝ」
夫人とお島の談話に黒田健次は耳欬て、いちゝ心の判斷さては氣の配りに兎の毛の隙もなか
りしが、此時おもはず笑を漏らして、さアしめた、

つくねんとして閑靜なる時は山の芋の如く、さツと機を覗うて疾き事は風車に似たりと、浮世を
相手の洒落に自から兵家をもて誇れる黒田健次が、果して横着の方寸より描き出したる一狂言
敵を謀るものは先づ味方を謀るの秘訣に倣うて、白粉の溶汁に産湯をつかひし女さへ叶はぬほど

のお島を、萬事ぼつと温順づくりの生娘に仕立てつゝ、佐原男爵夫人を首尾よく一ぱい喰はせた
る後、長居は恐れ多辯は憚り、氏と生育の裾から襷褌が下り藤となつては、折角これまで朱を奪
ひし紫の露顯ぞと、殊更に座を急がせ興を割いて、そのまゝ佐原家の門を立出づるや否、互に
顔見合はせて、ほつと一息つきぬ、

「うまく往つたな、あれで流石の物堅い伯母も少しは柔いだらしいぜ、お手柄、お手柄、さア此
上は萬事しめたもんだ、安心しな、二三日たつてから自己が、また出直して、いよ／＼手詰の談
判、二人が新世帯の雑用一切を荷がせる細工は流々、へん仕上を御覽じろだ」

笑を含んで歩みながら片手のステッキを振り廻せば、お島おもはず飛び退いて四邊を見やりつゝ、
さすがに女なりけり、はや今は眞實しんから健次に身をまかせて、天晴れ末を頼むの喜悅いそい
そ、

「案ずるより産むが易いとは、ほんとですよ、お目にかゝらぬ前は、いろんな心配してさ、どん
なにむづかしい方かと思ひましたが、なアに貴方、御身分といひ御人品といひ、あんな宜い伯母
さんを怒らして、これまで久しう出入も出来なかつた貴方の氣儘が憶はれますよ、しかしね、今
まで和女の奉公したのは何といふ華族だと唐突に問はれた時、わたしやアびつくりしましたよ、

さう言つてあるなら以前に聞かして置いて下されば宜いに、貴方なんにも仰しやらないんだも
の」

「さう／＼いやはや自己も驚いたよ、過日ちよいと誤魔化して置いたのを忘れて居つたから、南
無三、和女が何といふかと手に汗を握つて居ると、さも殊勝らしい口元で、もと妾の家は伊勢
の津で御座いますから舊知事様になんかつて、それでは藤堂家だねと先方から萬事はせした腕に
やア、また驚いたよ感心々々、しかし感心が通り越して和女は實に怖い女だよ、自己は伯母甥の
間柄で、少しぐらゐの嘘も時の方便、根が元の身になりたさの精一杯で、別に罪といふほどの事
はなし、また他日に化の皮が現れたつて其場で叱られりやア済むもの、和女は他人と他人の間
柄、しかも今年十九の其かはいらしい口元からはじめて逢つた五十女の先づ身分ある目上に對つ
て、だしぬけの不意に問はれた難題を河童の尻とも思はないで、あれほど立派に答へた魂膽は凄
いよ、むゝ素破らしいもんだ、この様子ぢやア他日に自己をも、どんな目に逢はせるか知れない
あんまり度胸が強過ぎるからね」

「おや何ですとえ、素破らしいの凄いの度胸が強過ぎるのつて貴方、こんな大膽な女にしたのは
誰です、誰のおかげで、こんな嘘つきになりましたの、まづそれから伺ひませうか、はい」

「それ見る、もうそれだもの、たまらないね、公然の夫婦にでもなツた。曉は天晴れ、嫌ア大明神、朝夕の禮拜でも悪からうもんなら、嘘や忽ち神荒れに荒れ給ふこツたらうね」

「いくらでも馬鹿になさい、どうせ貴方に、さう思はれたからは宜う御座います、こツちにも料簡がありますよ、あすの朝、妾から伯母さんに手紙をあげて、委細の狂言さツぱりと打明けますから、はい、上野松源の女中お島よりとして」

「やアこいつは酷い、あやまつた、どうも手厳しいな、えらい急所を押へられたぞ、この分では嗚呼いよ、大明神様だ大明神様だ、下には置けない、新菰に包んで屋根へでも抛り上げようか」

「抛り揚げるとも抛り下げるとも貴方の御勝手次第、どうせ妾には叶ひませんわ」

「いや怒ツたぞ、怒ツたぞ、これ女房どの、良人より先に歩くといふことがあるか、待たんか、おい待たんか、馬鹿に早い足だな」

うてばとて叩けばとて風を喰ツた茄木の太木なんの音もなく、逆さまに吊して飾へばとて鼻血の外に出るものもなき黒田健次が、佐原男爵夫婦、下宿の伯父姪、以上の四人を三寸不爛の舌一枚

に絞なして、すツツンからりの寒鷲が俄に浮世の巢を作らんと、計畫すでに九分まで消ぎ付けたる残り一分の狂言に、なほも人知れず思慮を凝らすランプの下、机の上の筆硯書籍も近ごろ手に取ツたことはなく、つくねんと例の山の芋に似たる身は茲にありながら、くるくまはる風車の心は日夜四方を走せ廻ツて、ぼんと叩く灰吹の煙も誠や蛇となツて天井に上る折しも、

「え、御免下さい、もし、もう御睡眠になりましたか」

襖の外に響するは正しく下宿の亭主と、健次ぬからず新聞を取掲げて振り返りながら、

「おいさ、まだ寝ないから、さアすツとあけて」

亭主しづかに襖をあけて迂り入りつゝ、満面に溢るゝ笑は問ふまでもなき今日の事、はや一人の姪を玉の輿に乗せたる心地して、一入さらに恐悦面を突き出しながら、

「え、大分に夜も更けましたが、お一人様で嘸お淋しう御座いませう、ちよツお島めほんどに氣の利かないツて、實は貴方、いろく定めし御談話もあるだらうから是非、宿ツて行けと申し聞けましたが、御承知の通り萬事せツかちの女で、えへへへ今日番町の御邸宅へ伺ツて歸ツた後といふもなア、たゞもう嬉しさが込み上げて一切夢中で御座いますから、何を申しても聞かないで、兎も角も着物や手道具を始末して来るツて貴方、すたこら急いで駆け出しましたが、いづ

れ明朝また参るだらうと存じます、へい、へい、へい」
 「そりやアあんまり氣が早過ぎたね、自己は番町から歸ると直、晝寝をして仕舞ツたから何にも知らないが、むさうかい、道理で夕方に目が覚めても聲がしなないと思ツて居たよ、しかし今日は萬々の上首尾だツた、番町でも大變、鳥が氣に入ツた様子で、もう大丈夫さ、安心するが宜い」
 「いや、委細はお鳥から承りまして、拙者も蔭ながら、へい、もう此上もない有難い事と喜んで居ります、何分どうか宜しう、へい、へい、とところで、甚だ立入ツた失禮な事を伺ひますが、え、これまで暫くの間、どうやら御遠々しく遊ばした番町の御邸宅へ、今更ら急に何かの御請求も却ツて、へい、妙なものかと存じます、で御座いますから、もし萬々一、それに就いての御用でも御座いますれば、決して御遠慮なく、なに貴方、生意氣に鳥までが然う申して居りましたよ、妾だツて三年の間に溜め込んだ驛遞の通帳があるから、あの方に半年や一年の御苦勞はさせない、なぞと、實に彼女の差出がましいには困ります、何事でも自分ひとりに引き構へて、もう今日となツて拙者が貴方に御用でも勤めますりやア、すぐ劍突を喰はせますよ、餘計な御世話だなツツて、へい、をり／＼小面の憎い事が御座いまして、えへ／＼／＼／＼」
 それ御座ツた、いよ／＼來居ツたわ、萬事かうなうては叶はぬところ、狂言はすツかり大當りの

獨占か、はや伯父姪の間に競争が出来たらしいぞ、こいつは妙、妙々と咽喉の鳴るべき黒田健次殊更に平然たる無心の顔色にて

「いや芳志は嬉しいがね、まア當分うちやツといてくれ、なアに、何とかして番町から引き出すよ、大した金といふぢやアなし、高が下女ひとり夫婦二人、その上に置けば車夫ぐらゐの住居だもの、そして自己も此まゝ長く遊んで居ない心算さ、いづれ遠からぬうち何とか身の結局がつくからね、どうか、なるだらうよ、あは／＼／＼／＼、しかし何かい、鳥が三年も驛遞へ溜め込んだのか感心だな、女といふもなアまた別だよ、ふむんさうか」

「なに貴方、三年溜め込んだツて料理屋の女中ぐらゐで何程の事が出来たものか、たゞ御蔭様で、これまで松源のお鳥と人様に云はれただけ、外の女中よりやア少々えへ／＼／＼／＼、それも、ホンの螻蟻の涙で、やう／＼二本が關の山で御座います、へい、實に可哀さうなもので、お説の通り全く女なればで御座います、へい、それを貴方、あんな失禮な生意氣を申しますから、始末に終へない女で」

二本が關の山といふ謙遜の言葉を解すれば、必ず二百圓より尠からず三百圓以下のもの、しかも彼女なかなか着類の贅澤、料理屋の女中風情には過ぎたる臍物、しめた、しめた／＼と思ふ心を

顔色にも出さず、から／＼と高笑ひしながら、
 「さうだらうよなア、三年かゝつて生命より二番目の物がやう／＼二本か、あは／＼／＼しかし
 感心だ、自己が笑つたなぞと言つてくれるな、たとひ生意氣でも出過ぎた事でも、折角それほど
 思つてさ、自分の男に苦勞させまいといふ芳志は金玉、まんざら腹も立たないからね」
 腹の立たないどころか、この横着野郎、今夜ろ／＼寝られざるべし、二百圓といふ聲が耳の底
 に染み込んで、

其 十 二

床を左にして書縁の柱に背を凭せ、兩脚を組んで裾に包み辱に埋めつゝ、あけ放ちたる庭前の景
 色と建て切りたる座敷の内を等分に見分けたがら、野原の火事に等しく蓬々たる口髭の間よりマ
 ニラの煙を吹き出して、心地よげに笑を含める佐原男爵の面前、およそ疊を横に二枚ばかり隔て
 て此方に坐せるは例の黒田健次、いつに變らぬ物騒の面がまちを振り上げて會釋もなく、鼻を織
 め唇端を反しつゝ、しきりに喋々と僥舌り立つる聲のみ際立ちて、小田の蛙の初啼に似たりけ
 るし

兎の毛の取瑾もなき美男に好かぬ顔あり、とぼけたる醜男子に愛敬を持てる面あり、遠慮勝の正
 直者に嫌味の多きあり、無遠慮の横着者に何處となく面白き奴あり、人はさまざま／＼世はいろ／＼
 こゝに健次は愛敬ある醜男子と見られ無遠慮の面白き奴と思はれて、小面の憎きほど却つて時に
 男爵の寵を増し、思ひ切つたる蕪度胸のあるだけに何とやら男爵の氣に叶ひ、今は殆ど當家に無
 類の出頭、いはゞ生きたる骨董物の如く扱はれて、たゞ妙と呼ばれ奇な奴と弄ばるゝに似たれ
 ど、此奴また別に一個の腸を備へて逆さまに男爵を骨董物にせんとするの氣焰みち／＼たり、
 「黒田、貴様ア近ごろ家を持つさうだな、どこで拾つたか大變な美人を連れて來たさうだな、あ
 は／＼／＼なか／＼油斷のならない奴だ」
 「はい、拙者が駈け廻つて拾つたのちやア御座いません、わざ／＼先方から飛び付いて拾はれに
 來た奴で、色男やむを得ざる次第に迫られ近來ちと閉口いたしましたな、また家を持つ一條も拙
 者の思案でなく、やはり其女が無理に持たせる始末で、ぜひ貴方、よう貴方、ねエ貴方なかと
 半泣きの勢ひで攻め付けますから、進退こゝに谷つて是また致方のない仕義に御坐います、しか
 し不肖健次が今年二十八歳、浮世の巢を構へて牝一疋を左右に侍らすぐらゐの事は、前以て仔細
 らしう閣下の御耳に入れずとも、強ち氣儘勝手罪にも當るまいと存じ、わざと差控へて居りま

したが、奥様だけには過日お慰みのため一寸その女を御覽に入れました、はい」

「む、それは昨夜、聞いたがね、その女どうも不思議だな、奇怪だな、人もあらうに貴様にさ」

「貴様に不思議とは、女たるもの、眼中には決して健次なしとの御意で御座いますか」

「あは、い、い、怒るなよ、まアそんなものだ、貴様よく自分の面と今の身を思ッて見ろ、まだ鏡といふものを知らないな」

「これは閣下おなさけない、縁は異なるもの味なもの、拙者と雖も、拙者でも、いやはや、實にお情ない、どうも残念千萬、只今の御一言お恨みに存じますな、この健次たる此健次そも、黒田健次を」

「はい、い、酷く無念がるな」

「無念、心外に存じます、拙者は兎も角も、第一が彼女に對して済みませんから、恐れながら唯今の御一言を質に取りまするが、宜しう御座いますか」

「はてまた妙な事を言ひ居つたぞ、今の一言を質に取るとは」

「外でも御坐いません、およそ世の中の女たるものは健次に惚れる筈がないと思召して、いかにも不思議だ奇怪だとの御一言は、これ乃ち其女に何か仔細あるか、但しまた見當違ひから起つた

縁談とても長くは持つまいと今に破れるぞと仰せられたも同然、是に於て拙者が願ひますは、もし此女に何の仔細もなく見當違ひでもなく無事に添ひ遂げました曉は、かつて我等夫婦を誤解あそばした無禮、いや無慈悲の御言葉を、凡そ幾何ほどの代價にて御買ひ戻し下さいませうや、いひつゝ膝を動かして、よき敵と見れば坐興の戯言にも通さぬ横着者、さつと忽ち機を現うて風車の本色を現せば、さすがの男も苦笑ひしながら、

「貴様また妙に切り込んて来居つたな、實に危険な奴だ、しかし宜いワ、かりにも人事の大禮を毀傷けた一言、百圓に買つてやらう、半年無事に添ひ遂げたら」

「しめたとは何だ」

「いや有難う御座います、つきましては拙者も萬事の準備に、ちと頭腦を痛めて居ります折柄半年後の百圓を二つに割つて、只今五十圓だけの前借相叶ひますまいか、いづれ賜はるべき御祝儀を別として、はい、男妾かなんぞのやうに、まさか先方の女ばかりに出させたく御座いませ

ンから」

「いよ、酷い事を言ひ居るぞ、だが仕方ない、ぢやア五十圓呉れう」

「はい、謹んで御禮申し上げます」

やう／＼年齢は二十歳に足らねども、波浪のまに／＼幽に見ゆる松源のお島とて、外貌に似合はぬ奥の巖組、遠目の磯邊ぼつとして心の快を姿に包めば、ふりまく愛敬に加減あつて出入の世辭にも鹽梅を外さず、つけば突かれて花瓣こぼしながらも根は固く、ひけば引かれて情の露に濡れながらも、何處やらピンと抛ねて乾いて、また立直る一癖女、あゝ彼女は辻の石佛ちや、面相ばかりが殊勝氣で祈つても口説いても利益はないと、三年以來の戀の亡者を中有に迷はせしほどの女そもや如何にして布子一點寒晒しの黒田健次にコロリと遣られしか、流石のお島も健次の術に落ちて上二番町の佐原家に伴はれ、伯母と聞く男爵夫人に引き合はされてよりは、唯いそ／＼として總身を物に急かるゝ心地、矢も楯も堪らねば其まゝ松源へ走せ戻つて、おのが部屋に飛び込むや否、衣類手道具一切合切、さながら火事場の如く葛籠に押し込み風呂敷に捲い包んで雪の額に時ならぬ汗を濕せば、おなじ朋輩三四人おもはず眉を擧めて取巻きながら、

「おや／＼お島さん、どうかしたの、なんだつて、またそんなに、火の粉を被りやアしまいし、

變だね」

お島、聞くより振り返つて片頬に笑を浮かべながら、なほも忙しの手を放さず、

「あア變だよ、ちと上氣あがつて變になつてるからね、うか／＼其邊に居ると喰ひ付くかも知れないよほ／＼／＼」

「おツかない事、しかし眞實に變だよ、あわアくつて荷物なんかをさ、内證でも知つてるの」

「まだ何にも言はないから知るまいが、なアに今に分ります、はい、妾の伯父がね、今に来て、萬事すつかり分るから、其時お前さん方にも改めて挨拶します」

「は、ン、ちやア何だね、急に暇を」

「まアそこいらだね」

「さアいよ／＼たづねもんだ、暇を取つて、どうするの」

「どうするもんかね、妾は今年十九だよ、いつまで料理屋の女中をするのだと、叱つてくれる人があるからね、なるほど、それも左様かと思つてさ」

健 田 黒
「おや、おや、おや／＼酷いこと、前口上なしの唐突に、お島さん酷いよ、お前それで済む心算かえ、いえさ此まゝ済ます思慮かえ」

「済むの済まないツて、今更ら仕様があるもんかね、腹が立つなら思召し通り、さアどうなとしておくれと言ひたいが、お生憎さま、今日からア妾一人の身でないから、その覺悟でよ、あとで後悔しても無効だよ」

「あらまア」

「これさ早く口を塞がないと、塵埃が道入るよ、またそんなに口を閉ぢると息が詰るにさ」

「え、口惜しいツ、どうしたら宜からう」

「それは御勝手次第に遊ばしませ」

風なきに砂煙舞ひ揚つて空をかすめ、雨なきに地上の撒水泥濘を覆して、馬の嘶き車の響き、往來の人の脚を織り出す上野廣小路の雑沓も、さすがに朝ぼらけの景色うちしづみて柳も眠る兩側の家々を、七分は夢と見ながら章駄天走りに駈け行く高臺一挺、さては後朝の袖の移り香を北方より乗せて歸る奴かと思ひの外、見たばかりで味は知らねど料理の外の御馳走と人はいはれし松源のお鳥なりける、

「車夫さん、御苦勞だが骨を折つて下さいよ、徒勞にやアしないからね」

「へエ有難う御座いやす」

乗人と曳人の氣合しツくり合へば、いよ／＼宙を飛んで車の齒風を鳴らしつゝ、矢聲もろとも萬世橋の此方まで來掛る折しも、よぼ／＼爺の朝稼ぎに乗つて橋を渡り來るは伯父の顔、お島みるより駈け抜けし人車を戻して呼び止めながら、キリリと目元に現す腹立の顔色、聲さへ痾走つて一入高く聞えぬ、

「おや伯父さん、今ごろ何處へ」

「お、お島か、何處へツて、和女の處へさ」

「和女の處へでもないよ眞實に、萬事ぐづ／＼して居ちやア面倒だと思ツて、きのふ歸ると直ぐ衣類手道具一切合切を取纏めてさ、今に來るか、今か／＼と待ツてたに、とう／＼來てくれないでさ、仕様がなねエ、朋輩からアいろんな事を聞かれるし、内證からア恩義がましい事を言ツて引き止めようとするしさ、なアに今に伯父が來て委細わかりますの一點張で押したのもの、ゆるべ一夜は氣まりが悪くツて、どんなに變だツたと思ひだ、妾の急ツかちを知ツて居ながら、じれツたいねエ」

「あは、またお株を遣ツてらア、時間ぎれの汽車で旅へ往くちやアなし、和女のやうに急

いたつて何になるものか、今朝かうして早く来りやア、それで宜い譯だに」
「ぢやア早く行つてね、ついでに荷物も取つて来て下さい、あとで二重手間になるとまた面倒だから」

「いゝつてば、ほんとに仕様のねエ急ツかちだ、前夜も和女の事を言ツたら、大變に笑ツて在らツシヤツたよ」

「え、餘計な事をお言ひでないよ、しかし今朝アまだ御寝みだらうね」

「なアに、おれと同時に起きてよ、なんだか氣が鬱ぐツて、コツプで冷酒を三四杯」

「おやまア酷いこと、なぜ止めて下さらないンだよ、氣が利かないツてば、同じ事で一寸燭をしあげれば宜いに、まだ朝から冷酒なんぞを」

「え、自己が知ツた事かい、そりやア和女が意見する役だい」

「おほ、いゝ、御免よ、ぢやア伯父さん早くね」

「おいさ、萬事承知だ」

鴉は夕暮にのみ啼くものと思ひ、軒の雀も白晝ばかりに囀るものと心得て窓より射し入る旭を面

上に受けずば横に仆れし石佛、さらに立つこと知らぬ黒田健次が、なんとかしけん、今朝に限ツて下宿の亭主と共に跳ね起きつゝ、みづから夜具を疊んで戸棚に押し込み、前夜のまゝのランプの火に先づ煙草一ふく、吸ひ付けて用なきあとを吹ツ消せば、まだ明け放れぬ家の内ぼツと薄闇きに、元來の惰性たまゝの朝起き、かつは今の身にこれとて爲すべき用もなく、いつしか襲ひ來る睡魔を驅らんとて大コツプに冷酒三四杯ぐツとあふれば、空腹の酔心地いよゝ重き目睫となツて、そのまゝ其處に何の事やら元の石佛となりぬ、
をりしも心いそゝ入り來るお島、すツと襖をあけて此體を見ながら、えゝ人の氣も知らぬ男の平生は斯うしたものと、おもはず眉を蹙めて目を釣り上げつゝも、さて女は弱きもの、今しも健次が押し込みし夜具を又もや引き出して裾邊の方より打着せんとすれば、
「あゝうるさい、誰だ、乃公の安眠を、畜生、だゝ誰だ」
いひつゝ寢惚けて片拳を振り廻せば、あやにく差出すお島が雪の額にコツリ、
「あ痛、おゝ痛い、あらまア酷いことツてば貴方」
お島も今は立腹まぎれに、二度の拳をいたゞかじと顔を反けて武者振りつき、めちやゝに力を極めて揺り起せば、流石の石佛も驚いて鎌首おツたてつゝ、

「え、何をするんだ馬鹿め、蟲が出るぢやアないかし」

「おほ、う、う、う、幼兒ぢやアあるまいし、貴方よりやア此方が蟲持になりますワ、ボカンと唐突に拳固なンぞを」

「だしぬけにどうしたといふんだ」

「どうしたもないもんですよ、お風邪を引かすまいと思つて夜着をかける途端に貴方、痛かつたことよ、見て下さい、痛が出来たかも知れないほど、朝ツばらから拳固の御見舞にあづかつて」

「あは、う、う、う、さうかい、そいつア面白かつた、いや悪かつた、堪忍しな、しかし強勢に早いな今時分あわて、何しに來たのだ」

「それ、これだもの眞實に勢がないねエ、伯父さんといひ貴方といひ、一方は萬事ぐづぐづの老年、一方はお臀に火が喰ツ付いても無頓着の大平樂、あ、中間に挿ツた妾が因果ものさ、今は未だしも、これから、將來は、どんな苦勞するかも」

「これあ朝から枕頭で愚痴なンかア潦してくるなよ、さうでなくつても氣が鬱いで、自棄酒を流し込んだところだから」

「おや貴方でも氣が鬱ぐ事が御座いますか、はて妙だねエ、をかしいよ、貴方ア氣が開き過ぎて

平常おツばなしの夏座敷かと思つて居ましたワ」

「おい、愚痴を止めると、また冷やかすよ、悪い癖だ、ちと謹慎むが宜い、自己だつて人間だア、たまにやア氣分が閉ぢて泣きたくなる事もあるさ」

「なにがまた、そんなに氣が鬱ぐんです、言つて下さいよ」

「なアに外のこつてもないが、きのふ番町へ往つて例の金を引き出さうと思つたところ、お生憎さま、覗ツた半分しか出ないから、自己も腹が立つて、え、面倒だ入らないとばかり、座を蹴立て、歸途に、ちよいと知己を訪うて仔細うちあげた甲斐もなう、此奴また近來なンだか失敗の結果でやう、五十圓ばかりの鼻糞よ、しかし他人にやア折角の深切を無にする譯には往かないから、まづ一時うけて來たがね、あんまり馬鹿々々しいから、イツそのこと、三四月の將來で家を持たうかと思ふのさ、和女どうだエ何と考へる、なアに番町だつて、どうせ出す金だから半分にする必要もないが、悲しい事には自己が從來の身持だ、改めたといふもの、まだ際立つた證據を見ないからね、しかし、もし和女が伯母に逢つてくれりやア、いうただけ悉皆と出すかも知れないよ、む、何だか、そんな口吻があつたよ、畜生、現在の甥よりやア、たつた一度しか逢はない和女に信用を置いてるんだから始末にいけない、ちよツ」

舌鼓うちながら夜着を引ツ被ツて首も手足も縮むれば、元來の俠に生れて勝氣のお島、膝を進めて目を睜りながら、

「宜う御座いますよ、そんなに心配なさらないでも宜う御座いますツてば、貴君で出ないお金が一度しか御目にかゝらない妾に下さるかも知れないツて、それだけで妾は十分しみる有難くツて嬉しくツて本望ですからなほさら、妾が願ひに上られませんか、なアに貴方、どうせは御厄介になるとも、こゝ半年や一年ぐらゐ、きツと妾が、だから氣を丈夫に持つて下さいよ、またその五十圓も借りた方に何か御禮をつけてね、おなじ妾が苦勞するからにやア銀一文だツて人様の御世話に、第一が貴方の肩身を狭めたくないから」

「だツて和女、先立つもなア金だぜ」

「いゝえ貴方、ちツたア妾にも用意が、まアこれを喰ツて仕舞ふまで安心なさいよ、よし無くなつても、さまざまか壁土を喰ふやうにはなりませんから、其時に私が番町の御邸宅へ願ひに出ますワ、無論それまでに貴方を立派に仕立て、その代り萬事なんでも妾に任して下さいよ、中途で種々な無理を仰しやると嫌ですよ」

「はい、何分に宜しうお願ひ申し上げますだ、あゝ此方の働きの女、實に今更に見上げたよ、

卿あツて而して後こゝに始めて黒田健次ありだ
 「およしなさいツてば、戯言ぢやアない、眞實ですよ、しかし何だか貴方ア頼りないねえ、萬事とぼけて、ちツたア、眞面目になさいよ」

其十三

わさびおろしに目鼻を添へて這ひ出すとも、女といへば拾ひ手のある世の中に、彩る浪のまにまに幽に見ゆる松源のお島とて料理の外の御馳走物といはれし身が、浴びるほどの髭にも金にも靡かで三年以來ピンと強ねたる果に、あはれ如何なる男を持つかと思ひの外、ころりと黒田健次の手に落ちしは何のため、そもや行末の幸か不幸か、黒田健次また生れつゝいたる膽魂たしかに浮世の繩張を飛び越えて、故郷よりの書留郵便に生命を繋ぐすとも、腰に其日の辨當ぶらさげて通はずとも、一身衣食の道は腕に覺悟の身を持ちながら、宿志なツての後の選取自由も待たず、今こゝに慌てゝ飛び付きし女、しかも料理屋の女中風情を妻とせしは何のため、それも行末の幸か不幸か、互に知らぬが花の春三月、彼岸櫻の咲くころ麹町の名さへ花園町に、借家ながらも工手間を厭はぬ小意氣の家を借りて、履脱石の外より見ゆる荒格子に掛けたる表札、黒田健次の四字

にはあらで『大江しほ』といふ文字を讀めば、舟板塀に見越の松こそなけれ、餘所目には何の某が世話に碎いた高安の里、畜生どんな面だと往來の足を停めぬ、三寸不爛の舌に佐原男爵を説き伏せて、一場の奇言諧謔、ちよいと誤魔化したる五十圓を知己より借りし鼻糞と笑うて、おのが懐中へ當分の小遣錢としながら、あとの萬事は下宿の亭主とお島が乘氣の沙汰にまかせ、まアともかくも宜いやうに頼むよ、上二番町に押し寄せて首尾よく破れた敗軍の將、しばらく兵を語らないからと、恍けて澄まして飽くまで例の横着を極め込みながら、此奴元來このまゝ女に養はれて髻を腐らす色達磨ならねば、日夜の心は四方に馳せて氣は稻妻の如く雲の隙間に働きつゝ、いざや衣食に顧慮なき今日よりは黒田健次が本音の吹き上げ時、おのれやれ、乗るか反るか心の機一發、世上の横面を平掌に打ッて一足飛びに跳ねたる上、逆に取ッて順に守るの諺、ちと大業なれば豊太郎が松下嘉平次の黄金を曲めた結果、これまでの狂言がらりと打明けて空を嘯くとも、男爵夫婦さては伯父姪の四人が指一本、この身にさゝせぬ男振どんな必地がすべいか、早く見せてやりたいなア、

五爵のうちの下位ながら苟も華族の銘うツたる佐原男爵夫婦に、妙なところを見込まれて捨つ

るは惜しき奴と思はれ、心の俠を情の露に溶いたる當世女、お島といふ十九の丸ぼちやに味なところを好かれて立養ひに養はれ、浮世馴れたる半白の其伯父には主の如くに敬はれ、一文なしの絹布ぐるみに悠々寛々と懐手の黒田健次、もしこれが俗物まん／＼たる溝板の猪鼻助ならば、兩親より譲りの自己が額をボンと叩いて反身になりつゝ、襦に似たる聲を發して諸人の齒の根を浮かす筈なれど、健次そも／＼それほどの奴ならねば、汐入村に空腹の憂空胴をかへて膝小僧抱き寝の疇昔よりは、いとゞ日夜の賜を絞ッて眼を八方に配り、いざや今こそ本氣の沙汰の初舞臺、一さし舞ふべき時節到來せりと思ひぬ、いはゞ一夜檢校の男爵夫婦を丸呑みにして、高が女一疋のお島を手に入れ、根が鼻糞ほどの利慾に迷ふ下宿屋風情を操ッて、其間に五尺の我身一體を安置するが如きは、一場の戲事、寝ながらの煙草一ぶく、もとより健次に取ッては朝飯前の仕事なれども、こゝに人間の巢を構へて暫く衣食に顧慮なき今よりは、浮世といふ大敵を相手に生涯の運を定むる大かせぎ、みづから心に冷笑うて乃公の本色いざやこれよりと思へども、浮世といふ奴また健次を掃溜の塵端ほどに思はねば、湧き出づる利害得失、降り来る窮達消長、うちつ打たれつ互に戦ふ人生亂軍の體は、山鳥の尾のなが／＼に長き物語、逆も一朝一夕の筆に盡きざるがため、こゝにまづ一段落の黒幕をおろしぬ、あなかして、善惡邪正の擱へどころもなき此

怪物が男爵夫婦を吐き出しながらお島を小脇に抱へ其伯父を片脚に踏んまへて、浮世の正面ぐつと睨む本場の活動は、『黒田健次』後編の部に譲る。

黒田健次 (後編)

はしがき

つくねんとして静閑なる時は山の芋の如く、さつと機を覗うて疾き事は風車の如しと、浮世を敵手の洒落に自から神算鬼謀の兵家を以て誇れば、づう／＼しき野面のツそりと牛に似て打てども叩けども動かさず、さりとして時には奥州南部じや／＼ら馬の跳ね出す如く、前途不見の闇雲に飛び乗つて引けども戻せども還らぬ横着者、こゝにこの黒田健次といふ一個の男を八寸の禿筆に鞭うツて、古今の智者も賢者も思ふに任せぬ人生風浪の眞只中に抛げ込み、試みに彼奴が押し切る横車の活動を見んとす、あはれ隙間もなき浮世の舞臺に此青二歳を迎へて容るゝの餘地ありや、ただしは此青二歳が浮世の舞臺に上り損ねて奈落の底に落ち果つべきや、茫々たる人生に磊々たる一狂漢を跳らして讀者のためには假寝の夢に代へ、著者はまた別に忘閑の一興とせん、

其一

學問は人間うまれて上等の衣食住を得んがための方便と思ふが故に、萬卷の藏書これ一喝の反故、もし學問の外に得る道ありとせば何を苦しんでか致々たる讀書の奴とならん、人を害せざるかきり目的は能く手段を辯解するがため、千百の論理これ一片の土塊、たゞ物の成敗を期して行路の善惡邪正は更に屁の如しと、心機一變の曉に由來刎頸の同志を振り棄てつゝ、赤裸一貫の身を躍らして苦學難行の汐人村を飛び出したる黒田健次、さても其後さるほどに生れつゝいたる面の皮いよ／＼厚く、したゝかの横着心ます／＼五體にみち満ちて、三寸不爛の舌鋒に飛び上りし一代華族の佐原男爵夫婦を舐め殺し、波の間に／＼幽に見ゆる松源のお鳥とて、心の俠を世辭に包んで愛敬こぼるゝ丸ぼちやの當世女一疋みごとに引ッ抱へしまゝ、その伯父に當れる下宿の老爺が無慾に似たる大徳の胸元を踏臺として、浮世の綱渡そも／＼これが最初、すらりすつと麴町の元園町に舟板塀の出格子を構へ、『大江しま』といふ表札の裏面に黒田健次の四字を忍ばせて、飯の外に女を喰ふ猪鼻助の全盛と見ゆれど、心は偏に大空を覘ふ荒鷲の羽ばたき、黒漆の如き一點の眼瞳を絶え間なく張り切つて、雨か風か、獲物は何ぞと頻りに睨み上げぬ、

家の厨に馴るゝは一年の後、家の住み心地よきは二年の後、世帯道具の整ふは三年の後、若夫婦

しツくり合うて餘所の風にも當らぬは五年の後と聞けどこゝに此のお鳥といふ女、そも／＼十四の春より松源の名物と唄はれ料理の外の馳走と囃され、世辭と愛敬の舵柄とつて出船入船たえまなき人の心を量りつゝ、ことし二十歳の曉までも浮世の浪風みごとに漕いで渡りし女、まして生れつゝいたる勝氣の俠に忽ち如才内儀の姿となつて、酒屋の小僧が麻邊を牡丹餅で叩く働きより、隣屋から打出す横釘に聲も立てず此方の榎木そつと引ッ掛くる始末まで、兎の毛の隙間もなき上に面の皮一枚で溜め込みし三百の臍線金は、たしかに一年二年の男を立養ひにすべき勢ひあれどこゝにまた黒田健次といふ奴、そも／＼自己が女房を大明神と崇むべき男ならねば、朝夕ぬつと野中に立てる石地藏に似たれど、氣は張弓の引絞つたる弦に心の弛緩もなく、いはゞ夫婦うち揃うて一對の場敷者、手を伸ばせば背後に佐原男爵の扶助あり、前には近く脚下に働くお鳥が伯父、さらば此まゝ煙草の煙を輪に吹いて天井の節穴を數へつゝ送るとも、この城こゝに易くは落ちまじとぞ見えぬ、

隔てゝ隔てなきものは夫婦の間の長火鉢、四寸づゝの織目もなき八寸の膳の上に二皿三皿の肴を載せて、爛徳利も度々の御用に袴を脱げば、主人の名のつく健次は固より大胡坐の左頬杖、お鳥は前垂がけの右の手に禪はづせしまゝの姿うれしく、こゝが人に知られぬ世界なりける、

「あゝ酔った、大變に酔った、もう酒は止さう、これンばかりで酔ふ筈もないが、さて人といふもなア妙なもんだ、まアかうして竈の下の灰まで自分の物になると、馬鹿に氣が落ち付いて腹の蟲が油斷する故か、すぐにまゐるよ、忽ちだよ、第一お前の庖丁が飲めるからね、まるで素人たア思へない、みづから御手を下し給はずとも流石ア長年の間、料理屋に御座った功能で」

「なんですよ、つまらない、今更お世辭なんかを振り撒いてさ、いくら振り撒いても拾ひ手がありませんよ」

「なに世辭ぢやアない眞實だ、ほんとに貴公は御器用だよ」

「あら、また貴公だなんて、足下だの貴公だの卿だのと、いやですよ、何とか外に呼びやうもあつたもんだに」

「では、此方の女房どもか」

「あれそいちやア淨瑠璃文句のやうですワ」

「むづかしいな、なんと言つて呼ぼう、まさか自己が唇端から夫人とも令聞とも言へないし、御臺所、御息所、北の方、奥様、いやこれも呵しい、おい細君、どうも變だね、愚妻荆妻は餘り可哀さうだし、さりとて噴ア山の神も酷いからね、あはゝゝゝゝゝゝゝゝ」

「ほゝゝゝゝ全く酔つて在らつしやるよ、まア御酒が濟んだら御飯になさい、お酌は致しませんが、ベン／＼と今までのやうに酔つた御相手は動きませんよ、まだ臺所に用がありますから」

「なるほど、さうだつたな、つい今までの氣でな」

「困りますねエ、貴方、全體に入竝はづれた暢氣ですよ、さつさと早く召上つて御寝みなさい」

「はい、とかく女房大事、家大事、ついでに我身も大事大切か、はい、はい」

四十いまだ家を成さずとは尾羽うち枯らせし寒蕪の啼く音、丈夫一身の外に物なしとは元來宿無し風來坊、子を三界の首枷とし妻を浮世の足手纏ひとは、あはれや草叢の野原を歩みかねたる弱蟲の癡言、そも／＼一匹の女郎が泣いて喚いて足に取り付き手に喰ひ付くとも、これを丸めて掌上に包むこと何の造作かあるべき、三疋四疋の我子が遣ひ廻つて前後を遮るとも、これがため、顔色青さめて門外一步の怯懦を取る奴ならば、所詮おのが身一個の活動も底の知れたる淺瀬の雜魚、さつと掻き集めて佃煮の外には箸取る味もなかるべし、とまだ家を持つて十日とならぬ新世帯、しかも新女房の細脛を嚙りながら、はや例の高漫面を横たへて白晝さへ假寝の枕をきしらせしきりに一攫萬金の夢に耽りし黒田健次が、何をか思ひけん一日の午後一時ごろ、むくと跳ね起

きて俄に家を飛び出しぬ、これぞ新に此家を構へてより八日目に始めて出づる無精者、お島が呼び止めて行途を問へども啞の如く聲の如し、

さりとして赤裸一貫の身を以て浮世に飛び出し、やうく女の袖の下に一時かり寝の雨露を凌いで、まだ本領の片足さへ踏み出さぬ黒田健次、ゆくとして何處の里に行かるべき、たゞ俄に思ひ立ちし胸の物しかと押へて上二番町へと急ぐ背後より、我を呼ぶ聲たれぞと見返れば佐原家の抱へ車夫、今しも主人を餘所に送り届けて歸り来る空車のまゝなり、

「どちらへ、しばらく御見受け申しませんが、何だか近傍へ家を御持ちなすつたそうで、へいへい大變うつくしい御新造様も、まづ御目出たう御座います」

「なアに家といふほどの家ぢやアない、たゞ膝ツ小僧を突ツ込むばかりの穴小屋だアね、また喚アといふ譯でもないが、獨身ぢやア萬事不自由だから、ちよいと下女がはりの女をね、ちツと遊びに来るが宜い、時に主人公は不在か」

「へい、先刻ある處へ御送り申して、今が歸りで御座います」

「ぢやア行ツても無効だね、全體どこへ送ツた、いづころ歸邸られるんだ、今日は是非とも逢ひたいが、さりとして例の賢夫人、いや奥方ぢやア少々むづかしくツて通じかねる用だからな」

「いづころ御歸邸になるか分りませんが、事によると夜分になりますぜ、きツと夜に入る處へ送りしましたから」

「ふん、きツと夜に入る處たア呵しいね、妙だね、いつも其處にさへ行きやア夜が更けるのかね」

「へい、お定まりなんで」

「はてな、そいぢやアあの目の早い北の方も御存じない場所だな」

「へい、まアそんなもんで」

「なるほど、いや大抵わかつたよ、金轡をかけられた車夫の貴公ひとりか御承知で飛耳長目の賢夫人は固より神も佛も知らない處、いや分ツた、畜生、髭髯でも剃ツちまへだ、若い年をして馬鹿々々しい、しかし何處だ、どこの穴だ、主従君臣の間柄さすが大きな聲ぢやア言へまいから、かすかに蟲のやうな息で洩らしてくれ、なに何だ首を切られても言へない、あゝ貴公も野暮だぜ、今時そんな忠義が流行るもんか、どうせ知れるこつたに、時に、僕が家を持ツた祝儀かたぐ一杯おごらうかね、遠慮は入らないさ、まア来るが宜い、まんざら米の洗ひ汁を飲まして澤庵の尻尾も喰はさないから、來給へ、いざ来るべしだ、必ず夜が更けると極ツた主人を奥方の知らない場所へ送り届けて、さう眞面目に歸る奴があるものか」

佐原男爵が前宵の夜更けて歸りし今朝の寢込を取ツて押へんと白晝さへ駢を立て、石佛に似たる無精者が、軒端の雀もろとも俄に夜具を跳ね飛ばして、戸を引き開け水を汲んで顔を洗ひ、さて馴れぬ新世帯に入まごゝしながら頻りに呷く風情を、やう／＼目覺めて枕を欸てしお鳥おもはず笑を漏らしつゝ、

「おや／＼、どうなすツたの今時分、貴方がさ、まだ夜が明けたばかりですよ、變だことね」

「何が變だ、用があるから早く起きたに、不思議はない筈だ」

「だツて貴方、事によると今日の御日様が、西から出ますもの」

「馬鹿ア言へ、男といふもなア萬事この通り、常に無精する代り、さアといやア夜も晝もなしだ、文士これを稱して獸王獅子の百日一聲に比すのさ、以後は心得て假にも乃公が朝寢や晝寢に點を打つまいぜ、尺蠖の屈するは伸びんがためだ、分ツたか」

「はい／＼、以後は心得て點をうちませんから、せめて貴方ドンの鳴る頃にやア起きて下さいよ」

「えゝ戲言ぢやアない、マツチは何處だ、朝の火種ぐらゐ前夜から埋めて置けば宜いに、折角かうして旦那様が早く起きて、煙草一ぶく吸ふことの出来ないなア奥方ちと不可ンぜ、ちよツ、仕方

がない、ぢやア此ま直に出るから、九時ごろ御歸館の節一本つけてくんよ、たのむぜ、いや頼まない、命令だ、きツと申し付けたぞ」

そのまゝフイと立出でて上二番町へ急ぎ、佐原男爵の表門やう／＼今あけし今日の先登第一に、黒田健次め伺ひました、されど必ず未だ御臥房中、しばらく控へ居りますと、玄關脇の書生部屋に腰おちつけて、朝手の忙しき人を捉へつゝ例の駄法螺を吹き立てながら、果は其處なる新聞雑誌を掻き集めて読みもせず、たゞ冷かに物の題目と事の大略すツと見渡して廣告欄を默讀の體あくまで傲然として小面憎し、

およそ二時間あまりを待たされて、健次やゝ不平の顔色、うるさしとて遁げ行く書生を呼び戻しつゝ、右の肩を揺りあげて頻りに熱を吹きぬ、

「おい君、煙草はないか、何、煙草は吸はないと、不可ンな、およそ世界の動物として煙を好むものは上等の部で乃ち人間ばかりだ、その證據には鰐魚介蟲いづれも悉く煙が大敵だらう、ね、これを思へば人間中にも、煙を吸ふものは殊に上等の部で、煙草嫌ひは些少あは／＼／＼下等だね、しかし議論は借置き、君の手許に無けりやア主人公の葉巻を二三本ちよいと、盗んで来てくれ、なアに構ふもんか、あとから僕が謝罪るからよ、ついでに茶を一杯ほしい、もう臺所に湯が沸い

から困るよ、しかし彼事を、どうして知ツたかね、小氣味の悪い男だ、物騒千萬」
「あはゝゝゝゝもしこれが封建時代なら、内事を知り抜く下司下郎、生けて置いては後日の妨げとか何とかの理窟で、すぐ御佩刀の錆になる役目で御座いますな、あはゝゝゝゝ」

其二

窓より射し入る旭に枕を焦されても、横に仆れし石佛、人手を假らさば起つことを知らぬ無精者の健次が、何事ぞ今朝は雀の聲に先だちて夜具を跳ね退け、寝枕面に煙草一服の遣もなく上二番町へと飛び行きしあとに、お島やうゝゝ起き出でて獨り心に呵しく、笑を含んで朝食の用意とどりの折しも、門の格子戸あけて入り来る登音、誰ぞと見れば例の下宿屋の伯父なりける、逆さまに吊して振ればとて鼻血の外に出る物もなき健次を華族の親族と履き違へて、あはれや遠目のきかぬ眼前の働きに、行末かゝるべき一人の姪を惜しげもなく供へてなほも萬事、肝煎顔に俠氣めかす、五十爺前額は禿けても心は若氣の身も軽く、
「お島、大變に早いな、新世帯の若夫婦、あはゝゝゝゝどうせ門口を二つ三つ叩かなけりやアなるまいと思ツて來たに、しかし的は」

いひつゝ親指を差出して其まゝの手を自己が首に横たへながら、
「まだこれだらう」
お島おもはずホ、と笑うて火鉢の灰を掻き均しつゝ、
「なんだね、朝ツばらから、いやな伯父さんだ、いくら若夫婦だツて新世帯だツて、二人とも根が違ツてるよ、憚りさまながら、かアと夜明の鴉に眼が覺めて、ちうと雀の啼く頃にやア隅から隅までお掃除が行届き、世間並の起きる時分には此通り誰方なと入らツしやいだ、鐵瓶の湯がシヤン／＼と沸ツてるよ」
「いやはや感心、ぢやア旦那も」
「無論さ、今朝、早アく用達に」
「何處へ」
「二番町の御親類へさ、もう往らツしてから一時間の餘にもなるよ」
「いよゝゝ恐れ入ツた、なるほど、違ツたもんだね、おれの家に下宿なすツてる頃は、朝の御飯を出した凡例なしさ、いつも晝と一緒の御寝坊様だツたが、さてかうなると、ふん感心だ、どうしても男は然うありたいね、用もないに朝の闇のうちから飛び起きて萬事キョト／＼する奴ア、

どうせ氣の小せエ音坊だし、差迫ツた用があるに夜具を引ツ被ツて、ベン／＼と枕に嘯りついでる奴に碌なのアない、兎角、男は右か左か何にせよ、さツぱりと行きたいや、ねエお島。

「まあさういへば、そんなものだね、しかし伯父さん、今日は何の用で朝から」

「なアに別段これといふ用もないが、さて心配だよ、旦那があの通りの一本氣性で、和女が其通りの勝氣だから、若い同士にやア往々ある事よ、情が善過ぎてね、は／＼／＼つまらない喧嘩でもしやアしないかと、それで一寸、様子を見に来たのさ」

「ほ／＼／＼その段は安心して下さい、妾だツて小兒ぢやアなし、またいくら勝氣だツて自分の良人と極めた人に會釋なしの五分五分で押さうたア思はないから、たまにやア時に腹の立つ事があツてもさ、そこは女だけに負ける事も知ツて居まさアね、第一が伯父さん、よく思ツて御覽なさい、たとひ何と言ツても騒いでも、たか／＼女を相手にする人ぢやアないのよ、朝から晩まで戲言ばかり、ちらかツてばかし居られるから、怒る事も出来ないやね」

「そこだ、そこが眞實の男よ、腹の底に料簡を固めてね、だから和女も萬事なるべく控目にしてがやがやいひなさんな、わけもなく女の差出で饒舌るなアうるさいもんだ、おれが鑑定は曇らぬ證據、きツと他日にやア大した人になる方だから、今のうち貞女をつくして、玉の輿おツちて

くれるなよ、たのむぜ、おれも子はなし、和女も親はなし、伯父ひとり姪ひとりの間だ、しツかりしてくんなよ」

「おい、今歸ツたよ」

黒田健次うまれてこゝに二十九年、始めて自己が家の門口より懐手のまゝ、おいと聲をかくれば、わんと吠えて向脛を噛み付く犬にも逢はず、はいと優しく應へて迎へ出る女房持、今歸ツたよと言へば、心得て帽子を受取り羽織を脱がしつゝ、火鉢の前の座蒲團を敷き直し、無言ながらも嬉しげに汲み出す茶碗を、此方も首肯しながら無言の手に取ツて一口ぐツと飲み乾す心持、おもへば紙細工の姉様人形さへ空手では買へぬ世の中に、およそ生きた女房ほど廉價ものはなし、

健次そのまゝ長火鉢の前の大胡坐、まづ鼻の穴より吹き上ぐる眞の煙、ばツと額越しに天井に消え行くに我ながら呵しく、ふ／＼と笑うて思はず座傍を見れば、今しも元の座に落ち付いて裁縫に餘念なきお島が怪しげに、八の字眉を寄せて針の手をとめてつゝ、

「おや氣味の悪い、妙に獨笑でさ、何か呵しい事でも御坐いましたの」

「なアに別段をかしい事もないがね、あたりまへに斯うして飲んだ眞の煙がさ、二本そろろうて眞

直に天上したところを見ると、今まで気が付かなかつたが、おれの鼻の穴ア随分めづらしい上向きだと思つて自分ながら呵しかつたのよ、よく雨が降り込まないこつた、ねエ、それ見ろ、まるで紡績の煙突に似てるだらう、しかし、うまく出るぢやアないか、それ、またもや、かくの通り、あはゝゝゝゝ

「ほゝゝゝゝ何ですよ、つまらない、およしなさいッてば、あれまた、ほんとに貴方ア仕様がないなエ戲事ばかり、もう幾年だと思つて在らッしやるの、瘦せても枯れても一軒の主人ですよ、ちと御謹慎みなさい、あんまり馬鹿々々しいワ」

「ほい、また叱られたか、しかし物といふもなア、つまらないところに深い味のあるものでね、そもそも乃公が眞を飲み始めて十年近くにもなるが、さて同じ穴から出る煙が、かうも立派に二本揃つて天上するたア気が附かなかつたよ、それ見ろ、また出た、今度は先より美事に出たらう、ね、どうだい」

「えゝもう知りませんよ、うるさい、いくらなと勝手になさい、鼻の穴の焦げるまで、第一、貴方ア人を馬鹿にして在らッしやるんだから、いふと猶更ら無効ですワ、意地の悪い」
「いや随分と他人を馬鹿にするが、和女を馬鹿にして宜いものか、おれが生涯連れ添ふ噂アどの

だ、最終にヤア死水を取つて貰ふ大事の婆さんだもの」

「あれ延喜の悪い、死水だなんて、今ツからそんな事を、時に今日は二番町へ何の御用で往らッたの、いつにない聞いうちから飛び起きてさ、ばた／＼と寝惚けた鴉のやうでしたよ」

「なアに、ちよいと俄に思ひついた事があつて、本尊の出ないうち寝込を押へに往つたのさ、またその用事は数日の後に必ず靈驗顯著、自然と判るこつた、まア黙つて見て入らッしやい、おれが小指一本を動かす時にヤア世間並の奴等が五尺の軀を宙に顛倒するほどの價値があるから元來の石佛が雀の聲に先だつて飛び起きた功能やんがて大したもんだぜ、しかし何事も二人の身の爲だア、外に何の用があるもンか」

「だツて貴方、ちツたア妾にも相談して下さいよ、女といふもなア入らない點まで氣をまはして、いろんな苦勞をしますから」

黒 「でもあらうがね、思ふ事の成就するまで口に出さないのは自分の性分だ、堪忍しろ、出して宜い事なら腸の臟腑でも搦ンで出さアね、時に和女、その着物は何だ、何にするんだ、え、するぶん意氣なもンだね」

健 「これですか、こりやア妾のね、下着でしたが、琉球の中でも猫足が宜く出来て居ますから、い

ツそ貴方の袴にでもしようかと思つてさ、全體が男の柄ですよ」
 「なに自己にか、自己は、おれは何にも入らない、袴なんかア猶更ら入らないよ、綿入から單物に飛べば宜いさ、それも面倒なら裏を引剝して綿を抜きやア済むに」
 「ほい、ほい、またそんな氣樂な事を言つて在らつしやるよ、いくら貴方が平氣でも妾が済みませんわ、そいぢやアまるで女の顔が潰れますもの」
 「やア何と宣ふ、この自己に見苦しい風俗をさせちやア、妻たる和女の顔が潰れる、そこで女房の顔を立て、着てくれか、貞女、ありがたい、貞節、うれしいぞ、あゝ持つべきものは妻なりけりだ」
 「ほい、ほい、ついでに飲むべきものは酒なりけりと仰しやい」

其三

浮世ぐるひの心に玉の臺も飽き果て、白く衰れに咲ける垣根の花を忘れかねつゝ、いぶせき宿に人知れず忍びしは源氏の君の昔、これは時めく一代華族の馬も車も無用とて、赤襟の綺麗首を忘れかねつゝ人目を忍んで通ふ髭むちや殿、例の佐原男爵が夫人の手前を我まゝ勝手の運動と唱

へて、ぶらりと邸宅を出でながら妾宅へ行かんとして、おもはず心に浮びしは黒田健次の事、乃公が斯うして通ふ娯樂の穴を知るものは、多年忠勤の車夫一人と思ひの外、あの黒田の奴め、どこを何うして知り居つたか、過日ふいと来て、家を持つた祝儀を呉れというた時、何だか奥齒に絹を着せて妙に切り込んで來居つた顔色、さて困つたわい、勿論、先祖の餘徳でもなく金氣一色の至盛でもなく、我この腕一本で取つた今の身分に、五十ちかい半婆の妻は妻として、別に妾の一人や二人を過分の僭上とも思はないが、もし世間へ知れると忽ち新聞種だ、第一が萬事に喧しい妻の手前が面倒で、すべての結果おもしろくないから、二年以來かくし終せた今更、それも餘人なら事も易いが、あの厚顔しい健次の奴に知られたのは南無三寶だ、彼奴なかゝ、此まゝの無事で通し居るまい、前後左右きつと乃公を征伐の虎の巻として、絶えず何か強請るに相違ないが、もしそれを聞き入れない、曉は忽ち妻の軍師となつて、一家これより動搖の基を發くべき奴あゝ困つた、いッそ今のうちに彼奴を引き連れて妾宅へ入り込ませ動きも取れない義理をかけておかうか、いや待て、みだりに妾宅へ出入さしては、また其間に如何なる間違ひが出来るかも知れない、これは閉口した、實に物騒千萬だ、しかし後れて敵に制せられんよりは、むしろ今日これより黒田の家を訪うて、臨機應變、機よくば例のお高とやらいふ女に鏡を打つてくれう、い

くら横着な奴でも自分の女房に極印うたれちやア困るだらう、それく、
さすがの男爵殿も戀には憂身を憂す常慣、わざく道を曲げて半白の鬚髯を捻りながら、聞きお
よぶ元園町の『大江しま』といふ表札を目的に、黒田健次が借家の格子戸をステツキもて引き開
けつゝ、

「おい在宅か、おい黒田は居るか」

いはゞ浮世を忍ぶ假の宿、しかも女名前の格子戸を荒らかに引き開けて、黒田々々と横柄に呼び
捨つる奴、いづれ尋常の鼠ちやアあんめエと健次が目配せに、お鳥たち出でて入口の障子を開け
ば、仁王立のまゝに會釋もなき男爵殿

「黒田は居るか、居るなら上二番町から来たと言へ、佐原が来たと言へ」

かねてより聞く面影に、お鳥はツと驚いて飛ぶが如くに駈け入りぬ、

無精者の健次、なほ身を横たへしまゝ鼠の正體、いかなる奴が我宿を嚙りに来たかと思へば、お
鳥あわてゝ揺り起しつゝ、

「ちよいと貴方、貴方ツてば、ちよいとさ、起きて下さいよ」

俄に下手な船頭が櫓を漕ぐ如く揺り起されて、がくりと枕を外せし健次おもはず兩眼を見開きな

がら、心は猶も半睡の體なり、

「えゝうるさい、しづかにしないか、なゝ何だ」

「何だちやアありません、入らツしやいましたよ、二番町から、あれまた、仕様かないわねエ折
角あいた目をさ、上二番町から入らツしやツたんですよウ」

聲を潜めながらも力を込めて耳朶に吹ツ込めば、

「なんだ、二番町から来た、誰が、どんな奴が来たんだ」

「ドンなツて貴方、これですよ、これなんですよ」

いひつゝ片手に背後を指さして片手に頰を掻き卸すが如く、鬚髯々々と教ふれば、さすがの健次
むくと起き直ツて四邊を見廻せしが、やがて寢枕面を袖に押し拭うて靜に首肯き、わざと容を改
めながら臆慇に迎へ出でしを、佐原男爵なほ庭口に立ツたるまゝ、

「何をして居ツた、大變に待ツたぞ」

「はい、恐れ入りますが、あまり取散らして見苦しう御坐いますから、ちよいと片付けましたの
で」

「虚偽を言へ、晝寝をして居ツたらう、よく聞えて居たぞ、あはゝゝゝ」

そのまゝサツと通りて何心なく火鉢の前に立たせもやらす、かゝる事には馴れたるお島、其處なる座蒲團を取ツて押し直しつゝ、臺所へ駆け込めば、あとに健次たゞ一人、我家ながらも身を縮めて頭を下げながら、心は更に縮まらぬ横着物、いよ／＼しめたぞ、髭め、全體こゝを何處と心得て來居ツた、

男爵は懐手のまゝの片手やう／＼差出して、マニラの葉巻ばツと燻らせながら四邊を見廻し、

「むゝなるほど、随分せまいが、割合に小綺麗だな」

「はい、申さば五色で彩ツた家で御坐いますから」

「また妙な事をいふ、何が五色だ馬鹿な、貴様は少し褒めると直に増長して不可ンよ」

「でも閣下、家が新建で白ツぽいところへ此方が火急世帯の青夫婦と來て、面の色の黒い代りにやア心の赤い奴で、あはれなるかな爾來朝夕の貧乏たゞ黄色い息を吹いて居りますから、あはゝはゝゝしかし今日は、お伴もなく、輕々しう那邊へ」

「はゝゝゝゝゝいくら窮しても、それくらゐの法螺が鳴りやア宜いわ、實に氣樂な奴だ、なに今日か、今日は、ちよいと散歩かた／＼貴様の家へ來たのさ」

「冥加至極これは恐れ入りましたな、ちやア是非に及ばず、憚りながら御覽に入れませうか、日

夜拙者の左右に侍る女を、かつて奥様には御意を得させましたが」

「むゝ呼べ」

健次さらに膝を曲げて振り返りながら、臺所に向ひつゝ一入の大聲を張り上げぬ、

「おい、ちよいと來て御挨拶を申しな、しかし其前に御酒の用意をしるよ、お茶は入らない、どうせ番茶だから却ツて失禮、ひらに御免を蒙ツて、酒だ／＼酒は第一等の上酒だよ、いくら高値クツても宜いから、そして肴は近所の料理屋で思ふさま澤山に取れ、これも第一等の上物ばかりこて／＼と御馳走を言ひ付けろ、代價は構はないから、なるべく走り物を揃へてね」

「おい待て黒田、おい／＼、妙に馳走を言ひ付けるが、何も喰ひたくないから止せ、どうも貴様の言ひ付けやうが、あはゝゝゝゝいかにも變だな、はゝゝゝゝいつも相變らず酷い奴だ、あはゝゝゝゝ」

「ちやア萬事御免を願ツて、お島和女だけ御馳走に出ろ、今日は御満腹だと仰しやるから、他日にしよう」

また例の會釋もなき大口とは思へども、あまりの無遠慮に呼び立てられしお島、おもはず顔を赧めて胸を冷せしが、此まゝに済むべき便宜もなしと、やう／＼臺所より迂り出でしを、男爵つら

つら見れば二十歳といへど、小作りの色白しかも當世の丸ぼちや、年齒よりは若く、十八九ばかりの外見ながらも才氣おのづから總身に満ちて、よろづの振舞に初心めいたる角もなく、翠みかかる毛際の富士額、すつと伸びたる首筋の三本脚、晴れ渡る太眉毛、いき／＼と張り詰めし眼千両、雲の鬢づらより僅に漏るゝ耳朶の薄紅、羽二重地の頬邊に永字八法の點に等しき笑窪、愛敬あつて世辭に疎からず、優し味あつて言葉に崩れず、中音の早口なれど無用の辯に騒がで、物事はき／＼と隅の隅まで行届く風情に、流石の男爵おもはず感じて、さても奇怪や、嗚呼この女いづこの野原に捨つるとも玉の輿もて迎へられんを、ふしぎや勿體なや醜男の健次、しかも布子一點寒晒しの横着物に如何なる美味ありけん、しみ／＼夫婦の顔を見詰めて腕を組みつゝ頻りに小首を傾けぬ、

されど健次は例の野面づら／＼しく鼻の穴を擴げて、睨むが如く叱るが如き額の稻妻、邪慳に頤もお島を追ひ使へば、お島また一と聞くや否や三四五六の邊まで骨身を碎いて立働く風情に男爵いよいよ呆れて心に驚きぬ、黒田の奴なかく／＼の男だ、しかし女は猶更に見上げたもの、これを思へば先祖傳來の家庫を潰して戀を漁る世上の徒輩よろしく恥ぢて死すべしだわい、人知れぬ自己が弱味を見抜かれたる上は、彼奴等夫婦の缺けたる所を見出して言はず語らぬ差引

勘定、うるさき後の面倒を拂はんと思ひしが、案の外なる様に男爵殿ぐつと咽喉を詰らせつゝ、長居は却つて無用、また黒田め如何なる隙間より何を言ひ出さんも計られずと、十圓紙幣二枚を紙に捻つてお島に投げ遣り、

「土産を持つて来ないから、これで何か買へ、そして時々邸宅へ遊びに来るが宜い」
健次忽ち傍らより平然たる面を差出して、

「え、拙者への御土産は」
「貴様に土産が入るものか、いつも来て強請るぢやアないか、厚顔しい奴だ」

「いや、これは近ごろ汗顔の至極」
「何が汗顔の至極だ、あは／＼／＼／＼しかし歸らう」

そのまゝ起つてお島が差上ぐる帽子を手に取れば、健次なほも座を動かさず額越に見上げて、
「では、いよ／＼御歸館、しかし今日は今處への御歸館で御坐います、いづれにせよ拙者お伴いたしませうか、御身分柄あまり輕々しう見受けまますから」
いひつゝ自己が頬邊を自己が指もて捻りあぐれば、男爵おもはず苦笑ひして振り返りながら、

次 健 田 黒
「貴様アまた妙な事をするな」

「はい、我ながら、ちと言ひ過ぎましたかと存じて、あはゝゝゝ」

ちよいと散歩かたゝ、貴様の借家へ立寄りしのみといへど、さして用なき我家へ不意の訪れ、しかも時刻は午後四時すぎの夕暮ちかく、衣類は平生のまゝの着流しにステツキを携へて、馬も車もなき髭むちや殿の動作、さては必定期の穴へ通ふ途中なるべしと、早くも見て取りし黒田健次いかでか無事に通すべき、かつては恩顧の車夫を酒に漬して啼く音に迫りし甲斐もなう、たゞ妾宅とばかり、その妾宅いづこにありとまで聞き得ざりし無念の折柄、幸ひの一興、そつと門口へ送り届けて火急に脚下より名乗をあげ、動きも取れぬ髭の弱味に切り込みくれんと、佐原男爵が立出づるや否、あわてゝ羽織を引ツ掛けつゝ飛び出さんとするに、お島おもはず眉を擧めて何事と問へば、健次ひやゝかに笑うていふ、これさ女房ども、あれ、あれを聞きや、戸外に黄金が叩ツて顛りゆく音、それを追ツ掛けて一寸其處まで、我家の格子戸しづかに引き開けて首のみ差出しつゝ見渡せば、神ならぬ身の髭殿が笑を含んで歩みゆく後影、果して二番町の邸宅とは正反對の方角に向うて辻を曲りぬ、しめたぞ、しかも幸ひの黄昏時、ものゝ一町と隔つれば瞥へ見返るとも眼の届くべき筈なしと、健次そのまゝ足跡を踏けて巧みに遅速を量りつゝ、同じく辻を

曲ツて透し見れば、髭殿しきりに四方を漁ツて辻俵を備ふ風情、南無三寶、瘦せたりといへども敵は騎馬、いかに強くとも我は徒走立、こは叶はじと思ふ折しも背後より一臺の空車、健次忽ち見返ツて忽ち聲を潜めつゝ、

「おい車夫、一町一錢の割で、あの、あの人車の行く處まで追ツ掛ける、併し半町ぐらゐづゝ間をあけてよ、ナニなんだ一町二錢の割で下さい、馬鹿、見損ツたか御用だぞ、いけツ、それとも否なら鑑札を見せろ、手前の名は何といふ」

健次の横着もの、忽ち刑事巡査の臭味を假ツて車夫を叱りつけ、そのまゝ飛び乗ツて見渡せば、髭殿の車も今や曳き出す體、

「それ氣をつけて往け、見失ふな、二三十間づつ加減しろ」

見るさへ岩疊づくりの彼の髭めが、人知れず海鼠となつて骨を抜かるゝ處いづこと思へば、牛込の神樂坂を上ツて三四町、また左へ入ツて大久保に近き生垣の小門に人車は止りぬ、

健次は二十間ほど此方より飛び下りて車上いちゝ數へ取りし銅貨白銅とりませて抛げ出すや否身を縮め足を早めて窺ひ寄り、今しも髭殿が門を入らんとする背後より、

「はゝア此家だな」

唐突に一入の聲をあげて叫べば、流星の髭殿はツと驚いて振り返りつゝ、

「だ誰だ」

「はい拙者で、黒田で御坐いますか」

「やア貴様、いやはや、どうも貴様ア全體」

夕餐の用意すでに整うて夜に入れども、髭殿め跡を追うて俄に飛び出せしまゝ主人の健次はまだ歸らねば、空巢守のお島たゞ一人さすが良人に先だちて箸とるも食味なしと、沸き返る鐵瓶の湯に幾度か水を注しかへ、火鉢の灰も掻き飽きて、果はランプを引き寄せつゝ其日の新聞を手に取りながら、朝のうちに読みし雜報の見落しやあると、待つ身の辛さに我を忘れて舌うち鳴らす折しも、門の格子戸がらりと開いて、おい今歸つたよの聲は其夜の九時過ぎなりける、

「ふん和女まだ夕飯を喰はないな、構はず先へ搔ッ込めは宜いに、しかし良人と一緒でなけりやア甘くないといふのか、あはゝゝゝさもさうづ、さもありなん、いや左様なうては叶はぬところだ、可愛さうに、腹が空いたらう」

「まさか、さうでもありませんが、ちよいと其處までと仰しやるから、今か今かと思つてさ、全

體どこへ往らしつたの、さんさ妾を待たした酬いは顔面、今夜ア御酒を止して直ぐ御飯になさい、さア〜、ついもう十時ですよ」

「そりやアさうでもあらうが、すぐに飯たア少々うれしくないねエ、どうか特別の御諭議で」

「いけません、どうしても今夜ア無効ですから、それとも御飯が否なら猶更ら結構ですワ、萬事世話がなくなつて」

「はてさて、こいつは困つたな、ぢやアせめて銚子一本ぎり」

「なりません、いつも貴方ア一本と言つて一本で済まないから」

「済む、済ますよ、今夜に限つて一本ぎり、もしそれも叶はずば猪口に一杯、乃至また舌の先へ一筆たらししてくれ、よ、香ひだけでも嗅がしてくれたアなさけないが、乃公の病だ、あゝ飲みたい、舐りたい、この通り手を合はすが不憫と思召さぬか、かりにも良人に拜まして妻たるもの豈それ安閑と尻目遣ひに不知顔せらるべけんやだ、ねエ、男冥利につきるぜ」

黒田健次

「おほゝゝゝいかなこつても、ぢやア眞實に一本ぎりですよ、きつとですよ、飲むも宜いが、ペンペンと夜の更けるに困りますから、第一に身の毒ですよ、物の加減をしないと」

いひつゝ火鉢の蔭に秘せし徳利を差出せば、健次おもはず兩眼くわツと見開いて自己が額を叩き

つゝ、

「やアありがたい、が、酷いなア、そこに忍ばせて置きながら、しかし伏兵は唯の一騎か、外に家來も何にもなしか、あはれ陣屋の様子は如何に」

小手を翳し首を伸ばして頻りに臺所の方を覗き込めば、お島その袖しかと捉へて笑ひながら、

「陣屋にやア一滴もありませン、よく積ツて御覽なさい、前夜の一升が其場で忽ち六七合、けさの寝起に冷で大コツブの三四杯、それ、あとに幾何ありますね、ほんの一合たらず一本、これツきり」

「なるほど、自然に湧き出すもンちやアなし、いち／＼思ひ出すと勘定が合ふやうだ、あゝこの一本で今夜のお名残か、あゝこの酒が涙か涙が酒か、びしゆン」

「おや、びしゆンたア何のこツてす」

「乃公の泣く音だ、随分あはれに物凄からう」

佐原男爵が、飄然として馬も車もなき不意の訪れ、さては必定かの穴への途中と、立出づるや否や直ちに後を追うて牛込の妾宅を見届けつゝ、夜に入りて歸りしかど一言さらに其事ともいは

ず、加之も溢るゝ如き心の謀策も深く包んで、外面は例の馬鹿げたる黒田健次、おのが妻を捉へて腹さん／＼阿呆口を叩きながら、やう／＼一本の残んの酒に凡そ二時間も舌うち鳴らし、酔はねど饒舌り草臥れて枕につきし後は元來の石佛、意より射し入る今朝の旭に半面を焦されても、なほ射の聲のみぞ高かりける、

「おや、起きなくツても眼だけは覺めて在らツしやると思ツたに、仕様がないなエ、よくこんなに寝られたもンだ、ちよいと貴方や、もう十時を過ぎましたよ、今に午砲が鳴りますよ、さア起きて下さいよウ、貴方、さあツてば、いくら何でもあんまりですよ、家の規矩がつきませんからしお島も今は呆れて引き起さんともせず、枕頭に坐して寝顔しみ／＼見詰むれば、健次やう／＼臍の半眼を開いて、

「やかましいなア、十時を過ぎたツて晝の午砲が鳴ツたツて宜いちやアないか、自己が起きて何の用がある、いつも言ふ通り、用さへありやア夜中でも飛び起きて人一倍に働く男だから、そんなに厳しう扱ツてくれるない」

「いゝえさ、たとひ用がなくツても、人間の起きる時分に起きないと、ものゝ冥利につきますよ」
「なるほど、さう言へば左様かも知れンが、しかし自己はね、世間の有象無象と違ツて、射をか

きながら物を考へてるよ、む、眞實だ、和女の目ぢやア始末に終へねエ寝坊助と思ふだらうが、何ぞ知らん、かうして樂々、寝てる間に却つて心が八方を駈け廻りさ、まるで稲妻のやうだぜ」
「虚偽をお言ひなさい、駈をかきながら物を考へる人が、何處の世界にあるもんですか、さア戯事を仰しやらずに起きて下さい、ちツたア眞面目にさ」

「ぢやア起きよう、さらば起きるべい、とかく俗物は物質的の頭腦で、身體が眞直に立ツてさへ居りやア、それで慥だと思ふから困るよ、軍將醉臥して未だ全く醒めずといふ消息を辨へんからね、あゝ英雄たま〜細君の叱咤を受けるかい、なさないこつた、しかし大象が蟻蟻に蝕されて思はず身を動かすの比喩もある、仕方がない、うき世なりけり自由ならねばこそだ」

「えゝもう、じれツたい、貴方ア何事でも文句が多くて困りますよ、過日も一寸水を汲んで下さいと言やア、井戸端で手桶を提げながら、凡そ三十分も呻ツて在らしツたよ、
「なんだ呻ツて居た、呻るたア酷いな」

「だツて呻ツて在らしツたに相違ないワ、妙な聲で譯の分らない事を、まるで厭が揚ツたやうでしたよ、ぶらん〜ツツて」

其 四

人の家に奥深く入り込んで加之も世間を廣く渡るものは、醫者と女髮結の世辭愛敬これには油断すべからずと、敬して遠ざけられ愛して隔てられしは昔のこと、今の醫は品位學術ともに進んで人間名譽の職なれども、こゝに變らぬ追従輕薄は女髮結の常、さてこそ挿植に目鼻を添へ杓子に耳を附けての噂べちや〜、ものゝ間違ひは多くこれよりぞ産み出しける、

「御新造様へ、貴方おもひきツて今日こそ丸髷に遊ばせな、いくら何でも、あんまり御未練らしう見えますよ、手柄さへ赤けりやア十七八の嬢様にもお似合ひなさいますもの」

いひつゝ背後より梳櫛をかけ始めしは五十近き髮結婆、お島は鏡臺に向ひながら思はず片頬の笑を漏らして、

「ほゝゝゝ、嫌なこと、妾のやうな女に何の未練があるもんですか、くり〜坊主にでもなれといやアなる氣ですよ、しかし其處に少々事情があつてね、そして第一、これまで結び馴れたのを俄に、何だか改ツたやうで面倒だから」

「だツて貴方、御自分でなさるぢやアなし、こんな結構な御髪を惜しいぢや御座いませんか、い

つまでも同じ結髪ばかりで、どうか一日も早く丸髻に致したう御坐いますワ、長はあるし艶はよし其上、癖がなくツてさ、どんなに善く出来ませう、そこに少し事情があるとは旦那様でせう、たとひ旦那様が丸髻嫌ひで、勿體ない折角の若さが年増に見えるから止せと仰しやるにせよ、結ツた以上は妾が受合、きつと御喜びなさいますよ、咲いた花も宜かつたが、儲また青葉の芽出しも悪くないものだ、それなら今まで早く左様すれば宜いなんて、よく殿方にあるこつてすから髪でも御着類でも此方から見立て、遊ばさないと御損ですよ、第一、御新造様の御容色ぢやア一入ですよ、もし萬一それでも旦那様が御叱り遊ばしたら妾が出て御謝罪をいたしませう」

「なにね、良人なア萬事が抛遣りで、そんな事は少しも言ひませんが」

「ぢやア猶更で御坐いますワ、是非とも今日は、私も其用意で結髪を持ツてまゐりましたから」

「おや、どうも御深切にねユ」

「なに貴方、こんな結構な御髪で結はして載けば下手ながらも上手に見えて、妾どもの手柄になりませんが、また世間にやア随分むづかしい御注文も御坐いますよ、白髪七分の赤毛三分で黒いのが空になつた玉蜀黍のやうな頭髪を、こてくと染めた上に養毛を入れてさ、さうして左の鬢が出なかつたとか右が引ツ張り過ぎるとか、鬢が曲ツたとか、いやもう實に困りきつて、怒にも

徳にも堪忍の出来ない事がねエ、貴方、稼業なりやこそ」

「おほ、う、う、まさか、そんな妖怪のやうな」

「い、え、御坐いますとも、しかも立派な御身分で、華族様の奥方に」

「さうですかねエ、全體どこの」

「どこツて、大きな聲では申されませんが、上二番町の佐原様と仰しやる方で」

「おや、さう、久しい御得意なの」

「へエ、もう五六年もまゐりますから、あの奥様についてちやア、随分おもしろい事も存じて居りますよ」

お鳥が枕頭に坐を構へて動かねば、さすがの寝坊助も堪へ兼ねて録首おツたてつゝ、顔を皺めて文句たら／＼欠伸まじりに猫の如く背を丸め、えんやらやアの掛聲やう／＼起き出でんとする折しも、うれしや人の訪ひ來し氣配に、お鳥、あわてゝ立出でしかば、また其まゝに枕を引き寄せながら耳を傾けて聞けば女髪結の聲、ありがたい、しめたぞ、さては一時間たしかに我物と再び夜着に嚙りつき、いつしか二度目の鼾聲、雷の如し、

「おや、まア貴方、道理で變に靜肅だと思ツたら案の定、髮結さんの來たのを宜い事にしてさ、ほんとは呆れましたよ、さア此上いくらなと御寝みなさい、もう〜決して起しませんから、その代り御承知でせうね、御酒は猶更ら三度の御飯も上げませんよ」
「やアこれは恐縮、なにさ、別に寝る心算もなかつたが、折角おきかゝつた所へ髮結の女が來やアがツて、和女の姿が枕頭になくなつたなと思ふうち、つい我を忘れて嗚呼すまないね、とるところとやツたのよ、起きる、今度こそ起きる、しかし何時だらう」
「何時だつて貴方よくまアづら〜しく眞面目に時間なぞを問はれますねエ、午砲が鳴りましたよ」

「さうかい、そいつアちと寝過ぎたね、おや、おや〜、今日は丸髷に遊ばしたな、いよ〜奥様御新造様、ちよいと其方に向けて見な、よウ〜そツくり、似合ひましたぜ齋生め、あの婆アなか〜上手だの、しかしいくら上手でも本尊が悪けりやア無効だが、肝心の和女が珠玉と來てゐるから錦上の花だ、島田蝶々束髪いづれも宜いが、丸髷といふ奴また格別だな、おつなもんだね、何だか急に世話女房めいて浮世馴れたやうで、そして物の定度がついて、しかも初年増の今が膏の乗ツた最中、あゝ文句はねエだ、大極上々、つや〜と眞黒の一番形に青みかゝつた襟脚

立樹ばかりの掃庭もて廻らせる書齋の丸窓に、背を凭せて片腕をかけながら、左手を膝上に悠然として物語るは主人の男爵、これに對うて聳ゆる兩肩の山を低め、蟠る大の臂を縮め、首のみ差

其五

が引ツ立ツて一入の妙だ、また新に亭主野郎の氣が變ツて、こいつア今晚うんと飲めるわい」
「いやですよ、自分の寢坊を誤魔化さうと思ツてさ、急に取ツて附けた空世辭ばかりを、しかし貴方、まんざら、うつらない事も、ないでせうね」
「うつるの、うつらないたア餘所の女のことつたよ、おぬしにやア箆を被せても南瓜を乗せても大丈夫、天成の美人だアな」
「えゝまた戯談を、時に貴方、今日は妙な事を聞きましたよ髮結さんに」
「何だ、何が妙なこつた」
「何をツて、二番町の事を」
「佐原の事か、髭の事か」
「いゝえ、奥様のこと」

出でて神前の狛犬に似たるは例の黒田健次、また今日も何をか儲舌り立てんとて訪ひ來し野心の面構、何時みても三分の愛敬と六分の憎味を含んで、残る一分は雨とも風ともならぬ怪しの空模様、唯ぼつとして馬鹿げたるところに稻妻の如き自己が才氣を包みける、

「おい黒田、今日は貴様なんの用で來た、いつものやうに長ツ尻は困るぜ、さツさと早く要領だけを掻い撮ンでね、無駄口は止しにしろ、乃公も忙しいから」

笑ひながら眞向より初太刀一本まゐられて、さすがの健次も不意に驚くかと思ひの外、此奴いよ平然として額越の目色を變へず、

「花に開落あつて始めて見るべく、人しばし語れば竟に妙ならずか、なるほど、古人うまい言を申しましたなあ、はゝゝゝさう承ツては野面の健次めも聊か閉口の體、ちやア今日は此まま御免を蒙ツて引き退りませう、しかし奥様の方へ御機嫌うかゞひ旁、世間談話の長坐いたしても宜しう御坐いますせうな」

どうやら例の妾宅を匂はせて逆さまに切り込めば、髭殿おもはず諸蛇の難に遭うたる心地して、マニラの煙はツと吹きながら、

「では貴様、けふ來たのは別に何の用もないんだな」

「いや、ないことも御坐いませんが、さりとして、また折角の御繁忙を御妨げ申すほどの儀でも御坐いません、とかく拙者のやうな厄介物は、野生みだりに時も處も構はぬ無遠慮で、ひよこく伺ひますから御用の節は只今の如く、頭上から御叱り下さいませんと、づうくしく何處まで御意に反くかも知れない男で、我ながら常に持て餘すほどの次第、ちやアいづれ近日また御手際の節を伺ツて、今日は此まゝ、ちよいと奥様の方へ」

「これ待て、まて黒田、どうも貴様ア妙に拗ねた奴だな、奥様々々ツて、何か彼に言ふ事でもあるか」

「いや別に、たゞ一寸、御機嫌を」

「はゝゝゝ實に困ツた奴だ、それでは三十分だけ許してやるから、貴様の用事を言へ」

「はい、ありがたう御坐いますが、三十分では少々、全くは二三時間もかゝりませうかと存じます、申さば拙身が一身の利害得失また生涯の窮達消長にも關する儀で」

「はて借、うるさいなア、そいぢやアかうしろ、委細を手紙に認めて今日中に乃公の手許まで出しておけ、あすの朝キツと返事をしてやるから、また奥へ行くも宜いが、あまり餘計な事を儲舌るな、第一が貴様の爲にならないぞ」

「はい、まア随分と口を慎みますから、それでは何卒さしあげまする手紙の御返事を宜しう、偏に願ひます」

今日こそは二三時間うんと腰骨おし据ゑて、胸にたくはへし平生の一物を敵の眞向額に浴せかけ通しもやらす儘舌り立てんと思ひの外、長座無用の初太刀一本まゐられて流石の健次や、挽みしが、元來したゝかの横着物、また忽ち牛込の藪蛇を撮みあげて髭殿いかゞで御坐る、お差支なくば早耳の奥様に御意を得て、口まめの此舌より浮世談話を仕掛けんと、見事に切り込みし鈍の手ごたへ竟に空しからず、さらば汝が訪ひ來し仔細を手紙に認めて出すべしとの言葉に健次やうやう額を撫でて引き退りぬ、

わが希望に聊かの無理ありとも、わが筆に意の足らぬところありとも、今日の様子まづ髭殿に否は言はせじ、いさやこれより姿を試みて、風ひかぬ唇端おもふがまゝに押し擴げ、まさかの時の助太刀、やり損ねたる二の足の踏みどころ、きのふ髪結女がお島に語りし事の實否も探らんと、夫人が部屋の方より襖しづかに押し明けて、おのが心を欺く慇懃の頭を下げながら、

「黒田で御坐います、御機嫌伺ひ、旁とは恐れながら、いひつゝ頭越に稻妻の目を放てばをりしも、夫人は手文庫の中より人知れぬ數多の紙幣を取り出

して、餘念もなく頻りに數ふる體、ハツと驚いて文庫の蓋もろとも振り返りながら、

「おや、よく來たのねさア、此方へお這入り、御新造は御達者かエ」

「え、何處の」

「ほゝゝゝまた惚けてさ、黒田夫人のこと」

「あゝ妻のこと、あいつの事で御坐いますか、勿體ない御新造なして、はい、阿魔は近來ますゝ元氣づきまして、元氣の果が増長いたしましたして、をりゝ拙者に小言などを申しますが、けしからん女で、實に生意氣なもんで、夫婦にならない前は、あんなでも御坐いませんでしたが、今に於て始めて女郎の、これは失禮、婦人の、否、なに彼奴に限つて小人と一般、いかにも度し難く養ひ難しとの諺を感じましたな」

「可哀さうに阿魔だの女郎だのと、しかし女といふものは總體に喧しいもので、それも家のため良人の爲を思ふからだよ、その證據には、餘所の人に對つては平生も娘のやうに優しいもの」

「なるほど、さう仰しやれば先づ左様かとも考へられますが、さて随分癩に觸る事を申しまして

健 ね、ははゝゝゝ時に奥様、もう春も過ぎ去つて、大分、夏氣になりましたが、お忍びで藤か牡丹

次 の御見物は、如何で御坐います、手前どもの妻に御伴いたさせますから」

「さうねエ、一度どツかへ、何處が宜からう」

「まづ差當ツて藤で御坐いませうな、龜井戸の御歸途が橋本で御夕飯、また氣が變ツて御保養の
一事になるかと考へます」

「では、明日でも往かうかね」

「はい、しかし、たまさかの御出ましに花の後先があツちやアいけませんから、とにかく妻を下
檢分に遣はしました上、ちやうど宜い日取を申し上げますから」

今日は二三時間の喋々をきく耳うるさし、仔細を手紙に認めて差出せよといひしは、平生お健舌
の黒田健次そも筆に如何なる辨やある、別に思ふ事あツて、それを試みんためと知るや知らず
や果して、其日の夕暮に男爵が手許に届きし一封、さてはと披き見れば、行草の間を何の苦もな
く走り書いて、筆にも彼奴が横着の氣始ありと面白く、文は固より格を脱して巧みならね
ど、意は會釋なく墨を跳ね飛ばして渡らぬ限もなし、

拜白、仰せに従ひ、不文ながら茲に今朝拜趨の要を申し上げ候うちに、もし萬々一さして物

の道理にも外れまじとの思召御坐候はゞ、憚りながら猶この上の御高恩仰ぎたく、偏に伏し
て奉 懇 願 候、さて健次こと元來の魯鈍、いたづらに多年の徒勞を重ねて益々頭迷の奴と相
成、轆轤落艘このまゝ涙を呑んで、郷里の草叢に落ち果つべきところ、やうく御裾に縋りて
踏み止り候以來、いまだ茲に半歳も立たざる今日すでに昨日を忘れて、たま〜世に妻めい
たる女などを相携へ候こと、いかにも俗貝に流れて我ながら心に恥づかしく候へども、これ
がために近來御恩の端を穢し候儀は勿論、この後健次の進退についても聊かの支障これなき
やうかねて萬事の用意は致し置き候間、結句獨身の頃より衣食に差支なきところ呵しき奴と
御覽下されたく、さりとてまた飯の外に女を食ふ色情の鬼にもあらざる邊は、いづれこゝ兩三
年のうちに御一笑の價値あるべきかと我みづから確信いたし居り候

黒 田 健 次
これだけの文には何の仔細もなく、いはゞ唯これだけの挨拶に止れども、此文の奥に別封の一書
を包み込みて、糊づけ固き其表書に「數願書」の三字、しかも無遠慮者の彼奴にも似ず、筆まで
改めし謹慎の楷書、そも〜何をか言ふ、さては如何なる事ぞと男爵おもはず眉を擧めて靜に封
おしきれば、細字もて書き連ねたる美濃紙たしかに三四枚ありけり、

人一倍お徳舌の黒田が二三時間の長座に代へて、差出せし手紙の奥に別封の歎願書とは、そもそもいかなる事をや認めけん、男爵しづかに読み終つて眉を擧めながら、新に吸いきりしマニラの葉巻一本の盡くるまで、たゞ黙然として思案に迷ふ體なりしが、そのまゝ起つて自ら夫人の部屋に行きつゝ、問はず語りに坐を占めて語り出しぬ、

「今朝ね、黒田が歸りがけ和女にも挨拶しに來たらうな」

「はい、まゐりましたよ」

「何か面白い事でも談して行つたかい」

「別に何も談しません、いつもあの通りの男ですから、とぼけて妙な事ばかり」

「むゝ、どんな事を」

「なに良人つまらない事で御座いますよ、さん／＼自分の妻子を貶して阿魔だのいや女郎だのと悪口しながら、やはり口ばかりで心は左様でもないと見えましてね、ほゝゝゝ、妾に藤か牡丹の花見を勧めました時、是非どうか供をさせてやつて下さい、なぞと頻りに頼んでまゐりましたよ、いつにない低頭も丁寧で、呵しいちやア御座いませんか」

「はゝゝゝさうかい、彼奴のやうな無頓着でも女房は別と見えるな、腹の立つ時よく踏み殺さな

いこつた、しかし談話は其事だけか」

「はい、妾には其事だけで御座いましたが、別に何か、良人にでも」

「むゝ少し面倒な事を言つて來たよ手紙で、つい先刻に」

しばし言葉を絶ちつゝ、鬚髯を掻き撫でてランプの火を見詰めしが、やがてまた心づいて、此方を振り向きながら、

「どうだらうな、石橋を叩いて渡る唯の馬鹿正直な奴よりやア少しは骨肉のある奴と思つて、まア絶えず世話もしてやる心算だがね、實際うまく遣り居るか知らん、せめて見込の半分ぐらゐは仕送げるだらうかね、和女の目では何と思ふ、彼奴の前途を無論乃公が、常にいふ通り、横着でも横着の中に何處か妙な可愛氣があつて、また無遠慮の頓着なしにも見えるが、なか／＼事々物物について細心工夫の奴だから、まさか鉛でもあるまいと思ふがね」

問はれて思はず男爵の顔を見詰めながら、しきりに小首を傾けて當惑の體、

「さやうで御座いますねエ、いつ來ても馬鹿口ばかり申しますから、私なぞは唯あの通りの面白い男と思ひます外、別に委しう、しかし口の軽い割には案外に心の重々しい、性根の据つた、

脱目ない才子かと存じますよ」

「む、さうだ、それに相違ない、全くだ、鶴舌らせて置けば半日でも鶴舌りつゞけて、のべつに詰らない馬鹿口を吐きながら、さて容易に腹の底を見透かされないのが彼奴の價値だ、とかく今の若い者は萬事の要害が淺間で、一言か二言いふうち直にお里の分る奴ばかりで困るよ」

「それは左様といたしまして、時に黒田が何を、如何やうな事を申してまゐりました」

「なにね、乃公に歎願すると云つて三つの條件を持ち出したが、第一第二は少々むづかしい考物だよ、しかし第三は易いこつた、金を五百圓貸してくれといふ至願さ、勿論、その五百圓の費途を委しう論じて、なか／＼面白いところに目をつけて居るわい、どうしても彼奴は一種の奇人たるを免れないな、たゞ危い事には今の黒田が身分として少し度胸が強過ぎるよ」

其六

あれほどの事で男一疋が歎いて願ふに足らねども、有る奴に無い奴の辭儀作法、まづ歎願書といふ三字に嬉しがらせて後、あとは腸を抉る三件の難題そも／＼何と髭殿に徹へしやらん、さらば我より押し寄せて今朝こそ遁しもやらぬ返答きかんと、例の寝坊助ばつと夜着を跳ねて飛び起

きし風情にお鳥は枕を欬て、驚きながら、

「おや、おや／＼また始つた、をかしい事ねエ、月に一二度づつは」

「なに、何が始つたのだ、呵しいたア」

「いゝえさ、貴方が寝惚けて戸惑ひなさる事です」

「寝惚けて戸惑ひする、こりやア怪しからん、乃公の早起を戸惑ひと思つてるのか」

「ほゝゝゝだつて貴方、さうぢやアありませんか、いつも晝の午砲と鼾の聲と掛合で寐る人が月に一度か二度びよいつと狂氣のやうに飛び起きてさ、そして薄闇いうちから狼狽なさるもの、まさか正氣で目が覺めたとも思へませぬわね、とかく平生が大事ですよ」

「いやはや、こいつが／＼勿體ない御亭主に向つて、これ夫人、いや山の神、よく聞け、いつも

いふ通り乃公は男だよ、むゝ男だ、しかも、嫌みツ氣のない氣一本無垢の本場男だ、そこで男といふもなア百姓の刎ね釣瓶と違つて、朝から晩まで毎日々々働くものでない、月に一度か二度、多くて三四度、それも自ら玉體を勞せずば用の足りない時だけ早起すりやア結構だ、能登の七越在から這ひ出た湯屋の三助さへ功を經りやア下手を使つて朝寝をすらすア、豆腐屋の手間取ぢやアあるめいし、年期小僧の歸り新參ぢやアあんめエし、何の文句があるものか、ぐづ／＼と、控へ

ろ、あんまり戯けて安く積ると聴かねエぞ」

「おや、怖いこと、おツかない事、お氣に觸つたら御免なさい」

「あは、い、い、い、お氣に觸つたら御免なさいア嬉しいね、いくら勝氣でも女は女、どこやら優しくツて罪もないに謝つたところが生命なりけりだ、實は其しをらしい一言を聞きたい爲に、ちよいと怒ツて見たのよ、堪忍しな、時に細君、これから二番町へ出掛けるから出してくれ、着物を貞節の御心にかげられた例のを、過日の拜領物だ、下され物を、お垢附を、さんざ和女が着古したあとの仕立直しをさ、琉球の拾をよ」

「あらまア重ね、酷い事を仰しやるよ、いくら妾だツて、何も妾が」

「いや悪かつた、この唇端め、あ痛た、い、い、い、かうして捻り上げるから、どうかね」

「いやです、嫌で御坐います、たとひ戯談にもしろ、あんまりですわ、イツそ屑屋に叩き賣つて其お錢を乞食に」

「これさ、どうしたもんだ、飽きも飽かれもせぬ間で、あれ横町の斑犬が逃げ出すぢやアないかし、い、え夫婦だから猶更ら腹が立ちますワ、他人なら誰が馬鹿な、自分の好いた着物を潰してま

「閉口頓首再拜この通り、どの通りだと言はれちやア困るが、まさか和女の脚下で亭主が蜘蛛のやうにもなれないから、まづ謝罪ツた、思召せ、ねエ、宜いちやアないか」
「何、ちツとも宜かアありませんが、仕方がないから、勝手に着て往らツしやい、その箆笥の二番目にあれ、鍵が掛つて居ますよ、眞實に貴方アそゝツかしい事ねエ」
「なんとも言ふが宜い、まづ目出たいわ、やう／＼風をさます浪しづかに帆をあげて、いざや漕ぎ出すべいか、めさず港へ、ときに今日の港は大事の渡海だ、餘程うまく舵を取ツて」

黒田健次が髭殿の胸を覗うて持ち出したる條件のうち、第一第二に尤も文を凝らし飽くまで意を注いで、慘憺たる工夫、緻密なる考案、これを上策とし中策として歎願の眼目に述べ立てしが如きも、おもひきや此奴の本心そこにあらで、却ツて五百圓といふ第三の下策、いはゞ敵の易きところに此方の重きを置いて、目をつけし品を買はんとする時、まづ其他の入れぬ品より問ひかゝる横着さ、さながら佐原男爵をもて大道露店の骨董屋と思ひぬ、いざや今日こそは遁しもやらぬ髭殿の返答、否か應か待つ間もなし我より押し寄せて埒あけンブと、連れ添ふ自己が妻に寢惚けて戸惑ひせしかと笑はるゝほどの早起き、そのまゝ上二番町に走

せ行きて二三時間を待ち受けし甲斐もなう、やう／＼主人に逢うて親しく聞けば、歎願の條件、いち／＼道理なれど今なほ思案中と、照りもせず降りもせぬ一言に流石の健次も切り込む言葉なく、なまなか切り込んで今ここに鏝元を損ぜんよりはと、わざと悄然たる眉目、しを／＼引退りて歸りがけながら頼んでも無手は起きぬ本性、せめて小石の一箇を掴んでくれんと、またもや夫人の許に千枚張の面の皮を差出しぬ、

「え、奥様、今日は」

「おや早いことね、もう用が済んだの」

「いえ何済んだでもなし、済まないでもなし、このところ一寸妙な鹽梅で、健次いさゝか不首尾の體、あんまり朝ツばらから押し掛けて少々御意を損ねたやうです、どうか宜しう御慰解を、時に奥様、先日うかゞひました花見は如何で御坐いませう、きのふ愚妻を檢分に遣はしましたら、牡丹から藤へかけて今が最中ださうで」

「ちやア明日にでも出ようかねエ」

「よろしう御坐いますな、春と夏とゆきかふ空の通路は、はゝゝゝかたへ涼しき風が吹くとか申してとかく晩春初夏の交が尤も妙ですよ、仰げば薄霞、みかへる梢が若葉、脚下に塵埃が立た

ないで、すこし急ぐと額に小汗の時候、お召物が袷の重ね着、乃至一枚小袖に隠し手拭の折柄、たまりませんな肌心地が」

「ほゝゝゝさう聞くと猶更ら早くね、御新造を一日かしていたゞくよ」

「これは御念の入った御言葉、恐れ入ります、どうか御遠慮なく御使ひ下さいますやう、貸しながら瘦せて戻るものは鯉節と聞きますが、お貸し申しながら肥ツて歸るこんな結構な事は御坐いませんよ、しかし萬事ふつゝかの女で、どうせ御手許の衆と違ひますから、行届かない處はどしどし御叱り遊ばして」

春の餘波をとゞむる牡丹も紫にほふ藤の花も、黒田健次が俗の俗たる大俗の目よりは、例の男爵夫人を引き出す道具の一個に使はれて、さぞや本意なき怨恨に思ふべけれど、花ものいはねば計策の破れん恐れもなく、夫人は固より時に取ツての此上なき娯樂、風流の外に一物を教へられたるお島さへ我を忘れて浮れ歩きぬ、

本所の牡丹より龜井戸の藤に夕陽を惜しんで、晚餉は橋本の裏座敷、山ほとゝぎすの聲は聴かねども、川を隔てゝ目に見る青葉に一入の心をなぐさめ、まづ初鯉を題の料理かず／＼女二人とい

ふだけに酒と名のつく一本を傾けてよりは、互に打解けて浮世話に身の草臥を憩めぬ、
 「あゝ今日は眞實に宜い保養をしたよ、誰も知ツてるものがないから、いッそ氣が伸び／＼とし
 て、しかし妾のやうな不案内の女と同伴で、さぞ迷惑だツたらうねエ、何か黒田へお土産でも持
 ツてお歸りな」

「どう致しまして、おかけさまで妾こそ近來にない保養をさせていたゞきました、かやうな僥倖
 が御坐いませんぢやア夫人、ちよいと門口を覗いてさへ喧しう言はれますから、まるで籠の鳥同
 様、小さな家で氣の晴れやうは」

「そんなに喧しいかねエ、彼人で」

「ずるぶん喧しう御坐いますよ、餘所様へまゐつては悦けて戯談口ばかり聞いて居るやうでも、
 外よしの内わるしとやらで、妾などは頭から一噛みに噛み付けられて、臺所の道具と一緒に扱
 はれますから」

「ほゝゝゝまさか」

「いゝえ、夫人、眞實で御坐いますよ、過日も自分が煙草盆に火を取らうと致しまして、その邊
 に火箸が見えません時、きさまの指で二個三個こゝへ撮み出せと申しますから、いくら妾でも火

は熱いと言ふが最後、すぐ雷様で、まぬけた馬鹿な女だ、女子といふもなア世帯する以上、指
 の一本や二本は焦げないやうに平生から稽古しろ、そんな用の足りない指なら切ツて捨てちまへ
 とかやうで御坐いますから呆れて御談話にもなりません、夫人、どこの世界に自分の女房の指が
 火箸の代用するからツて重寶がるものが御坐いませうか、をり／＼腹が立ちまして、いッそ今
 うち互の身のためにと、しみ／＼末を考へることが御坐いまして、わけて此頃は」

心の俠を世辭に包んで逆する才氣を愛敬に打ち込みながら、寄せ来る浮世の浪を十四の春より無
 事に漕いで渡りしお島、固より尋常の女ならねば、このごろ頻りに小首を傾けつゝ、佐原男爵を
 親戚といひ、其夫人を伯母といふ健次が言葉に疑念を挿む折しも、幸ひ今日こゝに思ふがまゝ
 の熱を吹いて試みぬ、されど黒田健次また稻妻の如き男、これほどのお島を手放して夫人もろと
 も人知れぬ餘所に語らせながら、事の破綻を知らぬ筈なれば、何とやらん今更ら好んで我より
 求むる失敗の裏に、果して如何なる神算鬼謀やある、一方には男爵に對うて最後めいたる歎願書
 を打ち込み、また一方には斯る危き露顯の基を開きつゝ、こゝ千斤の鐵を髪の毛一筋に繋ぐ利
 那の活動、さてこそ今ぞ怪物の本領を現しける、

男ならば花見歸途の浮足に方角を失うて、つい思はぬ方といひながら内心おもふ方へと飛び行く奴もあれ、たま／＼女二人が月なき今宵を彷徨うて、しかも夜櫻とは聞けど夜牡丹夜藤とも聞かねば、おそくも夕暮までに歸るべき筈のお島、何とかしけん、傾く夕陽に驚いて夕登は橋本の會席料理、いかに山海の珍を積むとも、朝夕の榮華に飽きたる半婆と其道の臭ひに袖を捲うて逃げ出したる身、されば互に腹の蟲を驚かして時刻を忘るゝ筈もなく、よしや夫人を邸宅に送り届け、て其まゝ引き止められしにせよ、夜に入ると思はゞ遠くもあらぬ我家へ人數多き中より使者の來べき筈、但しは歸途のついでに平河町の伯父が許へ立ち寄りしかと、空巢守の健次たゞ一人ランブの下に頬杖ついて、幾度か門邊の蹙音に耳を敬てつゝ、頻りに侘びて待ち焦るゝが如きも實は自己が晚酌の用意なく夕飯を喰ひはぐれたる腹立なりける、

さればとて元來先生の横着なる、箸と猪口とを持つ外は鼻唄うたうて上帯ひとつ手に取らざりし平生の無精、忽ち此時に報い來て、我家ながらも盲目の箱覗きながら、他人の家に捨てられしが如く、火事場の跡の置去に逢ひしが如く、起つて臺所を窺へど菜切庖丁一挺の所在も分らねばせめて眼前の火鉢にかゝる鐵瓶のみ、それさへ歸らば濃茶一ぱい汲んでやらうの心掛なく、たゞ自己が酒の爛に後れぬ用意とり／＼、水を注して、火を吹き火を吹いては水を注し、沸き返る湯

氣は眞の煙と共に天井に立騰つて時ならぬ雲を起しつゝ、今か／＼と咽喉を鳴らして待つ甲斐もなく、柱時計は夜の十時を打つて近所合壁の門口裏口を閉す音くわら／＼、心細や、あの物音を寄せ來る浪と見て、我こゝに取殘されし風情は世話に悴いた俊寛僧都、さても器量の悪さよ、今ぞ始めて女房の有難みを知つたりけりと思ふうち、やがて十一時、はや十二時を聞く憤怒の崩壊むら／＼、果は臺所へ飛び込んで皿鉢膳碗あたるにまかせて、顛倒せども、飯は櫃の底に名残を止めて香の物一片の端もなく半一滴の酒の香もなければ、健次いよ／＼大荒れに荒れ廻りて畜生と叫びながら、門口の戸を閉て切り押入の夜着引き摺り出しつゝ、枕を取つて大の字なりに控と身を顛ばしぬ、されど飲まず食はずに待ち草臥れし空腹たへがたく、兩眼はつきり見開いて煙草すば／＼、

をりしも走せ來る人車の響き門口に止りつゝ、やがて戸を叩く音、しきりに呼ぶ聲は正しくお島、どツこい急には開けぬぞ、かりにも女房たるべきものが良人を兵糧賣めに逢はせし報いは顔面、戸外に其まゝ一二時間の立往生せよと、夜具の上に取り直つて門口の方を睨みながら、一入さら

に高めて空射ぐうぐうと聞かすれば、

「あら嫌だことね、だめですよ貴方、おほ／＼／＼目を剝いて腕組しながら扉を叩いてさ、柵の

達磨の夢でも御覽なすつたの、こゝから善く見えて居ますよ」
おや畜生、どこから見ると思へば南無三寶、入口の戸は閉てしが窓の格子は障子のまゝに明け
放ちたりける、

さすがの健次も遣り損ねて思はず吹き出しながら、やう／＼起つて門口の戸を引き開くれば、お
鳥なほ笑ひの聲を絶たず、

「何だつて貴方、あんな馬鹿々々しい眞似を」

「え、喧しい、だまつてろい、静閑にしるい」

「おや酷い權幕なことね、妾の歸家が遅いからでせう」

「でせう、これさ、でせうたア何だ、生意氣な物言をするない、全く遅いに相違あるまいが、そ
れとも和女の氣ぢやア早い心算か、お一夜の十一時過だよ、もはや十二時に近う御坐いますよ、
それも宜いさ、鍵鎖で繋いでも置かないから、出るなら出るで、なぜ出るやうにして出ないのだ、
あつけらかんと宵から今まで待ちぼけの御亭主様はな、まだ御夕飯も召上らないのよ、むゝ召上
りたくつても召上る事が出来ないのよ、あゝ腹の皮が背にくつかア」
「なるほど、遅くなつたのは重々の過誤、しかし貴方、妾だつて氣のつかない事はないんですよ」

「へん、お氣がつかれるたア此事だ」
「だつて貴方、二番町のお邸宅で」
「えゝ分らない女だな、其事を彼是いふんぢやアない、出る時に何故あとの始末をして往かない
と言ふんだい」

「そこですよ、なるべく早く早く歸つて夕飯の代用に、お土産をと思つてさ、この通り折詰を持って
歸つたんですが、さて他人の供をして其まゝ辻で、はい左様ならと言へますか、だから邸宅へお
送り申したところが、つい引き止められてさ」

「いくら引き止められても、龜の子が藻に引ツ掛つたぢやアなし、それを切り抜ける事の出来な
い女かい、わざと遅くなりやアがツて人を、べらぼうめ、燕の子が親の餌を待つやうに口を開い
て喰ひ餘しの齒糞を喜ぶ人足と思つたかい、全體をり／＼乃公を馬鹿にしやアがツて」

「おや、いつ妾が貴方を馬鹿にしました」

「今さ、現在、今夜さ」

「おゝゝゝ、恍惚ぢやアいけませんよ、黒田さん」

「なんだ、黒田さんだ畜生、いやに改つた物を言ふな、ふざけると聞かないぞ」

「はい、ふざけも致しません、眞面目に改めて申しますが黒田さん、妾よりかア、貴方こそ人を馬鹿にして在らツしやいませう。」
 何とかしけん、お島キリリと柳眉を逆立て、健次の膝に自己が膝つつかけぬ、
 お島たゞ一言の下に往生するかと思ひの外、びんと強ねて總身を震はせ、いき／＼と張り詰めし黒眼勝の瞳を定めつゝ、持ち歸りし折詰料理を掻き退けての勢ひに、さすがの健次も起き直つて枕を跳ね飛ばしぬ、

「なんだ、黒田さんだ、改めて申しますツて憚りもなく何を申し上げ奉るのだ、かすかに聲は聞えたやうだが口元の動き鹽梅を見損つたから、も一度たしかに言ツて見ろ、はつきりと言ひ直して見ろ、ふざけた女だ、うぬが花見で亭主の夕飯も忘れてよ、それで氣の毒の面でもすることか、逆捻の舌三味たア物の道理が飛び上ツて呆れの宙返りだ」

「ほ／＼／＼黒田さんと言つたのが猶更ら御氣に觸つたの、あらためて申しても宜う御坐いますか、しかし言はぬが花で、言ツちやア互に水臭くなりませうよ」

「水の臭さが如何な臭ひか、ついでだ、この獅子ツ鼻へ嗅がしてくれ」

「ちやア申しますがね、いや、よませう、矢張り妾は言はぬが花を花として、このまゝいつま

でも、お／＼／＼貴方の御傍に居たいよ」

「畜生、いやに澄まして糞落付に落ち付くな、よし落付くなら床板の引ン抜けるまで腰骨するて落付いて居ろ、さう聞いた以上は理も非もねエ、うぬが差出す水の臭さを嗅ぐ前に乃公が拳固の味、ドンなものか喰ツて見ると、忽ち起ち上ツて一騒動やツつける處だが、情やらない、あは／＼

は／＼やらないよ、おい、貴様アいよ／＼知ツたな二番町と乃公の關係を」
 いひつゝ長煙管ひきよせて、眞つぐ手も平然たる黒田健次の本色、こゝに現れて冷かなる笑を片頬に浮べぬ、

お島は其顔ヒツと今更に見詰めて、つつかけし膝を我手に片寄せながら、

「聞きましたとも、はい、知りましたよ、しかし此事は今日をはじめて聞いたでもなく知ツたでもないから、少しも驚きませんわ、實は一月ほど前から」

「なに一月ほど前から、どゞどうして」

「どうしてツて、貴方でもない、それこそ、おふざけ遊ばすなだ、とぼけてさ、なるほど最初は羽織の紋も同じこつたし其上に貴方の氣性が氣性だから、平河町の伯父の家へ下宿なさる時分の様子といひ、全く眞實の御親類だと思ひ込んで居ましたがね、かうして家を持つてから半月たつ

か經たないうち直に見抜きましたよ、しかし此處を貴方よく聞いて下さい、妾が見抜いた以上は先づ貴方に欺されたも同然でせう、いくら賣口のない馬鹿な醜女でも可哀さうに、世の中で一人と思つて生涯を契る自分の良人に欺された妾がさ、怪我にも口へ出さず顔色にも現さないで今日まで、じつと堪へて居たのは何故だと思ひなさいませ

「むゝ」

「むゝちやアありません、第一、貴方がさ、妾の悟つたのを知らずに居る人ぢやアなし、はゝア彼女どうも悟つたやうだ位は、きつと悟り返すべき貴方が、また悟り返した上は、うか／＼と先方の鎗玉を待たずに自分から切つて出るべき貴方の氣として、なぜ今日まで黙つて在らつたの當分の用がなくなりやア足手纏ひだから野か山へでも、お捨てなされる心算なの、愛想がつきて出れば儂倅、背後から鹽花でも撒く心算で在らつたの」

「むゝ」

「あれ又むゝだよ、むゝちやア少しも分りませんから、それだけの理由を聞かして下さい、理由さへ分りやア添つた以上は自分の亭主、はい、鬼でも蛇でも驚きませんから、たゞ貴方がさ、妾に物を秘すだけが卑怯ですよ、しみ／＼怨恨に思ひますよ、かうなら斯うと打ち明けて、貴様も

其心算で居ると唯の一言いつて下さりやア、それで済む事を繼つ子が物を盗んだやうに、しらしらしい顔をしてさ、おもひの外に貴方も人が宜いよ、なんです華族の一人や二人を、男爵か巾着か知らないが伯父だの伯母だのと觸れ込むほどの價値はありませんよ、やるなら遣るで、もそつと大きいところに目鼻をつけて、ハキ／＼と小氣味よくお遣りなさいよ、まんざら非人でも穢多の娘でもない妾が、失禮ながら今は身一個の貴方を見込んで今日まで立ち過したの、決して華族の親類といふ聲に驚いて賣り付けた業ぢやアないんですよ、ちと大層な口をきくやうですが華族の華の字が有難けりやア王様の王の字を戴いて死にますワ、眞實にさ、だから今日、橋本で夕飯の時も、かねて貴方から言ひ含められた一條は少しも口を切りませんでしたよ、たかゞ女髪結の頬邊から湧いて出た風聞で、なりあがり男爵の女房が小金を借すぐらゐる事、叩いたつて絞つたつて手敷ばかりで結句なんの用にも足りませんから」

飯粒を割つて押し入るゝが如き丹花の唇端より、吐きも吐きたりけり怖ろしの本音に、流石の健次あつと呆れぬ、されど此奴また眞實に呆れしやら手管に呆れしやら、

おのが庭の脚下より青蛙一疋びよこりと飛び出してさへ、不意に驚き顔色を變へて叫ぶべき女の

身、しかも今年やうく二十歳を越えし女の身として、世の中に斯人ひとり生涯を契る我良人
 しかも一年立て養ひにせんぞと思ふ可愛の男に今日まで欺かれし淺黄頭巾はツと脱いだる面相を
 見ながら冷かに笑うて、およしなさいよ今更の遅蒔き種、先刻御承知どころか一月前から見抜い
 た妾の前では迎も宜い芽は出ませんよ、と鴉の濡羽色に似たる鬢の毛を掻い撫でて一入の艶を含
 むのみか、あれで三度の飯を喰ふかと思ふばかりの愛敬したる口元より、呑めといはゞ家庫も
 鶉呑みにすべき大息吹き立てしお島が本音に、浮世の繩張を跳ね越えたる流石の健次何とやらん
 俄に自己が足を削られたるが如し、
 されど黒田健次といふ奴、そもく人間の一怪物、我流ながらも事の利害と物の勝敗とに一種の
 機を窺ひつゝ、人を制して勝つ時には却つて負けたるが如く、人に制せられて負けし時こそ却つ
 て勝を占むる心の算盤珠、ばちくんと弾いて自己ひとりの腹中に最後の笑を含めば、其夜もお島
 に言ひ込められ説き伏せられて豆鐵砲に打たれし鳩の風情、飛びもせず跳ねもせず夜一夜を呆れ
 返りしが、あくる日の朝ばつと翼を伸ばして家を飛び出しぬ、
 お島め、いづれ叩けば音のする奴、うてば何とか響く奴、たゞの牝一疋とは思はなかつたが、ま
 さか、あれほどの度胸あるたア案外の重量、いやはや知らなんだよ、このところ現在の御主殿

ちと浮脚の體だね、しかし高が女、まして連れ添ふ良人の乃公様に今日まで欺されて、その嘘の
 皮を知りながら然までの腹立もなく、いはぬが花で此まゝ矢張り御傍に居りたいとは、畜生、ふ
 ざけた殺し文句を吐くうちにも、どこやらに可愛げあつて言ふに言はれぬ情の露、あゝ面白いと
 はいふものゝ、さて今年やうく二十歳の彼女が、あの分で押し行く果が氣遣はしい、まして遣
 る瀬なき貧の責苦か何ぞに陥つた時は猶更ら危い事だ、もし一步を誤れば忽ち毒婦にもなりかね
 まじき氣色、こゝは一番どうかして染め直したい、おれも根からの悪黨ぢやアないからねエ、な
 んで十高が華族の一人や二人を、華族の華の字が有難けりやア王様の王の字をいたゞいて死にま
 ナワ眞實にさ、およしなさいよ面倒くさい、男爵か巾着か知らないがと、あくまでお島に吹き立
 てられし健次、今朝は其中着の男爵が前に現れて、平生の横着面なんとやら俄に打萎れたる風情、
 たゞ黙念として座に控へつゝ、をりく溜息を漏らしぬ、されど心は例の稲妻、闇を破つて隙間
 もなく八方に閃きける、
 「おい黒田、今日は貴様どうかしたな、いつもの元氣さらに無いやうだぜ、しかし、まさか様子
 の變るほど物事を苦にする奴ぢやアなし、變だな」
 「はい、御覽の通り野生の骨格いたづらに病を知らずの諺で、いまだ曾て枕頭に藥瓶を置いたこ

とも御坐いませんが、昨夜から少々気分、つまり心に聊か申分が出来まして」

「心に申分、ちやア何か、人知れぬ憂悶とでもいふ事かね、貴様にしては優し過ぎるの、はい、は、全體どういふこつた、話して見る、今日は乃公も閑暇だから、ついでに過日さし出した歎願書の三字についても改めて委しう聞かう」

「有難う御坐います、しかし斯く沈鬱の仔細を打明けて御話し申せば、いかに鐵面皮の健次も今日かぎり御當家へは、爾後うかゞひかねますほどの儀で」

「ふむ、何故だ、構はず言へ」

きくより健次はツと座を迂りて、さながら人物の打ツて變りし如く恐惶謹慎の體、頭を疊に摺り付けて額越の目も上げ得ず、聲さへ靜に陰を帯びぬ、

「これまで、段々と一方ならぬ御恩を蒙りました健次が、その御恩を今日まで仇に返し居りました重々の罪、しかも其事を昨夜、愚妻のために、眞正面より發かれまして、實に慚愧至極、もはや進んでは良心に責められて再び御意を得ん面皮もなく、退いては泣いて諫むる妻に責められて家に安んずる席もなく、進退こゝに谷りました最後の、これが御暇乞かたく、御謝罪を兼ねまして」

いひつゝ、纒に頭を上ぐれど猶おのが膝を睨んで、おもはず組みかけし手を又もや疊に押し付けながら、これほどの横着物が俄に悄然たる哀れさを、男爵つらく見遣りて眉を蹙めぬ、

「恩を仇で返したといふ其仇は、全體どういふことか、まづそれを言へ」

「はい、實は今日まで、恐れながら偏に御當家を頼んで御恩に縋るのあまり、申さば浮世の雨風を防ぐ傘とも存じまして、御夫婦を伯父だの、いや伯母だのと世間へ、勿論、世間と申しても御存じの通り目下は翼を縮めて飛ばす啼かずの健次、敢て廣くは御坐いませんが」

「いやはや驚いた奴だ、ひどい奴だな、貴様また何故、どうも呆れた奴だ、しかし乃公を伯父だの何だのと言つて、どれほどの事をしたのだ、何の爲に」

「いや、その邊は聊か御聞き違ひかのやうに存じます、只今も申し上げました通り、いはゞ穴を失うて野原に迷ひし狐が、苦し紛れに虎の威を借ると同然、たゞ御恩に押れて思はず空威張りに瘦脇を張りましたのみの儀で、決して御名前を汚すの、また御名譽を荷いで利慾の看板にするのと、左様の筋では、左様の卑劣なる野心では御坐いません」

「むゝさうか、しかし妻に發かれたとは」

「このところ健次が身に取つて生涯の不面目、大汗の苦しみ、實は愚妻にまで、その通り欺いて

居りましたが、昨日、夫人の御伴で本所の牡丹から龜井戸の藤へまわりました途中、とう／＼化粧の皮が現れた様子で、夜の十一時を過ぎて歸るや否、いきなり拙者の胸倉を引き締めて泣くやら喚くやらの大騒動、なぜ其様な濟まない事をなさる、なぜ其様な大膽な事をなさるツて、今朝まで一夜を責められ通しました儀で、流石の拙者も一句の言葉なく追ひ立てられ、一步さきへ斯く面を被ツて罷り出ましたが、いづれ妻も後刻、夫人にまで御謝罪かた／＼伺ふとが申して居りましたし

殊更に自己が身を引き落してお島を揚げし健次の本色、また此うちにも何をか含みける、

其 七

世の中に斯人ひとり生涯の苦樂を契る我良人に、それと知りつゝ今日まで欺かれながら、じつと堪へて言はぬが花を其まゝに眺めしお島、もとより鼠の物音に立ツて騒ぐ女ならねど、さて言ひ出せし後は生れつきの勝氣に入一倍の口を極めて、何の會釋もなく捲したてし前夜の今朝、たとひ火水の中へ突き落すとも儘に一度は跳ね返るべきほどの健次が、物も言はで悄然として立出でし後影を見送れば、また女氣の今更に哀れやら氣の毒やら、欺かれし立腹は残れども、それさ

へ原因を訂せば女一人の我身に嫌はれじとの心中立、かつは赤裸にしても浮世の巷に押しも押されもせぬ男に、今年やう／＼二十歳を越えし妻の身としては嗚呼いひ過せし勿體なさ、やがて歸らば何として慰めん、いかに笑うて水に流さんかと、さすがのお島も情の露には脆く、柱に身を凭れて獨り思案に暮るゝ折しも、ガラ／＼と門の格子戸あけて入り来りしは平河町の伯父なりける、

「やアお島、すぬぶん早起だな、しかし旦那は不在、なアるほど、朝寢の旦那が不在で和女一人、其處に其様して何だか變に顔色の悪い様子を見ると、まさか茶屋場のお軽でもない様子、はア、やツたな、あんまり交情が善過ぎて互に遠慮なしの果が、ちよいと夫婦喧嘩の味を覺えたといふ幕だね、あは／＼／＼いや稀にやア宜からう、昔おもへば我もさ、妙に腹が立つやうで嬉しいやうで自然たいやうで、なか／＼異だらう、どうだい」

「いやだね伯父さん、朝ツばらから止して下さいよ、老年をしてさ、そんな氣樂な譯ぢやアないんだから、用があるなら早く用を済まして、さツさとお歸り、今日だけは」

「おや、おや／＼こいつは驚いた、和女達が勝手に情の善過ぎた飛沫を他に、しかも現在の伯父に引ツかける女があるものか」

「え、うるさいねエ眞實にさ、情が善過ぎた位で斯んなに心配はしませんよ」
「ちやア何故だ、さう聞くと少々おれも心配だよ、全體どういふ譯で」
「どう斯うツて、談話しても無効だから、いッそ聞かない方が宜いでせうよ」
「これさ、和女また例の氣性を出すよ、それちやアいけないツてば、たとひ薬にしても木にして
も伯父は伯父、また物は相談といふ事があらア、自分ひとりで心配したツて詰るまいちやアない
か」

「いゝえ、さう取ツちやア困りますよ、早い談話がね、妾も今までと違ツて獨身ちやアなし、い
くら伯父さんだツて、あれほど立派な男を亭主に持ちながら、それを措いて自分の親戚ばかりへ
無闇に相談も出来ないワね、何だか踏付けにしたやうで、それとも夫婦の間で手に餘ツた時は、
いづれまた力を借りますから、まア今のうちは善かれ悪しかれ、妾は良人の指圖次第、しらぬ顔
で見て居て下さいよ、まして妾が身の物で、かうして世帯を張ツてる以上は猶更、ねエ伯父さん、
わかりましたらう」
「わかつた、いや充分わかつたよ、おれの姪としちやア和女は出来過ぎた女だ、感心、もう何に
も言はねエ、しかし随分と氣をつけて、大切にしろよ、如才はあるまいが」

「あい、知ツての通り妾は氣儘者だけに、また辛抱も堪忍も人並よりやア強いから安心して下さい
い、今に善い事を聞かせますからね」
「おいさ、朝夕、心で祈ツてらア、おれも子はなし和女も親はなしよ、伯父と姪と一粒種の寄合
だア、萬事たのむぜ」

わざとならねど人さまんの癖、門口の溝板をステツキもて突き破るが如く二三度がちくと鳴
らして、振り返りながら大道に痰を吐く音、やがて格子戸あらく片手に引き開けて、
「おい今歸ツたよ」

まづ此聲、しかも近所合壁に響く大聲ふりたて、歸るべき健次が、今日に限りて音もせず聲もな
く、しづかに歸り來りて無言の體を、お鳥とりわけて一入さらに笑を作りながら、

「おや、お歸りなさいまし、けふは何處へ、先刻ね、平河町の伯父がまゐツて宜しくと申しまし
たよ、すぐ御飯になさいますか、御酒ですか」

健次なほ默然として火鉢の前に坐をしめ、袂を探ツて取出せば生憎に腰の折れたる紙巻やうく
一本に、ちよツと舌鼓うツて長煙管を引き寄せながら、ばツと吹き出す餘煙の中より眼を据ゑて、

お島の顔じろりと見詰むれば、お島おもはずホ、と笑うて、

「貴方、怒ッて在らッしやるの昨晚の事で、それとも外に何か御氣に觸りましたの」

「いゝや別に」

「だツて、いつもと違ひますもの、御様子か」

「たとひ様子が違ッても今日こそ和女の天下だ、少しも心配するにやア及ぶまいよ、乃公が悪い

ンだから、全く乃公が悪かつたよ、なるなら料簡してくれ、その代り先刻、上二番町へ押出して、

眞正面から萬事がらゝがツと打明けて仕舞ツた」

「おや、あの何ですか、昨夜の事を」

「さうよ、現在つれ添ふ女房の和女に化の皮ひんむかれた恥を思やア、玉に使ツた本人へ白状す

る位のこたア河童の何とやらだ、しかし先方ちやア驚いたよ、髭ツ面がさ」

「でせうとも、驚かないで貴方どうしますものか、驚いて何といひましたエ」

「何と言ふツて、何と言はせるものか、そこが聊か他人と違ッた乃公の腕よ、驚かし賃に五百圓

といふ金、耳を揃へて揃んで来たが、お島、これも少々世間の逆さま事だらう、あんまり有勝の

こツてもなからう」

いひつゝ懐中より取出したる五圓紙幣の一束、膝前に投げ出して空嘯けば、流石のお島あツと呆

れて見上ぐる顔に、健次ひやゝかなる笑を呉れて自己が鼻を指頭に撮みながら、

「別に欺す氣もなかつたが、ついまア、ねエ、浮世の方便を使ひ過ぎて、今日まで面を被ツた乃

公の面目なさ、ついでには和女もさ、それほどの可憎ら容色を持ちながら、下卑て言やア爺婆にな

るまで臭い屁も放り合ふといふ現在の女房に餘所の箔を剃いで賣り附ける乃公のやうな料簡の間

違ッた情のない、底の知れない氣心の分らない男に生涯の苦樂を契るのも嫌だらうから、こゝは

一番うんと思ひ切ツて、ちと花は過ぎたが葉の枯れない今のうち、互に末のためだ、その五百圓

を出がけの車賃にして、これまでの事は夢と諦め、いや夢たア古い文句だが、どツか新しい好い

た處へでも往ツてくれ、乃公は損益なしに元の奈阿彌、またステッキ一本でコツキ歩くさ」

いふ言葉さへ終らぬうちに、お島ぐツと膝頭ツツかけて健次の手首を握りつゝ、

「貴方、そりやア誰に仰しやるの、妾にですか、この島にですか、但しまた本氣ですか、いゝえ

さ戯談ちやアないんですか」

いき／＼と張り詰めし目を据ゑて、怨めしげに口惜しげに、たゞみかけつゝ隙間もなく切り込め

ば、健次しづかに首肯いて剃立の頸を逆手に撫でながら、

「むい本氣だよ、しかし乃公から好んで本氣にしたでもないが、一つは男甲斐もない面目なさ、氣の毒さ、また一つには前夜、あんまり和女の横幕が強いから、定めしさうだらうと察してよ」
「だらう、おや、だらう位で貴方、いえさ、だらう位な薄ッぺらな口上で貴方、かりそめにも夫婦といふ人間一生に一度の鏡を引き抜く心算ですか、よろしい、さア抜くなら抜いて下さい、それと知りつゝ今日まで欺された立腹よりも、しみじみ今の一言が身に徹へましたから、もう此上に未練たらしい文句は言ひますまい、ついでには出掛の人車賃にしると仰しやる其五百圓、なるほど千圓の半分で百圓が五個大金でも御坐いませうが、妾の、この島が一時の玩弄物にされて御用の濟んだ跡を、今更ら突き出される人車代には少々不足ですから、まづ親として居る平河町の伯父にも得心させ、妾も得心するほどの人車賃を出して下さい」

「幾何」

「ほい幾何ツて貴方でもない、妾のいふのは金ぢやア御坐いませんよ、天下まはりものゝ金ぢやア御坐いませんよ、馬鹿々々しい、溝板小路を世界の端女郎衆が紋日物ぢやアあるまいし、金金ツて、人間の身体はお金ばかりで埒は明きませんから、もそツと男らしい覺悟で返事して下さい」

「ふむン金でない、ぢやア何だ」

「貴方の謝罪證文たツた一枚」

「いや易いこツた、お易い御用、しかし乃公の證文は反故も同然だぜ」

「知ツて居ますとも、貴方の謝罪證文一枚を竹の先へ貼り付けて振り舞はしたツて、どこの馬鹿が一錢にも買ひますものか、鼻紙にもならない反故は萬々承知の上ですよ」

「それほど承知の反故一枚を取ツて、こゝに此五百圓といふ現在通用の金を棄てて行く和女の心は」

「入らぬこと、よけいな御世話さま、お聞き下さるには及びませんが、言へといふなら少々ばかり申しませうか、念のために」

「言ツて見ろ、いや聞かしてくれ」

「外でもない、その反故一枚で見事に貴方の生涯を縛りつける思考ですよ、えい白癡けた事をいふな鐵の鏈鎖でも縛られない乃公だと仰しやるなら、このまゝ分れて早いが五年、おそくて十年のうちを御覽なさい、きツと縛りますから、しかも咽喉佛の御轉宅なさるほど」

「おもしろい、ぢやア縛ツてくれ、乃公も男だ、女一疋が反故一枚で何程の事が出来るか、生涯

を渡る間の一戯事だ、と言ふところだがね、どうだ、もう喧嘩は止さうぢやないか、互に詰らな
いぜ、實は斯んな言ひ掛りになるとも思はないから、つい洒落に一寸、あはゝゝゝしかし、ど
うしても乃公は和女に叶はないよ、度胸といひ辯といひ、たしかに二三枚がた上手だよ、時に夫
婦の錠より五百圓のうち二百ばかり引ツて抜いて、近いうち温泉へでも出掛けようか、ちと延引
ながら新婚旅行とか何とかいふ心算で嫌か、思召は御坐いませんかな」
しきりに顔を差覗いて慰むれども、お島は更に無言、
互に言ひたきまゝの口を叩いて目色を變ふるとも、夫婦こゝに離れぬ以上は妻たるお島、いつし
か良人の健次に言ひせ伏られて、果は門口の格子を漏るゝ笑ひ聲、雨降ツて固る地盤に葉越しの
月影おつる心地して、

「いざ酒だ酒のことゝ、お互に負けず劣らず骨を折ツて折角咲かした喧嘩の花を、今更ら水に
流すも惜しいから、乃公が腹の中へ酒で流し込むのだ、嗚呼めでたしゝゝ」
しきりに鐵瓶の湯加減を試みて火を掻き起す健次の顔、お島しみゝ見詰めて思はず吹き出しな
がら、

「あれだもの、呆れが通り越して何とも御挨拶に困りますよ、めでたいゝゝツて何が目出たいも

ンですか、貴方ア腹さんさ思ふ事を吐いて人を苛酷めた跡だから、溜飲が下ツたやうで痲癩の蟲
も納り氣も晴れませうが、妾は些とも呵しくないワ、まだ胸に口惜しいと思ツた凝固が残ツて居
ますよ馬鹿々々しい、眞實に女ほど世の中に馬鹿々々しいものはない、自分は九分九厘の理があ
ツてもさ、どゝの最後は男の一厘で直に寂滅往生、それも無理押付けに往生せられるから、も
し死んだら妖怪になツて出るのは其道理だと思ひますよ全く、ほゝゝゝおや何です今更ら恍け
て鐵瓶の湯加減なぞを、お生憎さま、ころりと頓ツて晝寝をして居ますよ臺所でお痲徳利がさし
「いやはや、なさけないなア、どうか後生だから一寸、起してくれ、急用が出来たと言ツてよ、
また和女もさ、今となツて未練らしい愚癡なソぞを滾しなさんなよ、ハキゝゝとするが宜いや」
「誰が愚癡を滾したいもんですか、みんな貴方が滾さすンだもの、仕様がありませんワね」
「仕様がないと言やア仕様がないぢやアないか、いつまでも、だからよ、さつさと氣を取り直し
て料簡しろといふのだ、さて料簡して見な、腹の立ツた後は格別また一入だぜ、おれの面が、和
女の目から、えゝあんなに憎かつたのが不思議だとか何とかで、おもはず飲ましたくなるものだ
よ、古今一般そもゝ女房氣質としてな」
「あら厚顔しいこと、そんな氣で居られるから堪りませんわ、妾の立つ瀬がなくツてさ、しかし

今日は大負けに負けてお銚子一本ぎり

「吝な事をいふない一本だなんて、同じ飲ませるからア少くとも五六本にしてくれい」

「いけません」

「ちやア三本ばかり」

「ばかりなんて怪しい掛合は止して、それでは二本になさい、ね、また晩酌がありますから、其間に妾は一寸出ますよ」

「何處へ」

「何處ツて二番町へさ、いま貴方が言ツたちやアありませんか、萬事後日のため乃公のみの謝罪では面白くないから和女も往ツて何とか誤魔化して来いと、もう忘れてさ、お酒にかゝると無効ですよ貴方は、さう飲みたきやア酒屋の番頭にでも、おんななさい、しかし危険な番頭さんだらうね、ほゝゝゝ」

「へん、さう言ツたものでなしさ、これでも勤めるところは」

「きツと勤めかねて失策りませう」

「おや」

「おやちやアありません、女房ですから、氣をおつけなさい、世帯のため優しい顔ばかり、しませんよ、ちやア貴方、ちよいと今のうちに二番町へ往ツて、妾は妾だけの料簡で如才なく遣ツて来ますから、御酒は其お銚子ぎりにして、おとなしく留守番をなさいよ、おそくとも晩の御飯時分には、きツと戻りますから」

「おいさ、委細承知だ、どうか其邊うまく遣ツて来てくれ、萬事一切おれを悪者にしてよ、一寸きられるも二寸きられるも同じ疵だから、いやに乃公を護ツて和女の身に朱點がつくと却ツて困るよ、また後日のため、つまり和女を二陣の新手に控へるのだ、いゝか」

「そこは大丈夫、鉄くぎ貫に夾まれても抜かれませんか、もし談話の場合で遅くなツても過日のやうに臺所を顛倒したり痾癪を起して寐込なりなると嫌ですよ」

「はゝゝゝ今日は喧嘩のあとで流石の乃公も少々遠慮勝の折柄だ、この上に和女の機嫌を損じて堪るものか、さらぬだに戦々競々として薄氷を踏むの心地、そこで氣は唯うろ／＼」

「虚言をお言ひなさい、馬鹿々々しい」

時に取ツては健次に元をかけたるお島、まして女は物の渡りに一割の利方、うまれつきの才氣

を浮世馴れたる愛敬に包んで、佐原男爵夫婦を掌上に顧ばしながら、心に凱歌あげて其の日の夕暮すぎしころ、いそくと我家に歸れば門の格子戸かたく閉ちて、押せども開かず叩けども聲なし、

さてはまた、あれほど言ひ固めしに例の無精殿が酔うての癡癡、待ち草臥れし自棄寝ぞと、舌鼓もろとも裏口に立廻りて庭の雨戸を引き開けつゝ、そつと内に入りて見ればランプの火を細めて机の上に一封の置き書状、墨くろくろくと假名もて、「こちの島ばうへ、健次より」と認めぬ、

「おほい、いゝまた戯談をなさるよ、つまらない、さア出て下さいッてば、どこに在らッしやるの」

いひつゝ廣くもあらぬ家内を見廻せども、厠にさへ其影なく、第一の證據にすべき帽子と下駄もなければ、お島おもはず眉を擧めながら、その書状を披けば言葉のまゝの走り書、

さんざ罷を説き付けて今朝やうく出来した此五百圓ね、いつまで睨んで居ても矢張り五百圓で、もし費へば直に減るだらう、そこで乃公が一番うんと智慧袋を絞つて面白い事を考へたよ、しかし其工夫は家に寝て居ちやア無効だから、三日間ちよいと宿泊がけで出掛けるよ、二

番町へは勿論のこと平河町の伯父御にも黙つて居な、三日すぎたら五百圓を二三倍にして歸るから、委細は其時々々、細工は流々だ、仕上を御覽じるまでは、お淋しくとも辛抱が肝要、

やうく浮世の巢を構へて日夜の雨露を凌ぐに足れども、元來これ一介の風來坊たる黒田健次が、佐原男爵に對うて差出したる書中の三件をもくいかなる方案を描きしやらん、五百圓を其中の尤も易き願意といはせしさへ不思議なるに、いはゞ男爵の名を賣り家を弄んで現在おのが連れ添ふ妻までを欺きし罪の数々、さらに臆する色もなく眞正面より押し開いて白状せし曉に、耳を揃へて其五百圓を掴み出せし案外の狂言、さても、いづこに斯る世上の逆さま事やあるべき、しかもまた其五百圓を忽ちお島の膝頭へ投げ出して、今日まで妻を欺きし良人の無情に怨恨あらば、聊かなれど離縁の沙汰の人車賃と、莫の煙を輪に吹いて思ふがまゝの熱を冷しつゝ、果は門口の格子を漏るゝ高笑ひの聲、互に解けて水に流さんよりは酒に流して我腹に納めんと、片手に杯を持ちながら片手に再びお島を追ひ使うて、上二番町の佐原家に二陣の新手を向けし個中の活動、そもくいづこに斯る横着物やあるべき、冬ごもる安達が原も雪消して現れ出でし鬼鹿毛の駒とは、古人うまい事を吐し居つたるかな、い

さやこれより我世界ぞと、あとに残りし五百圓を懐中に捻ぢ込むや否、かねて心に期したる背水の陣、時には突進して田單火牛の謀策、身には覺悟ある地獄の上に一足飛び、そのまゝふいと家を駆け出して西か東か南か北か、吹き来る風に音はあれども彼奴が飛び去る跡に影もなく、たゞ假名もて筆さへ走り書の一封とは、そも／＼今の世に斯る闇雲の礫男やあるべき。

共 八

いきて生あるかぎりには現世の苦樂を契りし現在の良人に、それと知りつゝ欺されながら、いはぬが花を花として今日まで忍びし我身の心を知らば、たとひ火に入り水に入る事さへ仔細打明けて後にこそ、やりもし出でもすべき筈を、今なほ餘所々々しき振舞に我を出し抜いての書置とは、さても怨めしの人よ、五百圓といふ金が二倍三倍なんのその、よしや半日の間に十千萬兩を積んで歸るとも、かくまで我身を甲斐なきものとせられし上は、おのれやれ、どこに男の嬉しき情やあるべきぞと、お島たゞひとり胸を燃して待ち受けし三日目の夜、しかも十二時を過ぎて草木も睡る頃、門口の戸を叩くは正しく健次の足音呼聲、あはれや彼奴が成敗吉凶この瞬間に宿り、お島が喜怒哀樂また此瞬間に籠りける。

さらぬも空巢守の獨寢に夢おどろき易き女の常、お島おもはず枕を敬てしが、いやまで暫時、出る時は斯まで思ふ妻の我身を出し抜いて飛び出でながら、今更ら歸りしとて斯る夜深に門口の戸を割らんばかりの物音、えゝ腹立たしや何とせう、五百圓が二倍三倍さては五倍六倍か知らねども、つれなき男心にはこの後の懲戒、身の毒にならぬまでは其まゝ夜露に打たせんと、きこえよかしの咳拂ひ二つ三つ、やがて灰吹の煙管に音を立つれば、軒端に佇む健次たまりかねて戸の節穴より差覗きつゝ、

「おいこら開けんか、あける畜生あけてくれ、あけて下さい、お開けなすつて、どうか御願ひ申しますからよ、只管歎願のいたり」

次第々々に哀れの音を吐く心を思へば、健次どうやら遣り損ねて逃げ歸つたる敗軍の將に似たり、

およそ一時間あまりも立たせて後、お島やう／＼起き出でて門口の戸を引き開ければ、夜露に濡れしよぼの健次、しを／＼として家内に入り、ランプの小影に身を縮めて坐したるまゝ物もいはぬを、お島じろりと怨めし横目に見ながら、

次 健 田 黒
「お歸りなさいまし、よくまア提灯もなく歸られましたことねエ、路も忘れないでさ」

「さう邪慳な事をいふもんでないよ、三日三夜の間さんさ苦勞をした最後に、また二時間ほども夜露にうたれて立往生、かはいさうに、これが男といへるかい、これが女房持といへるかい」

「だつて貴方、どこの世界に大事の良人を夜露にうたせて喜ぶものがありますか、みんな貴方が勝手になさる事ですワ、全體どこに在らしつたの、だしぬけに飛び出して三日もさ」

「どこツて、さる處によ、うまく遣れば門口から嘔鳴ツて這入る筈だが、少々まづいから斯の如く悄然として、どこに居たとも言ひ兼ねる乃公が心の中、察してくれ」

「しかし、察しやうもないぢやアありませんか、何が何だか少しも理由が分りませんから」

「その理由を分るやうに言はない所を、察してくれといふんだよ」

「そんな無理な事を、しかし貴方や、あの御手紙の通り五百圓が二三倍になりましたか」

「え、其處だよ」

「どこですよ」

「どこも、彼處もあるもんか、五百圓すつかり美事に丸潰れ、目的がらりと外れて空になつたのだ」

いひつゝランプの小影に身を縮めて流石の横着物しをくくと腕を掛けば、お鳥さらに一入うらめ

しげに目を款て、其顔じろりと見詰めながら、

「それ御覽なさい、最初から知れたこつてすよ、いくら貴方だつて鉛細工か何ぞのやうに、お金といふものが自由になりますもんか、數代連綿と續いた商賣人でさへ、立派な庫附の表面に貸家札を張る世の中ですよ、破れ疊の髭を撈つて天下に通用するぢやアなし、それとも石が小判に化けた夢でも御覽なすつたの、馬鹿々々しい、青田の蛙が笑ひますぜ」

「いかにも、道理だ、乃公が悪かつた」

「もし貴方がいふ通り、五百圓が三日のうちに手を叩いて十千萬兩になる位なら、世間に乞食や盜賊の種が断れますよ」

「いや道理だ、いかにも乃公が悪かつた」

「道理だ道理だ、乃公が悪かつたぢやア幕が下りませんから、お言ひなさい、聞かして下さい、五百圓を空にした目的の外れやうを、今更になつた金の行方を追ひ掛けても無効ですが、せめて死骸の捨て場所を聞かないと妾の胸が霽れませんワ、だしぬけに飛び出して三日もさ、置き手紙の文句を貴方、今でも覚えて在らつしやいますか、なぜ妾に打明けてから出て下さらなつたの、もし聞かしたら驚いて其まゝ氣絶でもする妾と思召したの」

「いや道理だ」

「あれ、また道理だよ、これで道理が三度目、もう宜う御座いますから、その事實を聞かして下さい」

「ちやア言ふがね、實は、全くのところ、あの何だよ、えい、投機を遣つつけたのさ、しかも手取早く引ッ喰はして株の方を」

「でせう、きツと其邊だらうと思つて居ましたよ案の定、ほんとに仕様がなねエ斯人は、闇雲ばツたりの飛び上りでさ、よく首を抜かれずに歸られましたことねエ」

「これさ、文句は後刻にして、此處を能く聞いてくれ、元來が乃公のやうに浮世の繩張を飛び越えた氣性でさ、そもく人間生涯の間ペンく面倒くさい長ツたらしい貧富成敗を待ツて居られるかい、そこで其貧富成敗を其日の一時に賭して乗るか反るかの一足飛び、すゐぶん男らしい仕事と思つたのが事の失策で、いやまだ全くの奈落にも落ちないのさ、言葉ちやア空になつた

いふものゝ匙加減で少しは脈があるから、もしこゝで百と二百の援兵さへありやア、敵の重圍に陥つた五百圓を救ひ出して再び盛り返す策略もありだが、その追敷のないために、惘然みすみす五百圓を見殺しにするのだ、あゝ五百を二手に割ツて先陣後陣と乗り出しやア宜かつたものを、

あるだけ掴んで叩きつけた見當外れ、もう不可ねエ、無効だ、しかし成るも英雄また敗るゝも英雄といふ事があるから、沈香も灶かす屁も放らねエで五百圓を片ツ端からチビく喰ひ缺くよりやア萬事さツぱりとして寢覺めが宜いよ、もとの空阿彌、痛くも痒くもない道理だ、あはゝゝゝは乃公にやア金といふもの、逆も縁がないと見えるわい」

お島しみく聞いて何をか思案に沈みしが、やがて思ひ切つたる顔ふりあげつゝ膝すりよせて、

「ちやア何ですか、その五百圓まだ眞實に死に切らないの」

「さうよ、今ちやア半死半生の境だね、こゝで二の手がありやア盛り返すが、なきやア其まゝの往生寂滅」

「よろしい、追敷の百圓、妾が拵へませう」

「おや、おや、何といふ、百圓の追敷を」

「いかにも、明日の朝すぐに耳を捕へますから、破れかぶれの傘一本、もう一度おツびらいて御覽なさい、その百圓も五百圓の死神に誘はれて慾につられる慾の皮か知りませんが、どうせ乗り出した船、港で割るも残念ですから、せめて沖での難船は諦めの附けようもありますよ、それにまた第一が二番町への魂膽、よしこれで縁切になるとも、たゞ五百圓が空になりましたちやア

呵しくないから、萬に一つを賭けて二度目の運だめし、しつかり胴骨を据ゑておやんなさい、妾の衣類から頭の道具を外しやア百や百五十の物はありますから、それで愈々いけなけりやア夫婦もろとも手に手を取って一まづ此家を出ませうよ、一區に一年づつの繪を描いて暮しても、十五區で十五年は住める大都會ですものし。

いひつゝ起つてランプを引き寄せ筆筒に手をかくれば、健次おもはず飛び上つて横手を打ち、

「えらい、乃公の女房だ、かゝア大明神し」

「なんですよ、これンばかりの事で騒いでさ、塵埃が立ちますつてば、おとなしくなさい、小兒のやうに」

「はい、はゝアはつと此通り閉口頓首再拜の體、しかと御目に止りましたかな」

其九

もとより佐原男爵の時代めいたる豪傑肌を脱いで巧みに打込みし業といへ、かりにも五百圓といふ現金を三件の願望の尤も易き一件として、浮世の風來坊たる黒田健次に抛げ出せし上は、いづれ抛げ出して惜しからぬほどの理由もあり、また敗れても磨り切らぬほどの道理あつての事、な

んぞ此金を一場の投機に叩き果して丸潰れの空になりしとぞ知らん、ましてお島が身の皮を剥いで今ぞ盛り返しの死物狂ひの合戦最中とは知るべき、

豊殿の身に取つては五百圓の無事に返るをもて重疊とし、其上に露いさゝかの利を思はねど、そもく健次めが、かの五百圓によりて如何なる活動をやすべき、いかなる結果を提げて大手ふりつゝ來るべきかと、かねてより心に面白き奴と思ふだけ一入さらに待ち兼ねし一日の朝、奥の一室に夫人を招いて頻りに批評とりく、

「ねエ、過日黒田の願望の金を出してやつた時、早ければ七日目、大地を叩く槌が外れて遅くなるとも九日十日のうちには必ずと言ひ居つた其九日目は今日だが、どうだらうな、もし約束の期日を違はないで豫て言ふ廣言の半分を實際に出來す奴なら、いよ／＼面白い男だぜ、五百圓はおろか、あとの二件の願望も許してやる心算だが、和女は何と考へる、今日明日のうちに來るだらうか、

「左様で御座いますね、それほど固く申しました上は、いづれ参りませうが、さてまた約束の期限を誤つたぐらゐで蚊に螫されたほど心配する男ぢやア御坐いませんよ、良人や妾を伯父だの伯母だのと言つて、現在連れ添ふ自分の妻までを平氣で欺して居つた横着物ですから、油斷が

なりませんよ、此後どんな事をするかも、ですから妾の思ひますには、あの五百圓を縁切として、あまり近く御寄せ遊ばさない方が宜いかと考へます、
 「はゝゝゝなるほど、それも左様だ、女の氣ぢア無理もないが、また其處に彼奴の呵しい特徴があるのさ、針も薔薇に得もいはれぬ香氣ありで、いくら横着を極めても一節どツか憎くない奴だからな、第一がさ、恩人の乃公や和女を伯父だの伯母だのと吹き立てた法螺の貝が割れた曉に、逃げも隠れもせず忽ち飛び來つて、眞正面から委細を白状した魂膽といひ氣性といひ、とても尋常の奴にやア出來ない事だよ、だから乃公が思ふには、まさか彼奴が吐いた廣言の十分一も遣り得ないにしろ、ともかくも五百圓は其まゝ無事に持つて來るね、なぜツて、わづか五百圓で乃公を失ふほどの馬鹿ではないからね、いはゆる姦夫の首を斬る白癡でなし、おのが踏んだ犬の糞を盛り直して後から來る人にも踏まさうといふ奴でもなしさ」

早くば六日七日目、大地を叩く槌は外るゝとも遅くて九日十日目のうちには、恩借の五百圓たしかに持參の上、これによりて得たる幾何の利益、あはせて健次が活動の仔細を時の一興に供ふべしと、出づるまゝの廣言を吐き散らせし九日も過ぎ十日も過ぎて、十一日、十二日、やう／＼と十三

日の正午に近き頃、佐原男爵の大門より玄關に對うて入り來る影は健次と思ひの外、眞黒の大牛のツそりと歩み入りぬ、
 しかも其大牛の脊には千住の市場より積み出せし菰包みの葱と、銚子名物の焼印うつたる醬油一樽、流山の味醂二升、十斤入の砂糖桶一個、兩の角に水引を掛け渡して其間に大の鬘斗を貼りつ、鼻木の綱を曳く百姓男一人、ちよツ／＼と聲をかけながら玄關前に立ち向へば、取次の書生あツと呆れて何事と問ふ間も待たず、懷中より一封の書狀を出し委細これにと答へぬ、取つて見れば表面の文字に「佐原男爵閣下侍史、黒田健次再拜頓首」と認めぬ、

魯鈍の野生みだりに世事を輕んじ頭迷の猪勇いたづらに繩墨を破り候ため、今更ながら口は心ほどの活動なく心は五官ほどの活動なく、竟に失敗また失敗、健次の面皮たとひ鐵板をもて張り抜き候とも、もはや閣下に見えて再び罪を謝し恩を乞ふに違さらし無之候へば慚愧と後悔の重荷を脊負ひ候まゝ、満身大汗となつて逃亡仕り候、
 以上の次第、萬やむを得ざる場合とは申しながら、重々の恩に背き義に反いて逃亡いたし候ほどの健次、却つて御怒りを増し候儀とは相心得候へども、俗に唄ひ候通り編笠一介の

申譯として、聊か御厨まで差廻し候牛一頭、随分吟味仕り候ところ黒毛には候へども赤毛に劣らぬ美味との事に御座候、また附屬の雜物これも精々相選び候品にて、使者に相立候男一人、これには半年の給金すでに支拂ひ候間、水汲み掃除等の下男に御使ひ下さるべく候、また別に御便利を圖りて屠牛場の切手一枚相添へ申し候、

不義の奴 健次再拜

佐原公閣下侍史

さすがの男爵あつと呆れて、それといふまゝ健次の宿に人を馳すれば、彼奴等夫婦の影すでに去つて、閉て切りし表口に貸家札のみ小首を傾けぬ、

當世五人男に就いての白狀

次 健 田 黒
そもく五人男は皆これ浪六が竹馬の友にして、十餘年の昔、人事蹉躓の餘、さる山間の僻邑に會して眠獅庵と題せる草屋を築きし頃、いづれも一つ夜着を引ツ被ツて空腹を抱き合うたる刎頸の知己、さても其後さるほどに相散じて茲に八年、おのく事實は初志の十分に達せずといへども、川上三吉、倉橋幸藏、黒田健次、吉田雄藏の四人、今なほ身は健にして徒らに年少氣銳の往時を夢みるのみ、就中、黒田健次の如きは個儻不羈、磊落饒々、一味のうちの持て餘されものとして當時これを平賀源内と稱し、心機一轉せば忽ち英俊の域に及ぶべかりしも、憐れむべし現時わづかに山陰道の一地方に隠れて職を裁判所の判事に奉ず、ついで上田力は我黨これを武藏坊辨慶の再生と呼びしもの、常に戯れて義經なきを奈何せんと歎ぜしが、今を去る四年以前の秋月二十一日、誤つて人間の常にあらざる惨死を遂げたり、されば他日浪六が五人男の列傳を記するの際、涙と共に尤も筆を極め最も文を密にせんと欲するものは斯の可憐漢なり、死する時は行年二十八、滿面紅を帯びて兩肩怒ること山の如く、十七にして鬚髯を生じ、二十一にして體量十